

中央歐洲の東部を占め、半は農業、半は狩獵を業として、而して部落と部落と常に戦争に従事して居た。その宗教も外部に現はれた所では、戦争の神を祭つて、戦勝を祈り、穀物や植物の神を祭つて、豊年を祈つて居つた。此の時代のスラヴの宗教に就ては、ゲルマン人てキリスト教を是等人民の間に廣めた人の記録に残つて居る事實を綜合して考へる外ない。その中でも、十三世紀の宣教師サクソンの記録が吾々に多くの材料を與へてくれる。それて推察するに、是等の人は八九世紀以后だんくキリスト教に化せらるゝ前、又キリスト教に化した後も幾百年の間は、その昔の宗教上の信仰習慣を保存して居つたのである。

彼等は或る場合には小さな石の家を作つてその中にいろくゝの偶像を祭つて居つたが、夫れと共に又或は森、或は小山、或は洞穴などを神の住所として、其處に供物を持つていつて、神を祭つて居つた。その神を祭るには、或は一定の時に豊作を祈る爲め、或は又戦の始めに戦勝を祈り、戦の後は戦勝の感謝を表する爲めに、戦争の獲物捕虜をさしげ

たのである。其の供物は多くは野菜、パン、鳥獸肉、麻糸、布等であつたが、又随分人間を殺して犠牲に供したこともある。その一例に、ロシア人の君主であつたモスコワ大公ウラデミルが、九八三年にエーゲ人を征伐して其の捕虜をキーフにつれて歸つた後、其の内の一を犠牲として神に供へようとした。その中に一人の男兒て容貌秀麗なる者があつた。この男兒の父はキリシヤから來た者で、キリスト教徒であつたが、ロシア人がこの男兒を神々に犠牲に供へることを云ひ渡した時に、父はロシア人に云ふた。汝等の神々とは何者であるか、若し神々が生きて居るものならば、自ら來てこの男兒を見をつれて行くがよい、自ら來る事のできないような神々に汝等は何の爲めに犠牲を供へるか。思ふに汝等の神と云ふのは、手で作つた神、木で作つた神であらう。手や木で作つて又手で壞はせる神に犠牲を供へる必要はない。父はかく云ひはつて、ロシア人の命に應じなかつた。そこでロシア人はその父子の居つた家を圍んで、遂にこれを殺してしまつた、即ちこれは人身御供の

一例である。大公ウラデミルはこの後五年で、即ち九八八年にキリスト教に轉じて、その後この父子の事を思ひ出して、其の紀念としてこの家の跡に寺を立てた。その寺は今も尙聖母の堂として残つて居るのである。

尙一つの例をあげて見れば、ロシアの南部のドニール河の中に一つの島がある。その島に一つの大きな柏があつて、そこには神が居るとして、その河の洪水の憂を防ぐ事を祈る爲に常に供物を持つて行き、又人間を供へた事もあり、その風習は十世紀にも尙存在して居つた。その外或は橋或は城を造る爲に、その地盤に人を埋めて土地の神に供へたと云ふ話も多く残つて居る。

古代ロシア人の宗教は斯の如きものであつたが、其間にコンスタンテノポリの教會はこの人民をキリスト教に化する事を勉めて、遂ひに前に云つた大公ウラデミルを感化して、その人の力によつてロシア人の間に勢力を得る様になつた。大公ウラデミルは東帝國の公主アン

ナに結婚して、九八八年に洗禮を受け、バシリウスと云ふ名をうけて、それからは非常の熱心と威力とを以て自分の人民をキリスト教に化する事を勉め、或は今までの神像や神林を破壊し、或は一時に一つの町や村の人民に強いて洗禮を受けしめた。それで彼れが一〇一五年に死ぬ迄には、モスコワ公國の人民、即ち所謂大ロシア人の多數はキリスト教に化せられたと傳へて居る。その後四五百年間はこれと云ふ程の變化なしにすぎたが、十六世紀の中頃に、同じくモスコワ大公なるイワン四世は、位に即くに當つて威力を用ゐる勢を以て、單に大公と云ふ稱號に甘ぜず、皇帝と云ふ名を稱へる爲にコンスタンテノポリの教父ヨゼフの甘心を買つて、遂ひにツァーと云ふ稱號を教父から許された。ツァーと云ふのは、元とツァールの短くなつた呼方で、即ちロマ帝國の皇帝の義である。ロマ帝國は四世紀に東西兩帝國に分かれ、兩方共に皇帝を戴て居つたが、西帝國は早くに瓦解し、東帝國は十五世紀の半ば頃にオットマン人の爲に亡ぼされた。元來ロマ帝國の皇帝はコスタンテン

以來キリスト教の保護者として、キリスト教國の皇帝であつたのであるから、西帝國瓦解後は東帝國の皇帝が一人、皇帝として、又キリストの使徒として、所謂神聖帝國の政教一致の帝位を踐むて居たのである。その帝位が東帝國滅て後缺けて居つたのであるから、ロシア人の君主イワン四世がコンスタンテノポリの教父から皇帝の稱號を受けたのは、即ち東帝國の神聖なる帝位を繼承したと云ふ名義を得た譯である。こゝに於て、今迄の大公はツァーとして帝國の頃にはモスコワ大公國の版圖は、クリミヤ地方とボルテク海岸等をのぞいて現在のロシアと同じ大きさで、イワン四世はアジアの方や裏海の方に領地を擴張した人であるの君主であり、又その帝國の正統教會の長となつた。ツァーの稱號を得たのは、一五六一年であつたが、其後一五八九年に次の皇帝フェオドルの時にコンスタンテノポリの教父エレミアス二世の許をうけてモスコワに獨立の教父を作り、その下には四つの大司教を置いて、國內の教會を統治した。即ちロシアの教會は東教會即ち所謂神聖正統

使徒東教會の一部分として、然かもその内で獨立の教會として、ロシアの國教となつたのである。抑々神聖正統使徒教會、即ち希臘正教會は、前に云つたコシヌタシテシ帝の時にキリスト教がローマの國教となり、その後帝國が東西に分かれるに及んで、西帝國にはローマに一人の大主教があつて、それが法王となつたのであるが、東帝國では帝國の首府コンスタンティノポリを始として、アンテオカ、アレキサンドリア、エフェソに四人の大主教があつた爲め、東教會は従前のキリスト教の共和組織を維持して、主教の會議で教會全體の事を處置してゐた。それ故に主教會議の決議に従ふ限り、に於ては、東教會は全體の統一を有して居るが、各主教は各其の治下に自治權を有して居つた。これはキリスト教の原始の組織ではあるが、その統一は西教會が一人の大主教を法王として戴いて居るに及ばない。東帝國が存在して政治上の權力に依つて、その國內の主教を統一して居る間は、教會全體の連合統一も行はれたが、帝國滅亡後はそ

の統一もゆるくなり、元は帝國の首府に位置を占めて居つたコンスタンテノポリの大主教も、今までの様な權力を有せざる事になり、終にロシアの國教にも獨立の教會たるを許すに至つたのである。

元來統一のない東教會がかくの如く益々統一を失つて、アフリカ、アルメニヤ、クロアチヤ、ロシア等地方と國家とに従つて獨立の姿を呈する様になつた、その結果として東教會の二つの大いなる特色を造り出した。その一はロマ教會の如くに諸國家の上に立つて之を支配し、世界統一の教會組織を造り出ださうといふ様な理想を有せず、何れの國土人民の中に入つても、その國家の範圍で一つの教會を立てようとする事と、その二には此の如く分立した諸教會の間には統治組織の統一を保つ事が出来ない結果として、而かもその教會はキリストの正統教會であるといふ意識からして、その通性統一を教義傳承の同一なる事に求めようとした。この二の特性はロシアの國教として、又使徒教會を以て自任する教會として、希臘正教の性質を理會するに必要な事柄

であるが、此は尙後に細説しよう。

ロシアの正教會は教義の上では、固より何等の變化もなく、制度の上でも、十六世紀のモスコワ教父以來その儘で傳へて來たが、彼のペトロ大帝が國政を改革して都を聖ペトロポルヒに移すに及んで、それと共に教制を變革し、尙一層國教の制度を確立して、今までの教父の教會統治權を帝室に收め、ロシア帝國の皇帝は又國教の最上主教である事として、その下に神聖シノド(教務院)を置いた(一七二一年)。このシノドは十二人の會員で成立して、その首長は直接の發言權を有しないが、皇帝で、その副長は國中大主教の一人を任命する事にした。この教務院は固より教義を動かす權能はない筈であるが、教會に關する總ての疑義は此に決せられ、又國教として正教會の國家に於ける事務裁判はシノドの掌中にあるのである。而してこのシノドを中心とするロシア國教はロシア臣民の信奉すべき者であるから、先づ國民に對して至上の權を有し、皇帝は政教一致の主權者である。

その後エカテリナ一世の代(一七二六年)に、教務院の中に教會財産監理掛りを設け、教會に屬する寺院、學校の管理國民の教會納金の事皆此で處理する事になつた。その後政略には多少の變化もあつたが、ロシアの國教として正教會の組織は今日まで同様で、この教會は教理の上では七世紀以來國教制度の上では二百年來不變の正統教會を以て自任してゐるのである。而してロシア臣民は皆この國教を信すべき義務を有し、官吏になるにも結婚にも出産にもこの教會の信者としてその形式に従ふ事を要する。結婚の時夫婦の一方或は雙方がこの教會に屬しないなれば、それは許して結婚を許すが、その時に後來その夫婦の間に生まれた子は、この教會に屬せしむるといふ盟ひをなすのである。然し此等の義務は事實上の通りには行はれないで、國內には今も尙色々の派や異教も行はれてゐるのである。

此の如くロシアの教會は東帝國の繼承者ビザンチン正教の正統として唯一正統のキリスト教會であると自稱はしてゐるが、その中には

固より分派異論あるを免れない。之を古にしては十一世紀頃に西教會が北歐に宣教師を派遣して大に布教した時、ローマ法王は當時のモスコワ大公にも西教會に轉ずるのを勧めた。大公は之を拒絶はしたが、然しロシア人の一部は西教會に合併して、ロシア人の正教會内に異派分裂の端緒を開いた。現今ではこの合併派の多數は多くオーストリアの境内に住してゐるが、その一部分はロシアの地にもある。

然しロシア正教會が國教として立て後、その中に異端分裂の始をなしたのは十七世紀の始にある。この頃モスコワで地主の一族が段々に勢力を得て、土地を占領し、農夫を奴隸同様の小作人にして、終に政權をも左右するに至つた。この閥族は富と勢力とを得るに従て、國教教會にも勢力を得、而してそのポロランド風の奢侈に染まつた風習に従て、教會の儀式なども段々華美にするに至つた。時の教父ニコンはやはりこの閥族の意を承けて、教會の事は益々富者閥族の意で左右せられ、終にポロランドの聖書を習て聖書の改譯を施さうとするに至つ

た。そこで富の上、勢力の上でこの閩族を怨み、又信仰からは保守に偏した一般下民は大に之を憤り、改譯反對を機會として教父反抗の運動を起した。此一派が即ち異端(Raskolnik)と稱せらるゝ者の始めて、つまり閩族に對し、外國心醉に對して自己民族の古風と自由と信仰とを維持しようとした者である。それ故この派の精神は、いはゞ純スラヴロシア人の粹であつて、その中には自由獨立の氣象と、無邪氣なる而かも熱心なる信仰とが現はれてゐる。その後この派は甚しい迫害をも受け、又幾多の變遷をも經たが、その氣風は今日も尙種々の方面に發動して、或は貴族閩族に反抗し、或は小作人の自由の爲めに活動し、時には極端に走つては、かの猶太人(ユダヤ人は多く高利貸をして細民を苦める故)を疾惡し、又は異教に對する排外精神ともなるのである。

この派は此の如く總てその時代に反抗する性質を有してゐる爲め、大に迫害せられ、十七世紀の後半や十八世紀には、相率ひて北海の邊やシベリアに移住した者が甚だ多かつた。この事はロシア人の膨脹に

重要な關係があるので、彼等は宗教で團結し一村、一部落が常に進歩を共にする風を持つてゐるから、かれ等の移住する所には、如何なる不毛の地にも寒氣にも耐忍して、村落を作り、而して故郷に返るなどいふ考へなしに、同信の徒相率ひて移住した所を故郷としてその地で自由の生活をなし通すのである。貴族や富人の爲に故郷を奪はれても、どこまでも一部落團結移住して新天地を作り出すのである。彼等は貴族を惡むが、尊王の情と愛國心には富んでをるから、他日知能を啓き、物質上にも勢力を得るに至つたならば、今日の暗黒なるロシアを刷新して、眞にロシア人のロシア國を作り出すであらうと思はれる。彼等は今日は無知である様で、又色々の迷信をも抱いてゐるが、恰も佛國の農夫と同じく將來の國運を復活すべき根柢の力である。

十年前の調査では、ロシア政府はこの徒を百五十万と計算してゐるが、その實この徒は大ロシア人の中に多數を占め、今日は又ボルチク海岸の白ロシア人や他の人種にも波及して、明かにこの信仰に屬する者

だけでも千萬には下らない事は確である。況や又明にその所屬を知らないても、これと同様のスラム的精神と信仰とを有する者は、一般農民や社會黨學生などの間に存在して純ロシア人の半數を占めてゐるのである。而してその中にはトルストイの如き大精神や、外國に追客となつてゐる幾多の志士學者を有してゐるのである。

この派を大別すれば、(一)には正教會の司祭を戴いてその儀式を営み、假に正教會と調和してゐる者、即ち同信派 (Iednoverzi) (二)には純粹に古風を主張して總て教役者を戴かぬ古信派 (Starobrizi) 無役派 (Bespopozzi) に大別し得るが、固は此の中にも多くの區別があり、又純粹の基督教でなく、此に近い關係を持つた者が澤山ある。その中には神術や神智學の風を帯びて、古くは古代アキサンドリアの希臘哲學やアラビアの妖術などと氣脈相通じ、又近頃はかの神智學派の女傑ブラバツキ夫人を出だ思、或は又神人 (Sopri) と稱して割禮を行ふ者もあり、カウカサスやシベリアに流竄せられてゐる、宣誓と兵役とを拒絶する精神戰士

(Duchoborzi) の一派、又一定の住處を持つのを罪惡としてゐる巡視派 (Stimul) 又近頃首府で組織が出来た革新會の如きもあり、その他又甚しき迷信濫行の者も少くないのである。此等の中には固より異端ラスコルニクと關係なく、又精神傾向を異にしてゐる者も多いが、正教に對して自由を主張する點に於ては一である。

ラスコルニクは前に云つた様に、古風の信仰を固守する主義であるから、科學などの新思潮には反對し、同じ基督教でも他派の分子の侵入を防止するに勉めてゐる。此の點では、異端派は彼のニコラス一世 (一八二五—一八八二) が嚴密に國教を維持して外教を防いだ政略に一致してゐるが、然しアキサンドリア一世 (一八〇一—一八五五) や同二世 (一八五五—一八八二) が宗教の自由な幾分の寛容政策を採用した時、并に其以來この派は他の種々の異端と共に發達したのである。即ち一八七四年の寛容令でこの派に屬する者も正教派に屬しないでも結婚や洗禮の自由を得、又此頃には大にボルチク海岸に傳播したのである。

その外宗教の寛容で記すべき事は、アレキサンドル二世の時に外國の聖書會社が、幾分かの自由を得てロシアに入り得た事、その次の帝即ち先帝アレキサンドル三世が正教會の司祭を取り締つて彼等の智徳を進めようとし、それと共に正教以外でも高尚な目的の會合團體を奨励した事、此等の幾分の自由主義の下に社會黨や虛無黨が生長した事などである。然し先帝も今帝も、全國のロシア化を主義としてゐるから、政治上宗教上の自由は中々未だロシア人に恩澤を及ぼさない。特にシノド副長なるポベドノスツエフ (Pobedonoseff) は、虛無黨が一方の極端である様にその反對の極端を代表した人物で、彼れは出版の自由、議會制度を惡む事、蛇蝎の如く、裁判に辯護士を入れる事すら國權の作用を妨害する者と主張し、從て政治と宗教とでは極端に統一と專制とを固執してゐるのである。それ故にかれがシノドの長として皇帝に次の最高權をふり廻はしてゐる以上は、ロシアの外交はどこまでも侵略的で、又その教會の外國布教もその手足たるを免れない。

この外、カウカサスの南部地方にはアルメニア人が居住して、彼等は同じく東教會のキリスト教を奉じて、別の教會に屬し、今は他國領に居るアルメニア人と共に別に聖師 (Katholikos) の下にその教會をなしてゐる。このアルメニア人の問題は、ロシアとトルコとの間の重要問題であるので、十九世紀の始めにロシアがこの地方を占領して後は、アルメニア人に自由を許し、その教育をも奨励したが、一八八一年に皇帝が暗殺せられ、所謂スラゾフ黨がロシア化政略の壓制を國內に行ふに及て、アルメニア人も亦その壓制を被り、學校は閉され、アルメニア語の公用は禁ぜられ、又ロシア政府はその教會の獨立をも否認して、彼等をもロシア國教に入れる様にした。その結果、今迄トルコ政府のアルメニア人虐待には制限を加へようとしたロシア政府は、その後トルコ政府の暴政を許し、自國領内のアルメニア人をして他國領の同種と共同して自由を得ようとする様な望みを絶たしめようとし、英國政府がトルコ政府のアルメニア人虐待に抗議を提出した時にも、ロシアは却

戦争

てトルコを助ける様にしたのである。然しアルメニア人を國教に化
 しようといふ事は暫く中止して、一九〇〇年以來彼等の教會に屬する
 事を許されてある。自國領内のアルメニア人は、此國領内に居る
 次に、ロシア領内にも、羅馬聖教會の信徒も少くない。此は多くはポ
 ーランド(即ちポーランド)及びボルチク海地方のウタウ人である。新教
 は又多くはボルチクの海岸で瑞典に近い方のフィン人、ラップ、又南のレ
 テ等の間に行はれてある。この間に、回教は裏海の邊、カウカサス邊の土人、
 韃靼人、キルギス人、バシキ人等の間に行はれ、佛敎はカルムック(Kalmuck)といふウ
 ルガ河邊の人種間に存してある。此佛敎は蒙古や西藏と同系統で、真言風の
 妖敎である。彼等の唱する呪文は西藏で用ひる唵(om) 嘛(ra) 呢(ni) 叭(ve) 吽(hum)の
 變體である。此人民は元獨立の君主即ち汗(カ)の下に屬し、汗は西藏の
 喇嘛に屬してあつたのであるが、一七三二年、ロシア人は此地方を征
 服して、その汗(カ)を公認し、後その甥が汗(カ)を追て自ら

國と運

シロの宗教

汗となつたのも、亦ロシア人に捕はれて、一七三五年以來その繼承者た
 るタイシン汗はキリスト敎になつて、ペテロと云ふ名になり、今日ほそ
 の後昏は公爵と稱して、キリスト敎に歸し、人民の多數(十四萬の中十萬)
 は元の儘佛敎を奉じてあるのである。此く見て來れば、ロシアは國教として
 は正教會を奉ずるのであるが、その他中々複雑の宗教があるのである。今大
 數でその宗教別を擧ぐると左の通である(シベリアは固より此の外)

國教希臘正教會	大ロシア人	五、一八〇萬
異端ラスコルニク	小ロシア人	一、二〇〇萬
合同希臘教	白ロシア人	〇、一〇二
アルメニア教會	白ロシア人	〇、四三
羅馬聖教會(ポーランド、リタウ人等)		八三、〇〇〇
新教(フィン、ラップ人等)		二九、〇〇〇
猶太教(猶太人等)		三〇、〇〇〇

回教(韃靼、バシキ、キルギス人等)
佛教(カルムク人)
劣等宗教(サモア、イド人等)

二六・
〇二六
〇一六

一、希臘正教會の組織及教理

正教會はキリストの神聖の教を代表し、其救ひの實を擧げる職務を有する教會を以て自ら任じて居る。其故にその神聖の首領は、天に在るキリストの靈であるが、この世界で一定の組織を有しなければならぬから、教會統治の任務はキリストから使徒に委任せられ、使徒からして諸々の主教に傳えられた。そこでその始めには教會全體を決する爲めには、一々主教會議を開いたのであるが、東帝國滅亡後正教に屬する國々が獨立するに従つて、教會も亦國と共に獨立の統治機關を具える必要が起つて來た。現今では斯くの如き獨立機關を具えて居る教會が、正教會の中で十三に分れて居るが、其内でアレキサンドリヤ、コ

ンスタンテノポリ、エルサレム、アンテオカ等には國家に關係のない主教が教會の主權者となつて居る。其外ではロシヤ、セルビア、ブルガリヤ、ギリシヤ等の教會は各其國の政治機關に伴つた教會行政を有して、その國の範圍内で宗教上の主權を持つて居る。ロシヤの正教會は、前に述べた如く十六世紀以來國教としてこの種の教會行政機關即ち神聖シノツド(Synod)の統治の下に獨立して、直接に他の教會と交通する事なく、又今日では正教會全體の主教會議も開かれた事はないのである。

茲で序にロシヤ以外の正教會の組織をも略述して置かう。ギリシヤの教會は、元コンスタンテノポリ教父に屬して居つて、其國の中心であるアゼンスの主教は教父の申出て、トルコの皇帝から任命せらるる習慣であつたが、十九世紀の始めにトルコから獨立して後、ギリシヤ國民は教會組織の上に於ても獨立を希望してコンスタンテノポリ教父の命ぜざる主教を任命した。この事は一時紛義の種にはなつたが、

一八五〇年、教父も遂にその獨立を公認して、それからキリシヤの國教はロシアの國教と同じ組織を有して居る。コンスタンチノポリの東縛を離れて一人のメトロポリタンの下に獨立の教會を作つて居る。セルビアの教會も又同様で、國と共に獨立して今はその首府ベルグラードに教會の首部を置いて居る。その外ハンガリーの國內の正教徒は各々その地方の教父の下に獨立して、今日は三つの獨立教會を作つて居る。アルニメヤの正教會も又同様であつて、トルコ、ベルシヤ、ロシアの三國に誇つた教徒で一つの教會を作つて、その首長はシスの教父として教會を統治して居るが、その統治權は甚だ薄弱で、各國政府の干涉壓制を免れないのである。それから又ヨシメタン、テノボリやアレキサンドリヤ等の教父は、歴史上の因縁で、貴い稱號と資格とを有して居るが、その實は各々その地方に居る少數の教徒を支配して居るに過ぎない。

かくの如く觀察すれば、正教會はロマ教會の如く國家以上の教會組織並に統一權を有する力のないもので、名は一つの正教會ではあるが、其實は多くの國家的教會であつて、それが歴史と傳承とに依つて連絡して居るのみである。そこで直接に日本にある正教會の處置如何といふ問題が出てくるのであるが、この問題の解決は至極簡單である。三萬の日本正教徒は、ロシア國教に屬するか、若しくは獨立に日本正教會を組織するか、この二途の外ない。なぜなれば、正教會にはロマ聖教の如く國家を越えた法王を有しない。コンスタンテノポリの教父は東帝國の存在して居つた間こそその全體の法王であるかの如き位置を持つて居つたが、現今は何等の實力のない地方教父である。それ故に日本の正教徒がこの教父に隸屬するといふ事は固より無意義である。それならばロシア國教に屬するかといへば、これ又日本臣民たるの資格と撞着する。然らば日本正教徒が採るべき途は只一つで、即ち獨立に日本正教會を組織して、一人の教父の下に一つの獨立教會を作

る事である。かくすれば日本正教會は、恰もハンガリー國內の正教會と同じく、ロシアやギリシヤの國教と相對立したる一つの教會になるのである。

教會組織に次て、儀式の事は又正教會の重要な事柄になつて居る。この教會は前にも述べた如く、古風を尙び、キリストの時代のまゝの儀式を行ふと云ふ事を必要とし又誇りとなして居るのである。それで儀式を公私の二つに分けて云へば、私の側では、信徒は各々キリストの像、反聖徒の像、或は遺物を自分の本尊として持たなければならぬ。然してその像は畫でなくて、古風のモザイク若しくは彫刻であるを要する。十字架は信徒の凡て携ふべきものである。これらの守本尊に對しては、時を定めて拜跪するを例とする。公けの儀式は甚だ複雑で、色々の表象がある。その聖堂の建築は皆ビザンテン風で、司祭の裝服、香爐の形、讃歌の譜、凡てビザンテン風を保存して居る。其儀式を行ふに當つては、器樂を用ゐずして聲樂のみを用ふる。音樂に續いて短い祈

禱の言葉を捧げ、會員全體でリタニを唱えるのである。それ故に説教は通常はこれを行はない。その儀式の用語は各のその國の言語を用ゐて差支ないのであるが、それもなるべくは古語を用ゐる。即ちロシアでは古スラヴ語とギリシヤ語とを併用して居る。日本の教會では日本語を用ひて居る。

尙この教會の儀式に付て注意を要するのは、その古風の中に古ギリシヤの風を傳へて居る事である。例せばその洗禮の如き、ギリシヤの古代のミステリヤの行法そのまゝで、オステルの夜、受禮者は白衣を纏ふて聖堂に入り、舊信者は堂の口に整列してこれを迎える如き、全くギリシヤの古風である。又晚餐式に用ひるパンに酸酵しないのを用ゐる事も同様である。そうしてこれらの古風に付ては、各神聖の意味があるとして解釋せられて居る。

教理に付ても正教會は全く古傳を維持する事を主眼として居る。即ち第一に重要なるは、三二五年に開いたニカイヤ公會の議決即ち萬

能の創造者である神の獨子で吾等の主であるキリスト、及び聖靈を信ずるといふ信仰箇條で、これに付てこの議決に關して種々の追加をした七つの公會決議がその教理の根本である。是等の議決に基いて教理を整へたのは、八世紀の始めに出たダマスコのヨハネが書いた「智慧の泉」正統信仰詳論である。これより以來正教會の教理は少しも變更なしで、唯一度十七世紀にその趣意を表白した事があるのみである。この表白はコンスタンテノポリの教父キリルといふ人が、スイス國で修學した結果、多少改革の意見を信仰に加へようとした時、他の人々はこれに反對して、その教父を放逐し、種々合議を開いた後、尙一度正統使徒教會の表白といふものを議決して、この議決がモスコワとコンスタンテノポリと兩教父の裁可を経て、これから以後、正教會信仰の動かすべからざる標準となつたのである（一六四三年）。此表白は問答體でできて居つて、極めて通俗的に正教の教理を述べて居る。その内容を云へば、第一には信仰、第二には善行が吾等の救ひの道である。この二つ

は正統神聖キリスト教徒の永遠の生命を得る爲に缺くべからざる道で、この表白には信仰と善行とを信愛望の三ツに分けて述べて居る。教理信仰の標準は、是等の議決と表白とに具つて居るが、その根本は固より神から與へられた聖書で（但し黙示録は疑問）、其解釋は一に聖靈の教ふる所と定まつては居るが、信者は教會の命令する以外の信仰を抱く可からざる事は勿論である。殊にその教會はギリシヤの古風を受けて智慧の途を重んじ、信仰といふ事も知識を第一として、キリスト以下教會の聖人は即ち吾等に眞理を啓示してくれた人であるとする。其教理の内容に付て云へば、第一に三位一體の教理は他の教會と同じく、教理の根本であるが、その内でロマ教會に於ける如き後世の附加は少しもこれを許さない。例せば聖靈が神より來るといふ教に付て西教會は神と子とより來ると教ゆる。その子 Filioque の一字を東教會では邪義として排斥する、これが有名なる Filioque の問題である。三十餘年前にロシア國教と英國々教とを結合しようとした時に、この一事

が非常なる疑問となつて、遂に結合を果さなかつたのである。また前に云つたダマスコのヨハネの信仰表白にも、現に聖靈は父と子とから來るとあるが、教會はこれを解釋して聖靈の來る源は父のみである、キリストはその媒介者になつたのであると解釋してゐる。斯の如き頑固な保守はつまり *filioque* の字が西教會で附加したものであるから、これを排斥するといふに歸する。其外神とキリストに關する教理は他の教會と大差ないが、尙一つの特色は聖徒と共に天使に祈禱をする事で、神に對する禮拜 *latreia* と是等の天使に對する崇敬 *doxologia* とを區別するのである。

人類が罪に墮落して、爲に神に背いたといふ教理も、又他の教會と區別はないが、少しく異なる點は、罪は肉體のみに附着して居るので、精神はやはり元の通り神から與へられた自由と潔白とを保存して居る。只精神が肉體の内にやどる爲に多少肉體の誘惑に曳かれる傾向を持つて居る。その傾向は凡ての人間に免かるべからざる傾向で、聖母マ

リアも又これを免れないと教へる。この點は西教會とも新教徒とも異つて居る。

かくの如き罪の肉體を持つて人間が如何にして救はれるか。その救ひの力は神から來るか、人間の力であるか(日本佛教の眞宗の安心で云へば法であるか機であるかといふに同じ)、この問題に對する正教會の解釋は十分明瞭ではない。只吾々がその精神に善を欲する傾きを持つて居る。この善の精神が信仰と善行とに依つて段々に開發し、神の力に助けられて救はるゝといふのである(即ち佛教で云へば純自力と純他力との中間である)。そうしてその信仰の第一義は前にも述べた如く教會の教理を眞として受ける事で、かくの如く眞理を信受すれば善を行ふ事が多く、善を行へばそれだけ神の力を得、愛と望とを増長する様になる、即ちこれが神の恵に接して救はるゝ道である。キリストはこの眞理を吾等に傳へ、神の力の媒介者である。即ち正教會の教では、キリストの職務は主として眞理を傳へる人で、新教でキリストの

死が吾等を救ふ力を有すると教へるのと大に異なる。尚信仰と善行とを増進する爲めには、教會で行ふ七の機密式 *Seven-enti, Muortpna* を受けて、其有形の表象に依つて救の力、神の恵みに接する事を要する。七つの機密式とは (一) 洗禮 (二) 按手禮 (三) 晚餐式 (四) 入聖式 (五) 懺悔 (六) 結婚式 (七) 受膏式 (臨終の) である。是等の機密式は皆キリストの自ら定めて置いた所であるとして、其傳來を聖書の中に求め、又其方式も古式を保存する事を主眼として居る。

要するに正教會の教理は大體に於ては、他の教會と大差なく、その異なる點も、今述べた如く門外から見れば、それ程大切なる差異とも見えない。然しその差異を大切とする點が即ち正教會の特色で、古風を保存する、傳承を重んずる、従つて信仰を知識の方面に求むる、これが即ちその特色である。嚴格に云へば、正教會は斯の如き傳承主義の外に宗教的の生命に乏しい教會である。それ故に、その司祭の多數は只儀式を營む役目をするのみであり。その學者も教理に關する傳説を知つ

て居るのみである。只その教會の中で、その宗教的生命を幾分か維持して居るのは、修道僧と一般人民の無邪氣なる信仰に存して居る。然しこの修道僧も道德の腐敗と共に段々宗教上の生命を失ひつゝある。一般人民と雖も、無邪氣ではあるが、無知蒙昧で、その上貴族の壓制に苦しみ、貧に苦しみ、到底活潑なる信仰を發揮する力を有しない。是等の人民の間に生まれて、同胞の苦痛を救ふ熱心と、自分の眞摯なる信仰とに依つて、活きたキリスト教を發揮しようとするトルストイの如き人が出たのは、殆んど不思議な様である。が砂漠の中にも何處かには水がある如く、化石したるロシア國教の人民の中にも神の靈が尙滅しない證據である。

(廿七年四月)

ロシヤ人の信仰とロシヤ國運の將來

敵國としてロシヤの運命の將來は、我々に重大の關係ある事は云ふまでもない事である。世人は一國の國運を推測し豫算するのに、多くはその國の富や兵力や又政治組織に着目するが、又此等は一國の國運にとつて大切な事ではあるが、それと同時に我々の忘れてならぬ事は、その人民の信仰である。詳しくいへば、國民の資性、精神、又道德上の修練や、國民が自分の天職に關する覺悟、自覺は、國民の前途に對して有力な分子で、一方では富力や政治と共に、この精神的基礎が重大な關係をその國運の上に及ぼす事は、餘程の注意を要する。近い例が日本の國運を判斷するには、その商工業の發達や、立憲政治、自治制度の運用や、又兵備國防の事のみで十足とはいへない。國民精神の基礎、或は忠君愛國、或は武士道、或は死後の信仰などを打算して、でなければ、今度の戦争の成行きも豫測は出来なかつたに相違なく、又將來の發展を觀察する

事も出来ないのである。それと同じ様にロシヤ國民の運命を觀察するにも、單にその政治や國力だけで十分の判斷は出来ない。殊にロシヤは國民一般と政府との懸隔の甚だしい國であり、その上その社會的生活から政治組織、今迄の歴史上の成行などが非常に密接に宗教に關係し、國民の行動と人民の信仰、或は傳承、或は迷信とが離すべからざる關係を持つて居る國であるから、その運命を判斷するに、信仰の觀察は最も大切なことである。今日では人民の間に異論こそあれ、ペトロ大帝以前には人民は擧てその君主の位は神の賜であり、その國家の天職はコンスタンテノポリに都して、東ロマ帝國の繼承者としてキリストの正教を世界に發揚するに在ると信じて、それで國家統一の基礎を成してあつたのである。今日は大ロシヤ人の少くとも一千萬の人民は今のロマノフ家の帝位を惡魔の化身と見なして居るが、それにしてもロシヤ人が神の特命を蒙り、世界をキリスト教化する天職をもつてゐるといふ信仰が色々の方面に活動して居る。これ等の信仰が今後

どれ丈け續くかは疑問としても、その國民的運命はなほ百年やそこらの間は、決して人民の信仰と關係を絶ち得ない事は明瞭である。

一體ロシア人は常識を備へないかの如き不思議な人民で、その性質には著しく異りたる表裏兩面を備へて居る。現在の快樂幸福の前には小兒の如く歡喜雀躍するかと思へば、その裏面には運命に對する沈痛な信仰、即ちあきらめの精神に富んで、如何なる不運や災害が來つても、平然とこれに對しこれを忍ぶのが常である。即ち感覺が鋭敏であると同時に遲鈍であるが如く、花の下にも蛇が潜み、波濤洶湧の底には千尋の深みがある如き趣がある。彼れ等は人生天然の總ての事柄に神の力が顯はれ、總ての事件には皆深い神祕的の意味があると信ずると同時に、又それ等の神祕を自分の利害に應用しようとする實利主義を有つてある。彼等の住してある國の風土が極端なる二面を備へて、夏になれば終日快晴で、風薫り花匂ふ世界に殆んど夜のない生活をすゝるが、冬になればその反對に、殆んど全く日光を見ず、風と雪とに攻めら

れ、暗黒の空にきらきらした星を眺めて、天と地と相接する中に生活し、その間には又北光の恐ろしい赤や紫の焰を仰いで、天然の威力に壓倒せられる。彼等が渺茫たる廣原の内に住んで生活の保護者と仰いで居る大森林は、時に出處の知れぬ火にやけて、家をも村をも灰燼にしてしまふ。彼等が半年の勞苦で作り上げて一年の食料と頼む麥畑も、天を蔽ふて來る蝗の爲めに一朝皆無に歸してしまふ。その天然が人民に沈痛の印象を與へると共に、その今までの歴史も彼等をして運命を忍受せしむる様にした。匈奴の侵入で苦しめられ、ペストの流行になやまされ、内では貴族に虐げられ、外からは強敵の侵入に遇ひ、あらゆる不幸を経て來た人民は、只管神に頼み天に依り、その恵みが何時かは自分等を幸福にすると信じて、自ら慰むる外なきに至らしめた。それ故に彼等は運命の抵抗すべからざることを見ると共に、又神の力が總ての悲惨を除く唯一のたよりであると信じてある。現在の世界は悪魔の世界である、現在の政府はアンテキリスト(神の敵)の塊であると信じ、

その悪世の終に神の裁判が總ての善惡を賞罰すると信じて、如何なる艱難も不幸も靜かに忍んでこれに堪える性質を養つて來た。

斯の如き信仰の人民であるから、望みを未來の彼岸に置いて、全くこの世界を無視するかと想像せられるが、事實は全く正反對で、彼等には未來世といふ様な考は殆んどなく、唯神の裁判がこの世界に顯はれて、この世界に神の國が出て來るといふ事を唯一の頼みにしてゐる。それ故に運命とあきらめて何事をも忍受するかと思へば、又時には其反對に出て感情の激したに、乘じては生命をも顧みず、その感情その空想の爲めに、非常なる勇氣と力とを顯はして來る。表面は無神經な様でも、裏面には恐ろしい感情の熱火を貯へて、それが爆發すれば、何物をもその感情の犠牲に供する事を辭しない。

一般にいへば、ロシア人の信仰性質には、斯様な極端な兩面を備へてゐるが、その宗教を觀察するには、又矢張り二ツに別けて見なければならぬ。即ち一つはその國家の國教である正教と、一つは之れに反對な

所謂ラスコル(異端)とである。正教は十一世紀の始にモスコワ大公がその人民をキリスト教に化して、後十六世紀の中頃、即東ロマ帝國の滅亡した後、モスコワ大公が皇帝の名を稱へ、モスコワの主教が教父の稱號を得て、隱然東ロマ帝國の政教一致の國家をロシアに移したに基いて居る。即此時からロシア皇帝はもとキリスト正教の保護者であつたロマ皇帝の相續者を以て、自ら任じ、その國家と帝位とを助けて正教の首長であるモスコワ教父がその教會の云はゞ法王となつて、國家と宗教とが相俟つて宗教的國家、國家的教會を形造つたのである。而して東ロマ帝國の首府であつたコンスタンテノポリは、百年前から既に回教國の首府となつて居つたのであるから、ロシアの宗教的國家の理想は、このロマの舊首府をキリスト教に回復して、ロシアの皇帝はコンスタンテノポリに都して世界に君臨すべきものであるといふことにならざるを得ない。匈奴の侵入も跡を絶ち、國勢が漸く盛になり、國家の統一が政教一致の基礎でだん／＼かたまるに従つて、この理想

抱負は益々盛んになつて來た。ペトロ大帝の時に、都はかほり、政教の組織が變じて、この信仰と希望とは變らないで、スラヴ人種の勢力を結合して、トルコを亡ぼし、古の東羅馬帝國を回復しやうといふことは、國家の國是であり、人民の理想であつた。ロシアのトルコ南侵は、一つはもとより實利の上からボスフォラス海門を得やうといふにあるが、その根本の考、即ち人民と政府との力を結合して熱心に南侵を企てしめた所以の原動力は、即ちこの宗教的國家的信仰にあつたのである。この信仰は今なほ人民の念頭を去らないのであるが、七十八年の外交失敗以來政府の政策は暫く或は永久に、鏡を東歐から東亞に轉ずるに至つた。これが即ち今度の大失敗の原因である。

實利的の方面からいへば、歐洲列國の壓迫の多いトルコに出るよりも、他の方面に出る方がロシアの利益であつたかも知れない。そこで政府の有力者は、その國家の宗教的組織よりも、又人民の信仰希望よりも實利を重んじて、最も障害の少ない方面と見た。それはあやまりであ

つたが東亞經營に熱中して、地中海に出るよりも太平洋に勢を張らうとした。この計算のあやまりであつたことは戦敗の結果に十分顯はれて居るが、その失敗は單に日本の實力を誤算した點にあるのみでなく、其裏面には元來建國の理想に背き、宗教的國家の性質を捨て、人民の信念に背戻した點が、一時の誤算以上の大失敗である。貴族や政府は西歐文明の空氣にふれて、十九世紀の帝國主義、植民政策に感染して、今迄の政教一致の國是から出たトルコ侵略を古めかしいとして斷念し放棄したのであらうが、人民は十九世紀の人民でなく、その信仰は依然として十六世紀の思想で動いてゐる。彼等の多くが喜んで或は又止むを得ずに神の代理として戴いてゐる皇帝が、羅馬帝國回復の爲めに異教徒であるトルコ人を攻め、コンスタンテノポリを争うといふならば、彼等は神に對する信仰に依て戦つたであらう。然るに今回の戦争は、名も知らなかつた滿洲の爲めであり、近い異教徒を措いて遠い國と戦うのである。假令へ政府や教會が、日本人は異教徒で匈奴と同じ黃

色人種であると鼓吹して、人民の敵愾心を煽動しようとしたにしても、人民に取つては、トルコに對してコンスタンテノポリを目的とする程直接に感ぜられない。彼等の多くは何の爲めに誰を敵として戰つてあるかわからない。況や又シベリヤは罪人を流す恐るべき土地として一般に知られてゐる、其先きの滿洲の爲めに戰ふと云ふことは、彼等に取つて寧ろ奇怪なる事柄である。實利兵力を外にして、ロシア戰敗の大切なる原因は、即ちトルコに對して、勝を得たと同じく、この民心信仰の關係に存する。利害政略からいつても、三國同盟の弱點に乗じて露佛同盟の力で、直ちにトルコを突いた方が利益があつたかもしれないが、それは別として、東亞經營の失敗は、外では日本を敵とした事と、内では國家元來の理想を直接に行ふべき方面を捨て、爲めに民心を一にする事が出来なかつたためである。かく云へば、國教主義の代表者ともいふべきシノド次長であるポベドノスツエフが、日本に對する頑固なる主戰論者であることは不思議な様である。然しこれは即ち政府

でも教會でも、貴族政治の有力者が追々望みをトルコに絶つて、元來のロシヤ建國の性質を變更し、その政教的理想を轉じて偏に侵略を目的とするに至つた結果で、ポベドノスツエフの如きは、皇帝の神權を主張し、國家の宗教的天職を信ずる一點に於ては、眞面目で頑固な保守家であるが、彼はその國家教會の結合がロマ帝國の遺傳と離すべからざる關係があつて、この目的以外、もしくは目的以外に遠い侵略は、建國の大本、民心の歸向に反くものであるのを忘れたのである。

廣大なる國土と雜駁なる人種とが統一せられて、一つロシアと云ふ國民を作り出だし、その勢力を中心にして、ポーランド、フィンランドを初め、四方の土地人民を合せたその力の根本は、單に人種の方でなく、利害の關係ばかりでもなく、實に此宗教的信仰がその大切なる原動力である。ロシア人の中でも、大小并に白ロシア人などが結合してゐるのは、十世紀以來養つて來た人民の信仰が、十六世紀に明かに政教一致の國家として成就した爲めである。即ちロシア國民の團結は、宗教的、

その侵略主義も亦宗教に基いた勢力であつたのである。東亞侵略はこの足臺を捨て、國民の力を外に濫用せんとしたもので、今回の失敗はベルリン條約の爲めに元來の理想を捨てた自然の報である。國教の方面から觀察してロシアの國民的團結は割合に鞏固なものである。然しながらその國民的勢力が眞の舉國一致の態度で東亞に再來するのは決して近い將來にあるとは考へられない。もとよりロシア正教は今までもろくの異人種に接觸し、これを包括して來た結果、割合に異教徒を容れる度量に富んでゐる。カルムク人の佛教に對しても、蒙古、西藏の喇嘛教に對しても、中々籠絡の政略を巧に使ふ。西藏人に對しては、その古來の傳説を利用して、西藏の教主、北方の守護神シャンバラは即ちロシア皇帝であるといふ様に、宗教的に籠絡を行ふのであるから、その勢力は侮り難いものではある。然しその政府がコンスタンテノポリを捨て、他の方面に國力を耗す所以を十分に人民の信仰に徹透させ、貴族や政府ばかりでなしに、人民の後援ある侵略の腕

を東方に延ばすのは決して容易の事でない。

國教の方から見ても、ロシア政府と人民とが一致して東に延びることとは、かくの如く困難であるが、國教以外の宗派の信仰を觀察すると、この困難はなほ一層である。茲に異教といふのは、ロシア國內にある天主教やユダヤ教などの事ではなく、元來のロシア人のキリスト教の中で、今の國教に反對する所謂ラスコルである。ラスコルの性質を知るには、その歴史を尋ねる必要があるが、元來十世紀にロシアに入つたキリスト教は教理よりも儀式を重んずる風であつた。その上ロシア人は大部分農夫であるから、習慣形式を重んずる保守的の人民である事は昔も今も變らない。彼等は禮拜の時に二本の指で十字架をかく、晚禱式に醗酵しないパンを用いる、十字架に接吻する、これ等の儀式をすべて些細な點まで嚴密に昔のまゝ、キリストの教へたまゝに行はなければ無効であると信じてゐる。例へば今日でも尙顎髯を剃るのを嫌ふある軍艦の水兵が髯を剃れといふ士官の命令に背いて、遂に不従順の

罪でシベリヤに流されても、遂に神様から賜はつた又神様も有つてゐる鬚を剃るのを肯なかつたといふ事がある。兎に角、彼等の宗教は形式の宗教で、祖父の行つておつた事は君命よりも重い、習慣は即ち彼等の信仰である。然るに十七世紀の中頃に、ニコンといふ教父が教會の祈禱儀式を統一する爲めに、色々變革を試みた。ニコンの變革は寧ろ復古的運動で、十世紀以來ロシア人の間で變化をして來た雜駁なる風を古に回して統一しようとしたのである。然るに人民は、今まで二本の指で書いた十字架を三本の指にしては十字架の効力がないと感じ、「神よ我等を恵め」といふ祈禱に「オ」と云ふ呼び言葉をつけては、神に對して無禮であると考へ、なかなかこの變革に従はない。色々争ひの末、ニコンの變革は國教の制度とはなつたが、保守的の頑固黨はどうしてもこれに従はず、遂に國教以外の異教、即ラスコルとなつて、今日はモスコワを中心として、ノヴゴロドから北の方、一般にこの宗派が多く、その人數は少なくとも一千萬を數へる。

ラスコルは右様の成り立ちであるから、地方によつて各々その地方の習慣信仰を保存し、全體には統一を持つて居ない。従つて其間には幾分か國教と調和しようとする者もあれば、又極端に國教のみならず總て現在の社會組織を破壊しようとする者もある。例へば最も極端なものには、絶對に結婚を否認し、財産私有を不義と見做すものもある。かくの如きラスコルは社會主義や虛無黨と密接の關係をもつてゐるが、兎に角ラスコルとしては虛無黨の如く無宗教ではなしに、神の信仰を大本として現在の社會國家に反對する。それ故に彼等は一般にニコン以後の教會並に國家を惡魔の造つたものとして、神の裁判にはこれ等の教會や國家は皆破滅せらるゝものと信じてゐる。彼等は教父ニコンに反對した如く、それより以後のすべての帝王、殊にロシアを西歐化したペトロ大帝に對しては最も憎惡の念を懷いて、ペトロは惡魔である、ニコンの私生兒であると信じ、その子孫の帝王は皆アンテキリストの顯はれてあると云つてゐる。彼等の信仰では、ユダヤ教で教へ

る如く、神の裁判の日には、神から遣された救主が現はれて、これ等のア
ンテキリストを亡ぼすのである。それ故に彼等のある者はナポレオ
ンが即神の使であると思ひ、ナポレオンは眞に聖ヘレナで死なずに、何
處かに生きておつて、再びロシアの帝王をたゞきつけに来ると云ひ、そ
の肖像を祭つてゐる。(モスコワを焼いたのは人民の愛國心から出た
のではなしに、偶然の火事であつたと云ふことは、今日歴史家の證明す
るところである。)この方面から見ても、ロシアの貴族政治は國民の内
に強敵を有し、その東方經營、膨脹政略すべての十九世紀的方針は内部
に一千萬の強敵を控へて居るのである。今後ロシアの革命運命など
を觀察するにも、此邊の關係を忘れてはならぬ。

ラスコルは保守派であるが、同時に又自由主義である。保守主義と
自由と相容れない反對の現象の様であるが、茲にもロシア人民の特質
が顯はれてゐる。ラスコルは保守的であるが爲めに今の國教に反對
する、従つて教會組織をもたない。彼等のある者は教役者を戴かず、又

或者はこれを戴くにしても、その任命は一定の資格或は儀式で出来る
のでなく、人民の自由の選擇である。これ故に、彼等の中で或は特別の
信仰あるもの、若くは特別の技量のあるものは、衆人に推されて其教師
となる。一體ラスコルは國教の束縛の下に隠れてゐる秘密結社の様
なもので、多くは一村一部落が擧つてこの秘密結社に加はつてゐる。
ロシア人の習慣として村や部落の自治制度はなか／＼發達したもの
で、彼等は云はゞ經濟行政の自治と共に、宗教上の自治團體を成して、そ
の内で自由に教師を撰ぶ。それ故に彼等の間には色々の教を傳へる
豫言者が現はれる、狂熱ある説教者が出る。質朴なる農夫のラスコル
は直ちにこれに従ひ、神の如くその人を敬ふ。恰も日本の祕事法門や
或は近頃のアウンハラバの如く、或は英國のアーヴィング派の如く、新
しい教師を自由に撰び、新しい教を新らしい狂熱を養ふ。彼等は保守
的であるが爲めに自由なる宗教を造り出だしたのである。例へばト
ルストイの如きも、かくの如き豫言者の大なるもので、その少し前には

北部の一村落到スラエフと云ふ豫言者が出て愛の教を傳へ、惡に敵する勿れといふ一點で信徒を集めた事がある。その又前には、英國のラドストクといふ貴族がロシアの上流社會を感化して一動搖を與へたこともある。スラエフが説教で村人を動かした同じ教を、トルストイは文筆に依て世界に宣布し、ラドストクは之れを實際社會のサロンに傳へたのである。ラスコルの精神のある處には何處でも偉人、豫言者、狂熱家を歓迎し、その刺撃で新しい信仰を得、新しい運動を起す。彼等は祖先傳來の儀式を神から與へられたものとして尊敬する様に、敬服すべき豫言者には滿幅の誠意を捧げて之れに従ふ。彼等の知識は淺薄であり、彼等の信仰は迷信に近く、彼等の道德は高くないにしても、彼等には質朴な精神があり、素直な心情があり、それに依つて人に動かされ、一旦動いては必死の力を注いでその事に従事する。彼等の生命はこの點にあるので、ロシア從來の國運はこれ等人民の覺醒に依て大なる變化を生ずる事と考へらる。ジョージ・ケンナン氏が親しく語られた

のを聞いても、ロシアの農夫は外面は遲鈍で無神經の様であるが、その實際随分智力もあり、感情に富み、意志の力を蓄へておるとのことである。かくの如き人民が猛然として改革運動を起したならば、その勢は恐るべきものであり、かくの如き頑固で自由で熱心なる宗教的人民が一旦目を醒まし、統一的の勢力を造り出だしたらば、その將來には有望なるものがあることは明かである。

さて今度の戦争がこれ等のラスコルに對して如何なる影響を與へたかと云へば、彼等の當の敵である國教の教會と皇帝の政府とがその信用威嚴を墮とした爲めに、彼等の自由精神を刺激した事は慥かに保證せられる。彼等は或は日本の天皇をナポレオンの再生或は神の使と信じてゐるかも知れない。彼等の尊信して居るユダヤの豫言者が、ユダヤ人の敵であるアッスリヤ帝國を亡ぼしたペルシヤのキエロスを神の特使と仰いだ如き感情を以て、驚いて日本を觀察してゐるのであらう。これ等の動搖の結果、彼等の中に新しい豫言者が續て出るので

あらうと云ふことも想像せられる。これ等の點はこちらの想像であるが、戦争の結果慥かにラスコルに利益を與へた、若しくは彼等に勇氣を與へた事は、所謂信教自由の詔勅である。ニコラス二世の如き意志の薄弱なる君主が與へた信教自由の保證そのものに幾何の確かさがあるかはもとより疑問であるが、そもかくの如き詔勅を一度ても、又假令へ反復論旨であるとしても、出さなければならぬ様になつた時勢そのものは、ラスコルに取つて大なる力と喜とである。頑固派の國教論者ポベドノスツェフが辭職するに至つた事も亦同様である。

ラスコルに對する國教の壓制は變遷一様でないが、ペトロ以來非常な壓迫を加へても、彼等は屈しない。北海の濱に流されても、シベリヤの野に追はれても、彼等はその信仰を枉げず、到る處信仰に依て團結したラスコル村を造り出だして今日に至つた。國教が彼等を苦める武器は、國教以外の結婚を正當と認めないことであるが、ラスコルは自分の結婚を正當と認められない、自分の子供が國家からは私生兒と認め

られるといふこと位には少しもこまらぬ。彼等の中には結婚を否認するものすらあるのである。色々の壓制もその效を奏しない爲めに、エカテリナ女帝、アレキサンドル二世などは寛容の政略を取り始め、それが爲めに、ラスコルは今迄よりも勢力を擴げて、今日ではポルト海の岸にも多くの黨與を得たのである。この時にニコラス二世の信教自由の詔勅が出たのであるから、その實が直ちに行はれないとしても、將來ラスコルの勢力を増す基となり、従つて國教と政府との勢力を殺ぐ一原因になることは明かである。

將來のみならず今日でも、ラスコルの社會的勢力は侮るべからざるものである。一寸想像すれば、ラスコルは無知で貧乏な農夫のみであるかの様に思へるが、彼等の内には大富豪も少なからずある。さきに言つた如く、ラスコルは自治の技量に富んである。政府の壓制の下に、狼の如き官吏に苦しめられつゝ、その間に何事も自分の力に依る習慣を養つて、農商工業に達してある。恰も支那人が政府の保護を頼まず

に自分て富を造り、自分等の間で自治團體を造つて行く様に、ラスコルは官吏の壓制を免れる爲めに必要な金を蓄積することに最も長じてゐる。モスコワの商工業の實權は、ユダヤ人とラスコルとの手にあるといつても差支ない。それから又地方の農民で、正直に租税を納めるものは國教の信者よりも、ラスコルに多い。彼等は皇帝を惡魔のものと見るにも拘らず、正直に租税を納めるのは、つまり惡に歎する勿れといふ格言を實行し、カイザルのものはカイザルに返せといふ教を奉じてゐるためである。兎に角ユダヤ人と共にラスコルを除いたなれば、ロシアの富の力は甚だしき損害を被ることは確かである。

彼等は惡に敵しないとしても、惡を憎むことを知つてゐる。今までの境遇が彼等に忍受の性質を養ひ來つたが、その忍受が反撥的に活動する機會を得たなれば、彼等の激烈な感情と頑固な忍耐力と相合して、如何なることをするか殆ど恐るべきものがある。但し今まで並に今後の革命運動が政府の力に對して弱みを感じずるのは、全體に革命派並

にラスコルの間に統一のないことである。さきにも述べた如く、ラスコルは自由に分派をつくり、地方に従つて習慣をも信仰をも異にして、その分派の數は到底計算に上ほらない。これが彼等の弱點で、彼等の上立つてロシア全體を統御する有力なる政府が必要なる所以である。近い將來にラスコルの間に統一の氣運が起つて來るとは想像出來ないが、戦争の結果、政府の弱點が顯はれ、信教自由の詔勅が出たりなどしたことは、彼等が現政府並に國教に反對する氣憤に勢力を與へるに違ひない。

即ちロシア國運の近い將來に就いて容易に想像し得ることは、政府や國教の統一的勢力が減じて地方分立的となり、今迄外部に膨脹し、侵略した勢力が多くは内治の爲めに用ゐられなければならぬ一事である。如何なる種類の國民議會が開かれるにしても、或は又如何なる革命が起るにして、國家並に教會の中央集權が衰へる事は確かである。即ちこの點は政府の保守論者が極力すべての自由讓歩に反對する所

以て、一分の自由讓歩は即ち一分中央集權を弱め、皇帝と教會との威嚴を減ずる譯である。貴族政治の人々から見れば、ロシアと云ふ國家は國家と教會との絶對權なしには存在しないも同じである。ロシア國民は存在しても國家は存在しないのである。それ故に大公連やボヘドノスツエフや貴族派が自由讓歩を以て國家滅亡の端緒と見做すのは、彼等の位置なり見方なりからして至當の見解である。然しながら、彼等の所謂國家は戦争の爲めに全くその弱點を暴露して、今までの様な虚假嚇を以て異人種宗教の國民を壓倒する事の出来ない様になつた以上は、ロシアの前途は分裂あるのみである。假令へ國として分裂しないにしても、實行上の分裂が尙一層明かに國の内治外交に關係を及ぼすことは十分豫想し得る。然しながら如何に分裂しても、如何に混亂しても、ロシア人全體が全く國民的意識を失つて、英國服従以前の印度の如くなつてしまうことはなからう。何故なれば、ラスコルは孤立的であり獨立自治を好むとしても、同じくロシア人であるといふ意

識、即ち神の特命を受けてキリストの教をこの世界に普及する人民であるといふ覺悟は容易には消滅しない。彼等は信仰と地方とで分裂して居ても、この覺悟と今までの共同の歴史とで團結を維持し増進するであらう。近い將來は別にして、遠い將來にロシア國民の恐るべき點は即ち茲にある。

この國民的意識は、國教信者もラスコルもロシア人として共同の點であつて、國教信者が頑固な保守主義を脱した時、ラスコルがその自由主義を十分に發揚した時は、即ち彼等が共同の國民的運動を起すときでなからうか。若くはその反對に、國教主義者はその君主神權や國家神聖の考を捨て、無信仰の民となり、ラスコルはその極端な破壊主義を實行しようとして、國民の瓦解を促すときはなからうか。この二つの想像の何れが事實となつて顯れやうか、その判斷は想像の外ないが、何れにしてもロシアの將來が國民の信仰と密着の關係をもち、一方では正教派の政教一致主義と、他方ではトルストイの如き幾多の豫言者

の宗教とが或は相争ひ或は相合して、その國民の將來を支配すること
 丈けは確かである。吾々の想像若くは希求する處では、形式的な國教
 主義が漸次勢力を失つて、その中から自由主義も出て、それがラスコル
 風の熱情な宗教と合して、ロシアの將來を支配すると考へられる。ロ
 シヤ人全體が十九世紀風の西歐文明に感染して實利無信仰の國民と
 なつてしまふとは考へられない。

思ふに、二十世紀の世界文明は十九世紀の實利的競争の反動として
 餘程精神的の方面に發達するであらう。日本の戰勝が其國民生活の
 精神的素養に歸着する事、英佛の協和が利害問題と共に兩國の文明の
 歴史に原因して居ること、米國の對外政策が餘程世界人道の爲めとい
 ふ(少くとも名義だけとしても)考に支配せられて、それが國是の力にな
 らうとしてあること、これ等の外二十世紀の文明が精神的方面、信仰理
 想の關係で大に發達しようといふ氣運は今日益明かであると思ふ。
 ロシヤ國民の將來も亦その貴族政治の十九世紀政策を打破して二十

世紀的の國民文明を造り出だすであらう。この時になれば、ロシア國
 民は既に日本の敵でなく、却つて世界文明の上の良友となるであらう。
 ロシヤ國民をしてこの方面に進ましむる豫備として、その貴族政治の
 打破を助けた日本國民は今後も尙かの暴虐なる政府に對する人民の
 後援をなすべきでなからふか。

(廿八年七月)

一億の斯拉ヴ人ある忘るる勿れ

同胞よ戰場の勝を以て時局の終結とする勿れ、平和克復を以て枕を
 高うする勿れ。戰艦は撃滅すべし、敵國の官僚政治亦恐くは戰敗により
 て一大頓挫を來たさん。而かもその背後には、尙一億の斯拉ヴ人ある
 を忘る、勿れ。

今回戰爭の勝敗につきてその原因を論ずる者一にして足らず、その
 原因亦決して單一にあらず。然れども我が上下一心、官民戮力、庶民悉

く一國の運命を負擔して國家の爲に奮起せし事と、敵國の官僚政治が獨りその剛愎を逞うせんが爲に此戰を挑發し、而して下民は與り知らざるのみならず、又實に戰爭を好まざりし一事は、勝敗の主要なる原因なりしは疑ふべくもあらず。戰敗の結果、敵國の官僚政治がその勢力を失墜するは、一月二十二日首府職工の一揆以來、一度鎮靜に歸するも、鎮靜の後に又爆發あり、壓抑に對して反抗あり、一變毎にその程度と規模を大にして來れる一事に明かなり。一波一瀾、寄する毎にその強さを増し、來るロシア一億の人民の勢力は、恐らくは弱點を暴露したる官僚政府の終に抑壓し得る處にあらざらん。姑息ながら皇帝が政治上の自由に一歩を譲り、信教の自由に保證を與へんとしたるが如き、皆人民の勢力と政府の威信との消長を示さざるなし。此の如くにして政府の弱點は人民要求の力を強め、反亂、抑壓、反動、反抗幾多の波瀾は、此に次で襲ひ來るべし。而かも一事の隙として明かなるは、その結果終に閥族的惡政府の代はりに、ロシア一億の人民の自治を得べき事なり。

その形式は或は立憲政治とならん、或は又分裂したる聯邦ともなる事あらん。何れにしてもその終局は頭大虚飾の閥族政治を倒して、眞正に人民を基礎としたるロシア民族の一國を東歐の天地に現出するにあらん。事此に至らば、そのロシアは今日のロシアに非ず、今日のロシアを打撃し得たる者必しも、今後のロシアを破り得じ。

由來スラヴ民族は忍耐の氣象に富めり、外面鈍るなが如くにして中に熱烈の情緒を具え、その情火一度び爆裂するや、隱忍は轉じて瘁猛となり、如何の力を現はすや測り難き者あり。今迄壓制政府の下に苦められては、この力は組織統一を以て發表せざりしも、それが個人特に文人、志士、音樂者、學者に現はれたる一斑を見ても、スラヴ民族の忍受と熱烈とは、驚くべき者あり。且つ彼等が政治的組織力に至りては、シベリア、蒙古、北海の岸等、到る處彼等の流人が組織せる自治村落に於てその一端を示せり。

此の如き人民がその頭上の壓抑を排し、自由にその政治を組織し國

民的團結を成し、その文物を開發するの日は、即ち彼等が數百年來辛慘の中に養ひ來りし忍と勇との發揚し來る時ならざるべからず。而して若しスラヴ民族今後の歴史に此の如き日來りしならんには、彼等をしてその官僚政治の束縛を排するを得せしめたる大恩人の、少くとも一人は我等日本人なり。然らば今日の政府としては我等の敵たるロシア國民も、その人民より見れば我等と彼等と互に良友たらん、少くとも東歐と東亞とに有望の將來を有する儕輩たるを失はざるべし。ロシアの軍隊を破り、ロシアの政府を打撃したるの故を以て直にその人民を敵視し或は輕蔑するは誤れり。スラヴ民族は數百年の歴史によりてその忍受の力量を示せり、而して今や螢火の國民的運動の中より、燦然文明の中に、異彩を放つ準備時代にある人民なり。ロシアの將來を考ふる者は、政治軍備のみの打算を以て萬事を律すべからず。表面に現はれたる彼等の國政以外、更に一億の有力なるスラヴ族の民衆あるを忘るゝ勿れ。

(廿八年七月)

理想と信仰

戦へ、大に戦へ

戦へ、大に戦へ (249)

「多くの國々を旅して國土民風を察して歸て來た人に、何れの處でも人間に通じて見得べき性質は何であるかと問ふた人があつた。此の間に答へて其の人の云ふには、人はどこでも疎懶であると。然しよく考へて見よ、疎懶といふよりも臆病といふ方が適當ではあるまいか。然り、人は總て臆病である。彼等は在來の風習や他人の思惑で自分を蔽ふてゐる。本音をたゞけば誰でも、何れの人にも、此一生は大切の一生あてる、前往未來幾何の生を享けたとしても、今の此の一生は唯一の一生で、自分自らの存在の意義は此の一生の中に發揮しなければならぬ。此の尊い一生を夢の如くすごして、自分自らをも知らずに死て逝てしまつては甚だ馬鹿氣でゐると、こう思はない人はない。然かも多くの人は此の一念を惡念であるかの様に祕し、又之を壓抑しようとする。嗚呼是れ何の故であるか。まこと人間は臆病な者である。」

此の冒頭で始めて滔々數千言、大哲人シ、ペンツエルを論じ、苟くも生を此の世に享けた者は飽まで剛毅に、又飽くまで率直に、自ら信ずる所を貫くこと、此の大哲學者の如くてなければならぬと云ふ事を喝破したのは、即ちニーチェの「教育者としてのシ、ペンツエル」である。ニーチェの我執を喜ばない人には必しも其の偏した我執論、個人主義を信ぜしめようとはいはぬ。が、只總て現代の人々——政治家といはず、教育家、學者、文學者といはず、宗教家、藝術家等、苟しくも自分の事業が單に手足の労働でなく、精神の事業に従事し、又社會の精神を支配し、嚮導すべき人々——に一つ眞面目に熟考してほしい事がある。其れは他事でない、人々が自ら内に省みて、自分は自分に忠實であるか、自分の行動のみならず、思想、感情、信仰が果して怯懦臆病の分子を含んで居らぬか。此の一事について自ら欺かずに考へてほしいのである。國の爲に盡すにしても、人を教導するにしても、目的は何にあるにしても、其の事を行ひ、其の原動力となる者は自分ではないか。然らば自分を知らず、自分に

忠實でなしに、どうして國の爲めに盡し、又は人を感動し、支配する事が出来よう。自分自らに對してすら臆病に、自分に忠實にして率直猛前する事の出来ない人間が如何にして國に盡し人を利する事が出来ようや。

誰れでも平和を好まない者はない。然し今の人々は安逸で平和を強いて求めようとはしないか。自らを棄てても安平を得ようとするてはないか。平和は美名で妥協は美事である、然し一生の中心である自分を棄てても買ふに値する者であるか。自分を棄てて、かいつて其れで何の平和安逸がある、何の爲めの平和である。

蓋し人の本音をたゞけば、誰れか自分自らを知らない者があらう、又自分の一生の貴重である事、自分が總ての事業の源泉であるべきといふ事を知らない者はない。然るに此の自覺を蔽ふて強て世と協同するといふ美名の下に自らを棄て、終には節操もなく確信もなく、協同は降服となり、平和は安逸となるので、つまりは臆病が萬病の基である。臆

病であるから疎懶になり、自信がなく、熱心がなく、終に自分の處在を失つて自分の事業をも忘れ、世間社會をも棄て、自ら目前の利を追走り、此の小利の爲に世俗と共に浮沈する様になる。日本の政治界は今や明かに此の臆病症に罹かつておるではないか。教育も文學も此の疎懶病に呻吟し、宗教も藝術も此の昏睡病に陥ておるではないか。

此等の事實を一々事例で證明するまでもない。社會のあらゆる方面で雄辯の缺乏しておるのは、此の事實の明白なる證明である。雄辯とは辭令を巧にし身振りを弄するの謂ひでない、自信を告白するに過ぎない。自ら信じ自ら守る所があれば、人は其の信によつて其の率直なる告白によつて人を動かす力を獲るに違ひない。此の告白が即ち雄辯である。人々の精神の間に何か交感響應の存する以上は、一人の精神の衷心から出た信、其の人の生命なる信は又其の交感を受くる人を感動する力がなければならぬ。其れ故に眞摯の氣象ある社會では雄辯が大切なる利器である。言ふ人も、信あり、さく人も、眞面目である。

から、雄辯が多くの人を動かし、活氣ある信が社會生活——政治にしても宗教にしても、——の原動力となつて行く。眞摯な社會の雄辯は、鳥類が雌雄相呼ぶ聲の如き者で、協同も此に依て行はれ、祈伏も此で行はれてゆく。然るに數年來の日本社會を見よ、希臘や羅馬の様な雄辯はなくとも、政治社會特に議會に於てはせめて英國々會に於ける位の雄辯を生ぜしむる主張と雄辯に耳を傾くる眞心とがほしい。然し議會の形勢が待合て決せられ、議員の良心が金で買はるる現状で、どうして雄辯が出ようか。宗教に於ても同一である、宗教の説教や演説は糊口の具である僧侶社會に、どうして人をして思はず感涙に咽ばしむる如き雄辯がさかれ得ようか。一時雄辯家を輩出した基督教界で、今日は只一人の海老名正君の聲が聞こえるのみであるのは、即ち彼の教徒中の信仰が銷磨し、意氣が銷沈した爲である。

苟くも信のある人、主張ある人があるなれば、其の人は自分の信を以て人を感化しようとするに違ひない。又堂々と論陣を張て敵と戦ふ

事を辭する筈がない。今日雄辯の聞こえないのは即ち信のない證據である。假令信はあつても、直往慕進之を告白し之を宣布し、總て他の利害を捨て、之れが爲に戦ふの勇氣がないのでなからうか。即ち人は皆怯懦疎懶である。世間の思惑や、生存の利害の爲に妨げられて發し得ない位の信なれば、其れは眞正に信と稱し得るか。信は人の精神の生命である、精神交感の愛である。此の生命、此の愛が小利害の爲に外部の事情の爲に壓迫せらるゝのは、即ち其人の精神に生命のない證據である。生命なき人に主張なし。主張がないから、戦ひも得しない、又戦つて場合によつては潔く降服も得しない。勝つ事も出来ないから、又負ける事も嫌ひとなる。つまり怯懦の一言で盡してゐる。多くの政治家、宗教家は此の點に於て相撲取りにも又博徒にも劣つて居るといはなければならぬ。徳川の中世以後、兩刀を携へた武士は怯懦のなまくら武士となつた時、勝つか負けるかの一六勝負に所謂「勇氣」を鍛練したのは、大江戸中獨り「男」と稱せらるゝ博徒であつた。然し此の

状態は徳川の昔でなしに、今日の大日本、大東京に於て日毎に見得る實状ではないか。

羅馬では市民は即ち盡く政治家で、其の政治家は随分一場の演説人を動かしては忽にして、大共和國の大統領にもなり得た。其の代り又敵黨に論破せらるれば忽にして敗餘の身となり、時には生命をも失つた。それ故羅馬の市民は自國の政治を自分の命と心得て、萬事命がけの覺悟を以て行つた。リエンチが貴族黨を倒さうとして、彼等に敗られて死ぬ時に、最後の羅馬人「今死す」といつた、其の言は實に前後千數百年間の羅馬市民の生命であつたのである。日本でも維新の際の政治家は其の言動、献策皆命がけてやつた。其れ故彼等の言動は總て眞面目であつた、血を以て自信を行はうとした。未曾有の大變革を僅に數年の擾亂で處理し終つたのは、一に此の眞摯の氣象、堅固の自覺に基づいたのである。

熱烈なる自覺自信から出た、不惜身命の事業態度は、政治家に於ける

よりも宗教界の方に多かつた。提婆菩薩が破邪顯正の大法幢を掲げ、大都の字に街に立つて大師子吼をなしたときはどうであつたか。彼れは自らの首を賭して法戦を試みた。「若し我れ法論に於て墮負せられんには、我が首を論敵に與へん、其の代り我れに墮負せられた者があれば、歸して我が弟子となれ。」此の大覺悟があつたから彼れは外道に暗撃せられて死ぬ時にも、勝利は己れの者である事を自得して、莞爾として死に就ついたのである。以下此の如き人は枚擧するに遑がない位である。日蓮の析伏も此であつた。サデナロラの焚死も此が爲である。ペテロが一旦羅馬城外に逃げ出して復引き歸して教に殉じたのも一の信を貫く爲であつた。此の如き忠實の信があつたればこそ、一時は基督の徒を迫害して其弟子の一人を石で殺したポロも、天上の光明に接しては忽に基督の教に歸し、基督の使徒となり、其の福音を異邦に廣めたのである。自信があるから一片怯懦の氣がなく、怯懦でないから一去一就盡く正々堂々、勝つも負けぬるも服するも服せらるゝ

も、一分外から動かされ、利害に追はれるのでない、皆悉く自分の自覺から湧き出る。

嗚呼世は餘り多く平和の味を貴びすぎるなり、平和の惰眠になれて其の眠より覺むる能はざるなり。蓋し何れの世、如何なる人でも時としては、自覺を發揮し來て、自家の理想の爲に勇奮しようといふ考へを生ずるものである。今日の意氣銷沈の政治家にしても、宗教家乃至教育家にしても、若し深夜獨り醒めて自己靈性のさゝやきに耳を傾くる時には此の如き經驗を嘗め、徒爾にして止むべきでないと思ふ事の全くないではなからう。然るに夜があけて自分が再び社會の續紛たる活動の中に出て、周圍の事情に迫られ、前途の多難を思ふと、昨夜の心胸は夢の如くに過ぎ去て、茲に再び利害の人となり、利を追ひ易きに就くの人、所謂俗人 Alltagsmensch となり、且つ理窟をつけて色々に自分の怯懦を辯護するのである。一點の怯懦は即ち萬事を殺すの原頭で、一分外部の事情を顧慮する事は、即ち總ての自信を放擲し、盡く勇氣を挫折

するの始めてある。理想窟をつけて自ら辯解して、實世間の事は複雑であるから、とても理想通りには行かぬ者として、而して其實世間に調子を合はさうとする一事は、即ち人に屈従し世間の潮流に押し流さるゝ始めてある。事此に至れば、うまく世間と調和して自信を行はうなどいふ伶俐の考へは到底行はるべくもなく、終に只管世と共に浮沈し、他に押し流されて、此の伶俐な考へはどうしても行へない様になる。世の人が調和を貴び平和を好む代價は此の如き者である。平和を願ふのは即ち降伏である。調和は即ち敗亡である。一點の現實主義は即ち自己の滅亡である。

自己の滅亡は獨り事業の上で恐るべのみでない、思想生活の上では尙一層明かである。今の人は、自信のあるなしは問はずとするも、何故に疑ふべき事をも疑はずに其の疑ひを壓迫し、思はんと欲する所も退けて一日の安を偷むのであるか、一言懷疑の事を云へば直ちに懷疑を奨励する信仰の敵であるといつてさわぐ。其の騒ぐ人はそれならば

疑ふべき事を疑ひ盡して安立の地に立つてゐるのであるか。思ふだけ云ふ者があれば狂だとして排撃するが、其の排撃する人は何故に思ふ事を隠すのであるか。隠して自らをも人をも欺く人は此の如き連中の中に多くはないか。

世に哲學者、倫理學者といふ者がある。彼等は其の研究で人生の問題を解き得た、人生の歸趣を把へ得たといふ。此は誠に結構な事である。然るに彼等は詩や繪畫や音楽が人に理性以上言語以上の幽玄を語る一事を如何に説明するか。否、彼等の中の幾人か果して、人々が日常言語や顔附で思想感情を交感する一事を知了せりと言ひ得る人があるか。言語が口から出て空氣に音響となつて耳に入る、聽神經が刺激せらるゝ、腦中樞に變化が起る、彼等は此れで精神交感の理を説明し盡したと信ずるか。音の音階や調和で音楽の美が分かり、色や形や刷毛つきて繪畫の妙は分かる。世の學者なる者の萬事に分かりの早いには驚かざるを得ない。自分の存在も人生の歸趣も此くの如くにし

て分かる。恰も林檎の落ちるのは地に向ひて落ちたるのだとして分かつて居つたニールトン以前の思想家の如く、萬事手輕るに分かりが早い。此等の人は吾等が自分自からの存在も分からないのを怪むてあらう。然し我等如何に愚なりと雖も此れ位に分かることの出来ないでない。然し一旦心を潜めて、如何にして言語で精神の交通が出来る親子や夫妻の愛は抑も何物である、死せる天然を愛して其中に慰藉を得るのは迷であらうか、此く考へ來ると分らない。否分らないといふよりも寧ろ其の間に何か大なる神祕の存在するのを信ぜざるを得ない。其の神祕に打たれざるを得ない。世の多くの哲學者倫理學者は分かりが早い故に、何物も分けてしまふ。耳目に觸れたるまゝに分析してしまふ。其の分けた事柄が如何に統合せらるべきかを棄て、自分と自分との愛する者をも分けて、其れて泰然としてゐる。自分が愛する者がどうし自分の心胸に力を持ち得るかをも疑ひとして問はない。問はないから又其の力を深く味て、其力を十分に開展するこ

とをも得しない。此は事例の一であるが、今の學者は兎に角分りが早くて安樂である。安樂が安逸となり、安逸が無力となりはしないか。今の學界に大論議の生ぜざるは平和の徴であらうが、此の平和の價は實に此の如き無力で買ひ得た者でなからうか。

世に文學者、藝術家といふ者がある。彼等には文は筆の先きの花で、美術は朝飯前の製作である。一つモデルを捕へて之を小説に書く、書に描く。其の結果がモデルの眞に似て、其れて顧客が多ければ得々として成功の人、大詩人、大畫家となる。此の如き芽出度き成功は賀すべしであらう、然し藝術の本領から云つても、藝術家自身の遠大の名譽の爲に計つても、此の如き芽出度きは大に排斥せざるを得ない。吾等は固より理想主義を以て藝術の極致と心得て居る。が此の自家の主義を以て直に他を排斥しようは云はぬ。理想にしても、寫實にしても、各其の好む所、赴く所、又能くする所があるので、此等の異種の傾向は各の人々の根本性格から湧いて出る自然の要求、本然の趨勢である。藝

術を楽しむにしても各自らの赴く所能くする所に従つて進むべきである。其れ故に吾等は自己の好む所を以て直に他を律しようとするのではない。然しながら今の世に寫實を標榜する多くの文人、畫家には果して寫實藝術の本領についての自覺があるか、又其自覺に基いて慕進するの勇氣があるか。

故樗牛が曾て今の文士小説家に時代精神を描けといつた。其時に作家の側からの反響として、それなら今の時代精神はどんな者であるとの問ひが出てた。此の反問は大に冷笑の紫肯に當つた者と思つての間ひであつたのであらうが、此の一事が如何に現代の多くの作家に自家の本領に關する自覺と自信との缺乏してあるかを示して餘りある。寫實を標榜する作家であるならば、現代社會の實狀潮流に就て深く究め、又深く看破する所がなければならぬ。若し此の覺悟と精勵とがあるならば、批評家の言に先て大に時代精神の描寫乃至暴露に勉むる事、彼のイブセンやソラの如くてなければならぬ。然るに此の如き

奇問を以て評家を冷笑し得たりと思つてある作家は、即ち此の注文を不愉快に感ずる人であるからである。今日の多くの寫實家は其の實少しも寫實家でなく、自己の狭い見分の某々の人物事件をモデルとして綴補飾してあるので、社會の潮勢なり又人心の傾向なりについての汎い觀察を、具象の作に現はし、以て一代の達觀的寫真乃至照魔鏡とする人々でない。其れ故に其の作の多くは云はば大きな寫實藝術の材料に過ぎない者、一小品、一スケッチに過ぎない者をひきのばした作のみを出してある。今は一々の作品を批評する目的でないから、一々の實例は擧げないが、スケッチの作家であるから想が盡きる筆が枯れる、同じ型の人物同じ成り行の事件を名や處を變へて描く。小説の進行には必然の關係ない間話を挟む、活動に關係なき叙景や叙事を引きのばす。甚しきに至ては勉めて實感を起さしむるの様の文字を臚列し、又くすぐる様にして笑はせようとする。全篇の統一や性格の發展について見るべき事の如きは實に希數である。要するに作家の多く

は小成に安んずる。平和調和迎合阿諛滔々として此れが一代の文運と稱せらるゝ者である。抑も寫意とかモデルとか云ふのも皆盡く自己の偷安を飾る辯解に過ぎない。

枝葉技藝の末にのみ走つて、藝術の本領を忘れ、此れによつて平和を買ひ、小成に甘んじ、塗抹を事とするのは、獨り小説家のみでなく、畫家特に西洋畫家に多く見る病である。今日日本の西洋畫は「作」と稱すべき者でなくて、材料である、エチュード、草紙である。而かも一エチュードを畫いて可なり、刷毛が運び、色が出るなれば、其の人は忽にして大家で、其の畫風のみならず、其人の畫論まで滔々たる摸擬者を得る。パリ博覽會に於ける日本人の西洋畫に對する萬口一致の批評——あんな油畫をやるよりも何故に自分の日本畫をやらなかつたかの批評は、果して我が洋畫家を憤激發せしめたか。吾等は三年の後歸來して、此憤憤のなかつた事、少くとも其れが結果に現れて居ないのを見て大に悲み大に悵然たるを禁じ得なかつた。固より輸入以來二三十年しか經過せ

ぬ洋畫に對して吾等は大きな注文をなす事の無理なるを十分承知してある。然し其の結果は未だなくとも其の傾向努力の今日に見え初めないには驚き又失望せざるを得ない。

繪畫に對する吾等の失望は又移して有形藝術にも及ぼさざるを得ない。然し音樂や彫刻に對しては、今日は尙繪畫に對する程痛言するに忍びざる點もあり、又彼れに於ける如き惡風潮の見ゆる程にまでに至らぬから今日は黙しよう。兎に角今日の藝術界は平和を好みすぎ、自信がなく、主張がなく、従て又精進と勇氣とに乏しい。古日本の美術は漸く凋落し始め、古美術の名家は段々に世を去り又去らうとしてある今日、少壯の藝術家、新風潮を起すべき新時代の相續者が此の如く老成的に固まり、休み、眠り、どうしても平和を破る大勇猛を起さなかつたなら、今後日本の藝術もどうなるであらうか、實に寒心の至りである。將來の運命について特に關心すべきは日本の宗教である。佛教の中に隨分耆老もある、篤信の人、高德の人、博學の人もあるといふ風聞

である、然し此等の耆老高德、今將た何の状にあるか。又青年宗教家の中には新知識、新信仰を標榜して革新とか洗滌とかの意氣を有する人のないでもない様子であるが、其中の幾人が果して信仰を有するか。老人側の佛教家の頑冥て而かも逢迎投俗に巧なるは今更云ふまでもない。戦争があれば従軍布教師となつて佛典中の戦争論を持ち出す事は知つて居る。佛教は厭世的だと謂はれると厭世でないと言強辯護する、眞俗二諦を名として俗諦の爲に眞諦を潜めてある。此等の佛僧は佛前に勤行する事は知て居つても眞に宗祖の精神を渴仰して之を直に今の世に行はうといふ自信も勇氣もない。轉じて青年を見れば稍自信と抱負のある如くである。而も彼等の所謂新信仰は已に佛教でない、否殆んど信仰でない、口舌の論議を弄し、宗教を茶話とし、信仰を笑柄とするに過ぎない。此の如くにして而も尙佛教徒と稱して居る。此で尙自信と稱する事が出来るならば、其の自信や畢章自欺に過ぎない。彼の人々は何故に斷乎として佛教を排撃し乃至宗教無用論を

唱ふる事、彼の一時日本主義の人々のなした如くする事が出来ないか。彼の人々には老輩僧侶の老猾もないが、而かも怯懦なるに至ては彼等と異なる事はない。畢竟佛教の現状は熱情に乏しい、宗祖を信じて、其の人物信仰を身躬ら體現しようといふ勇氣のない、云はゞ氣力銷磨の病に陥てゐるのである。佛、隨、の、人、格、の、中、に、佛、性、の、化、身、を、崇、拜、す、る、事、も、な、く、又、佛、陀、の、信、を、色、讀、し、よ、う、と、し、た、宗、祖、の、人、物、信、仰、に、絶、對、的、に、信、頼、す、る、事、も、出、來、ず、し、て、何、が、佛、教、で、あ、る、か。人、格、合、一、の、信、な、く、し、て、何、處、に、宗、教、の、生、命、が、あ、る、か。

基督教特に新教に至ては又殆ど云ふに忍びない。國家主義に阿附し、現世物主義に執着し、明にロゴスであると教へられたるキリストの人格の中に神性を發見し、此の神性の人、人間に對する神の代表者を信ぜずして、何がキリスト教である。進んではキリストの中に自らの信を安立して世と戦ひ世を化するの勇もなく、さればとて退ては基督教を棄て、斷然世俗の中に入る力もなく、此き如くにして宗教の死骸に

附着する。此が今日新教徒の多數の趨勢ではないか。舶來新製の神學論、媒介神學の調和説、此の如き者が日本の基督教の生命である、興奮劑たるに過ぎない。ジエイトの徒が戰國の末に日本六十餘州を風靡した時の基督教は此の如きものではなかつた。平和を持ち來らせりと思ふ、勿れ、我が福音は世に劍を持ち來らす爲であるとの祖訓を今の新教の人々は如何に解釋し、又如何に信じてゐるのであるか。

一時新興國を以て自ら任じた國民の文物は總て惰眠を貪りつゝある。人は意氣銷沈し勇氣沮喪してゐる。世には審々の誠もなければ、諤々の論議もない、否問々誠ある人はあつても誰も之に同情し感服する者はない。師子吼の響きは有ても、聲者のみの社會は之に應ずる事もなく、又反抗する事もない、多數の人は眞面目でない、皆一時利害の人である。信の人でなくて、狡猾の人である。自分が眞面目でないから他の人に對して眞面目に感服し、若くは眞面目に戰はない。利害の爲に動いて自信から出る喜びの發揚もなく、怒りの發表もない。近くは

滿洲問題に對する國民の態度でも、一體に意氣の沮喪は知らるゝ。吾等は今之を政治外交の問題として論ずるのではない、一國士氣の敗類は即ち他方で、文物、人文の衰類の一の徴候であるから此に就いて一言するのである。開戦論は先づ教育ある中等社會多數の傾向であるらしい。然しながら見よ、開戦論者の多くは如何なる見處があつて開戦を主張するか。其の論據は一に利害勝敗の打算から出てゐる。滿洲から露國の勢力を排斥せざれば吾が植民政策に影響を及ぼす。滿洲に露國の勢力が一步を進めば、朝鮮の吾が商業は一分を縮められる、其れだから戦ふべしといふ。そこで非開戦論者は之に對して論ずる、滿韓に於ける吾が商工の利害も大てはあるが、國運を賭してまで争ふ程の利害でない、戦はずして利害の調和を案排するに越した事はないと。又開戦論は一日も早く戦の端を開て先づ機先を制するがよい、一日遅るれば、露は滿洲の野に一兵を増し、一月遅るれば、露の東洋艦隊は一隻を加ふ、彼れの備へなきに乗じて早く戦へ、とかう煽動する。反對する

者は軍機未だ熟せずといつて形勢を觀望する。此の如くにして開戦論者も反對論者も同じ地平に立て同じ様な横議に日を費してある。若し東亞の保全の爲に戦ふべしといふなれば、開戦論者は何故にドイツの膠州灣占領に對して大に起つゝの覺悟を起さなかつたか。カイゼルが歐洲の國民よ立て、汝等の寶を守れといふ畫を描き、基督教國を聯合して佛教國を壓迫しようとの覺悟をほのめかした時、又同じカイゼルが東亞に赴く兵士に餞して、如何なる善美の者でも基督教の者ならぬ文明は之を仆せといつた時に、大に戒心し、大に國民に警告しなかつたか。國民が日英同盟の成立に狂喜して、他を忘れんとする時、吾等は其の不見識を患ひて、根底なき政略は、ポケットの中にあるダイナマイトなりと警告したのに、一人の之に耳を傾くる者はなかつた。而して今日は皆日英同盟の功力薄きを見て、開戦論者も反對論者も對露問題に就て此の點を顧慮して居るのは何の故であるか。つまり戦にも非戦にも根底の覺悟のない爲め、只管利害打算の上の怯懦なる眼で滿洲問

題を見るからである。對露や對清の問題について國民は牢乎たる覺悟があるなれば、自己の天職に對する自信があるなれば、此の問題は今日になつて始めて騒ぎ出すべき者でなからう。夙に一定の覺悟と一定の成算があつて奮ふべきときには直に奮ひ起るべき筈である。今日に及て廟堂も國民も共に俄に機會 Opportunity を論じ、戰非戰を討議すべきでない。然るに非戰論者も固よりながら、開戦論者も其實恐怖と怯懦とに充たされて居るのは抑も何の故であるか。其昔佐々木四郎高綱が宇治川に先登した時には、固より此激流に押し流さるゝかとの疑惧がなかつたてはなからう。が彼れには已に覺悟があつた、此使命はどうしても果すとの自信と勇氣とがあつた。若し激流に流さるゝか、敵の矢玉に當つたなら、君恩を如何にせんとの暗涙もあつたてあらうが、此の暗涙は實に堅い覺悟から出た勇氣の涙であつた。今日の對露論者に果して此の如き暗涙があるか。

自信自覺にして一度ひ定まつたなれば、其の中から湧いて出る暗涙

は萬事を處理し解決する力を持つてゐる。今の日本人には智慧もある、計略もある、利を見るにも敏である、成功を急ぐにも巧である。然し只一つ、只一つ、此の暗涙が、缺乏し、枯渴してゐる。此に於て政策に果斷がない、宗教に信仰がなく、議會に雄辯がなく、美術に大作がなく、小説は娯樂の具となり、説教は座談となり、世は平和に昏睡し、文明は人心を魔睡せしむるの具たるに過ぎない。利害の暗闘はあつても清議の旗鼓は振はない、成敗得失の紛々のみあつて、勇猛奮進の征戰はない。

此に於て吾人は大に戰闘的態度を鼓吹せざるを得ない、否大に戰闘せざるを得ない。戰闘は怯懦を打破するの好利器である。戰の鬨聲は惰眠を破る唯一の聲である。王者の師には征ありて戰なし、師の向ふ所皆降服否歸服風靡せざるはない、此は戰闘の理想である。若し日本の社會、思想界に此の如き王者たる人が出て、其の大師子吼によつて萬民の眠りをさまし、堂々の師によつて總てを統一する事があれば、此れに越す事はない。然し此は理想である。自然に王者其人の現は

るゝを待つ外ない。吾等は先づ此の如き王者の出づる豫備として、大に師子吼し大に奮闘しなければならぬ。此の如き王者の來るを待ち設ける爲に路を清め、箪食壺漿を備ふるの覺悟がなければならぬ。即ち此が爲に先づ起て大に惰眠を打撃し怯懦を覺醒し、人々をして自ら信する所に向て進み、自らの赴く所に從て喜で偉人を迎へ、之に歸依せしむるの方を講ぜねばならぬ。世を銷沈の中から救ひ出だすには戰闘奮迅の外に方法はない。一分にても自ら信ず所ある人は、其信に從て奮起せよ、一毫にても自ら頼む所ある者は、其の頼む所に依て突進せよ。此の如くにして勝つ者もあらう、負ける者も生じよう。只成敗勝負一に真面目に自家の自信に從て一點の怯懦を交へないのみである。戦ふにも命がけ、負けて戦死しても悔る事なき覺悟がなければならぬ。

今の世に小我執、小壘壁の多いに懲りてゐる吾等は、何故に此の如き戰闘を奨励しなければならぬか。政黨は政黨と争つて居る、宗派の中ても小黨相闘いてゐる、文學者も美術家も皆小門戸を張て互に相排撃

してある。此争闘の弊に勝えないのを熟知し慨嘆する吾等が此の如き戰闘的態度を鼓吹するのは抑も何の爲めであるか。此の如く疑て吾等の此戰闘鼓吹を非難してくれる人は吾等の良友である。然しなから彼等はまた一を知て二を知らない者である。戰闘の眞義を知らない人である。

今の世は生存競争の時代と稱せられてある。如何にも尤もの次第で、今の人は皆戰闘中の人物である。然しながら世の争闘は實に盡く私闘である。競争はあつても征戰はない。人々は利害の爲に争ふ、其れ故に根本の自信主張がない。自ら立つ所があつて他の立てる者と争ひ、自らの人格を投じて戦争に従事するのでない。只争ふて一時の利を得んとするのであるから、利害の爲には自らの覺悟をも自らの人格若し幸に自信人格が多少あるとしてもをも捨て、顧みない。利のある所には餓狗の食を争ふ如くに走るが、利のない事なれば直に本音をかくして自信を挫げて怯懦となる。其れ故に其の争ひは明に自己の敗

であつても潔く背を脱いて降らない。眞面目に自分の人格を提げて争ふのでないから、感服すべき歸敬すべき偉人の人格があつても、潔く喜で之に歸向し得ない。世を愛ふる人にして小我執の盛なるのを見て、之が救済策として協同の必要を教ゆる人があるが、此の如き怯懦の不眞摯なる人間に何んて眞の協同があり得よう。人格の根底がない協同は眞の和衷提携でない。今の世に戰闘なしに協同を作り出そうとするならば、其の所謂る協同は比周とならざるを得ない。吾等は此の如き比周朋黨が現代の病弊である事を看破するから、此の如き苟且の平和、自利の比周を排する爲め、茲に大に戰闘を鼓吹するのである。私闘でない、正々堂々、自信と人格とから湧て出る、大師子吼の征戰を唱道するのである。

見よ、帝國の爲政者立法者は、最近數年間に幾度び彼等の所謂る和衷協同をなしたか。而して其の和衷は果して中心からの和衷で、其の協同は自信主張のつゞく限り續いたか。又見よ、佛教には各宗協會とい

ふ者がある。而して其の協會の協は果して熱誠ある自信から出た心情自ら欺かざる協であるか。基督教の諸派聯合運動、今將た何の姿があるか。美術家の會合、文學者の團體の中、幾何か果して眞に精神や主義によつて集てある者があるか。彼等には利の爲の争はある、利の爲の比周はある、自覺に基いて人格相融け肝膽相照らしての團體はどこに存在してある。今の朋黨の争は私闘である。大に戦ふ者もなければ潔く降服する者もない、否全く公闘奮戦の基礎なる勇氣が存在しない、自覺が存在しない。此の如き今の社會に對して事々しく協同の必要を説き、此が爲め人格自信の主張に反對するのは何の意であるか。協同論者は畢竟戰闘の眞義を知らざる者である。諺に所謂雨降て地堅まるの道理を知らないのである。

吾等は其れ故に利害の小争闘を排し、今の世の怯懦を叱咤すると同時に斷然姑息の協同論者と闘ひたい。地を堅めんが爲めに、大に雨を降らさんといふのである。然らば吾等は如何にして私闘と公闘とを

分別するか。曰く、一に自己人格の信頼に基いた者は公闘である、征戰である。利害の打算に出た者は朋黨比周の私闘である。政治と限らず、美術、文學、思想、信仰、何れの方面に於ても吾等は自信のある限り、力及びばざる所までも大に戦て戦死しなければならぬ。自分の人格を捧げて世と戦ひ、怯懦を打ち平和を破り、姑息を切開しなければならぬ。此の如くにして戦ふのであるから、若し他の人格にして自己よりも大なる者のあるを發見し、他の信仰にして自己の信を攝取包容するに足る者があるを見れば、喜て直ちに滿腔の至誠を捧げて、之に歸敬する。今までの敵にても固より降伏する。此の如き戰闘こそ眞に自己の人格、信仰を發揮し、又他の人格、信仰の眞味を嘗め得べき原動力である。此の如きの戰闘こそ、總ての小我執、小壘壁を破て、大野原に出て白日の下に花々しく戦ふ公闘である。朋黨比周陰にまわり謀をめぐらして人の城を陥れる暗闘でない。口戰や毒箭の遠矢で戦ふ奸惡の争奪でなくて、堂々砲火相見え、正々劍戟相打つ奮戰である。

吾等は勝つか敗けるかの運命を賭して戦はなければならぬ、人々は皆一切怯懦疎懶の情を棄て、勇奮しなければならぬ。戦に依て益す自信を強め、自己人格の價値を發揮し得たなれば此も大なる喜びである。然しながら又自己よりも大なる人格と戦て終に彼れの大なるを發見して喜び勇んで其人の旗下に馳せ參じ、其人の主義信仰によつて一層自分を大にする機會を作る事が出来たなれば此に増す喜びはない。此が即ち吾等の戦闘の目的である。

嗚呼、人は平和に馴れたり、否、勇戦に怯なり。一切文明の衰頹、一切信仰の銷沈、一切信仰の墮落、皆怯懦から出る。此の如くにして滿洲問題がどう解決せられよう。假令滿洲の野で兵には利あつても、其の勝利は直に國民の惰眠と自負自滿とを増すのみに終らう。此の如くにして如何にして宗教の革新が出来よう、文學の刷新が出来よう、又藝術の刷新が期せられよう。新主義新信仰の名は虚名に終り、文藝の作は如何に多く出ても、技術は如何に進んでも、模擬、反復、剽竊、戲作、終に何等の

光明をも將來し得ない事は、火を賭るよりも明かである。

思へば明治三十六年は我が國文物の全體に至大の覺悟と覺醒とを要求した一年であつた。東洋の平和、黄色人種の運命に就いて吾等は、大に臍を固めざるを得ない、大に自らの覺悟を定めて奮進すべき天命に接してあるではないか。今迄の成立宗教は益す昏睡に陥りつゝある、思想界は分かりの早い安平を偷みつゝある。然しながら些小ながらも豫言者の幾何が現れんとしてある。青年の懷疑苦悶は稍思想家を刺激したらしい、而して一國の徳育の在來の固定した方針は益す破綻を現はしつゝある。苟も一分の信ある者は勿論、假令信の安立なくとも、眞摯に此が爲に道を求むる者の大に起つべき時は今ではなからうか。藝園の名花は散り／＼に散つて行つた。然し今は之を惜んで止むべき時でない。逝く者は逝くがよい。况や今は藝術の理想、風趣兩つながら大に變革し、廻轉すべき機に際會してある。苟くも藝術を以て人生の大事、社會感化の要具と信ずる者は、製作に批評に大に此廻

轉の潮流に乗じ、又之を支配するの覺悟がなければならぬ。國民の運命について、信仰の歸趣について、文藝の氣運について、茲に一大覺悟の必要を號呼する吾等は、此の目的の爲めに、大に人々の自覺を喚起し、人々の自覺を喚起せんが爲めに、又大に健闘勇奮の征戰を要求する。否、自ら先づ先づ合戰の一の矢を放つのである。人々が皆己れの信ずる所にあらざれば、動かさず、己れの信ずる所を貫徹せんが爲めには、即ち一世を敵として戰ふを辭せざる様にならむ事を熱望する。否、此の要求に應じて勇戰する人々とは、味方にしても、敵にしても、正々白日の下に大に相戰はん事を望む。此の如くにして勝つも敗るも各自潔白の満足と喜悅とを以てせん事を望むのである。

山を越えて復山あり、淵を廻りて更に淵あり、人生の窮已は知り難い。然し山に會へば大に登らなければならぬ、淵に棹しては大に廻るを要する。世の人よ、今の一生は前後只一度の此生ではないか。今の時は過去未來を包括したる今ではないか。此の生に吾等は過去の光榮を

(廿六年十二月)

體しなければならぬ。此一生は即ち未來の生々の源泉である。久遠の過去を此今に收め盡した吾等は、悠久の未來をも此今の一瞬から生み出だすべき必然の運命を有つてある。怯懦て今のこの一瞬を過ごせば、それは三世の自己を殺すのである。疎懶此の一生を過ごせば、自分の生命と價值とは永劫再び復活し得る望みはなからう。

不祥事と國民の覺醒

卅五年七月五日標牛に與ふる開書

英國并に植民地の四億の臣民が首を延ばして待ちし、國王の戴冠式が延期せらるべき不幸の發表せられてより茲に旬日。宏壯の儀式は行はれざりしも、植民地軍隊の檢閲は行はれ、印度諸王の謁見式は昨夜に濟みぬ。而して今日は國王の賓客として五十萬の貧民が晚餐を賜はるべき日なり。即位式の椅子は蔽はれ、各國の大使は去り、三百の軍艦は散じて、南海の波獨り靜に其の跡を洗ふ今日此頃英國の國民は又靜に彼等の前途に對する大なる警告をさしぬ。此の警告は今の英國神智協會の首領ミセス・ベサントに依りて發せられぬ。僕は昨夜此の人の大演説を開き、又其の場の光景を見て、深き感慨に打たれぬ。此の大警告に併せて不幸發表以來英國人民の沈着誠實なる態度を見來れば、僕はアングロサクソンの今日あるの偶然にあらざるを悟る。

國王が病にかゝりて手術を受け、國民が青天の霹靂に接する思を得し前日、即去月二十三日、僕はロンドンの要衝を周り、戴冠式の準備がいそがしげに進みつつ、家々の裝飾花やかに、人民は熙々として風に揚がれる國旗と共に意氣昂れるを見て竊に思ひぬ。羅馬帝國が地中海を帝國の池として、シーザーの凱旋を迎へし時、その盛運と華美とは恐くは此の大英國の帝國的合同を發表する大禮の大なるよりも大なりしならん。而して帝都の跡は今斷壁の間に名残りを止めて、ヤポンのロマ帝國衰亡史に其の最後を傳へらるゝのみ。チャールズ五世の大帝國もナポレオンの勢力も皆此の衰亡の二字に葬られ終んぬ。大英國の光榮も亦此の數に漏れ得じ。此く思ひつゝ、花や絹にて飾られたる聖ポールの大寺を見れば、其の廢趾に石片柱頭の磊々たる後の世も眼のあたり見る心地しぬ。君よ、十九世紀始の自由平等を理想としたる文明が、今はいかめしき國家競争の文明となりしを思へば、二十世紀初の今の人々が、人生國家の最高理想と思へる、帝國主義、植民政略、工業開發

此文明もいつかは復昔の夢となり終らざらんや。大英國の帝國主義を具象的に發表せんと期せる戴冠式に對し、其の準備たる豪壯華美の裝飾に對して僕は殆ど何か恐ろしき者の又哀れなる者の影を見ぬ。僕の此の如き非ジンは翌日黒々と大字にて印刷したる夕刊新紙に現はれぬ。「國王重患大禮延期」と。カサンドラならぬ僕は、此くまで早く又此く突然と僕のキジシが事實となるべしとは思はざりき。僕は少くとも百年二百年の後に身を置きて、此の時の大英國帝都の様如何と思ひしに止ればなり。兎に角僕の幻に見し影は先づ突如として此の如き不祥(而も無常必至)の事實として現はれぬ。されど此よりも大なる又永久なる運命の黑影、少くとも僕が見し黑影——は何時如何にして此大帝國の將來に來るべきか。僕は此の大禮延期の大打撃不祥事に對する英國々民の態度を觀察して、徐に此の國民の將來を伺はんと思ひて其の後注意を怠らざりき。而して僕の觀察の結果は、僕の非ジンに見し運命の黒衣が容易に此の國民の上を蔽はざるべきを悟ら

じめぬ。昨夜の大雄辯は益す僕の此の觀察を確むる心地せり。不幸が發表せられて越へて二日、即ち戴冠式が行はるべかりし日、ロンドンの總ての寺院にては戴冠に伴ふ感謝の華麗なる神事を變じて、國王の爲めの祈禱の沈痛なる神事を營みぬ。而して此等の寺院にて説教師が國民に與へたる警告の其の時宜に適したるは深く僕の同情をひきぬ。聖ポールに響きたる祈禱の一つを聞け。全能にして慈悲ある神と救主よ、我等にきゝ給へ。汝が常に下す惠を今病に惱める汝の僕に下せ。我等は汝に祈る。汝が父として彼に下せし警醒をして聖ならしめよ。彼れの弱さは彼れの信を強め彼れの重患は彼の悔を強くし、又汝が若し彼れの元の健康に復するの惠を與へ給はんには、彼れの残りの生命を、汝の畏れと汝の光榮とに捧げしめよ。云々

此の如き聲は國王にても何にても世の光榮は虚榮に過ぎず、此の虚榮の根本に於いて、此の世の總ての富よりも榮よりも大なる者あるを

自認し躬行する人にあらざれば世の光榮は却て禍なるを警告したる者にあらずや。此の如き聲が發せられ又傾聽せらるゝ國民の帝國主義には單に版圖の擴大よりも何よりも大なる何物かを包有し或は又發達すべきを見るに足らん。更に轉じて自由教會の中央會堂シテ、テ、ン、ゲ、ルにての説教を見るに、一層痛切の言をなせり。曰く

戴冠の椅子は用ひられず、玉冠は空しく、之を戴く者なし。此の教訓は何物を教ふるか。若し此の教訓が世人の心に觸れずば、又此が何等の説教を傳へずとなれば、世には何等の教も存し得ず。傲倨、尊大、國民の自負此に對する警告即ち此なり。帝國三億の生靈は、此に依りて我等の頼む所傲る所の如何に憐むべきかを胸に銘すべし。彼等は此の大なる失望の終に失望ならざるを知るを要す。戴冠式は外形の儀式に非ずして精神的機密式なり。國王の病は有形の冠よりも牢固なる機密式を受けしなり。神の靈は王の病室に降りて其精神に冠を授け膏を滴らさん。眞に精神の戴冠式を経て民を愛し

國憲を重んずる君主を得る我等は、此の惠を下したる神と此の惠を受けたる君とに忠ならざるべからず。云々

此の説教を聞かん爲に、二時間前より寺門の前に集りし公衆は深く此の教訓を胸に銘せしならん。僕は重ねていふ、此の如き警告者を有し、此の如き教訓に耳を傾くる國民は幸なるかな。

戴冠式の不意の中止は痛く國民の心情にひびきしならん。此に依りて無常迅速の理が昭々に宣示せられしに止らず、此大式を大規模に舉行し、陸には植民地の軍隊使臣を飾りとし、海には數百の船艦を羅列して、大英帝國の威嚴を中外に宣揚せんと期せし帝國主義の爲政者は、思はぬ障害に大なる失望打撃を受けしならん。然らば此の不祥事は、同時に帝國主義に對する大なる警告を與ふる者ならざるべからず。大英帝國の運命と天職とに關して深き憂を抱く者は、此の機に乗じて大なる豫言的警告を與へざるべからず。神智の宣布者として、女流の雄辯家として知られたるミセス、ベサント實に此をなせり。僕が昨夜

きいじは即ち是れなり。

昨夜は印度局にして、印度諸王の謁見ある夜なりき。謁見とは即ち忠順の宣誓なり。此の目的の爲に印度局の眩るばかりの莊大華麗なる夕として新紙の報ずる所に依れば、印度局の三層の大館は、百千の月星を集めたるばかりの電燈に照らされ、紅紫爛熳の草木花卉にて飾られ、白衣長袴の貴婦人が纏へる黄金寶石の光は、印度諸王侯が三千年の寶を一身に集めたる珠玉錦繡と相映じて、人をして天國の華麗も此には及ばじと思はしめしといふ。長身魁梧の印度兵士は館の内外に立ちて花と光と人との間を飾り、諸王侯は自己の佩劍を捧げて皇太子の前に忠順を誓ひ、熱帯の佳香闌閣室に充ち、はてやかなる樂隊は國王の萬歳を奏す。三千の賓客が此の光景を見て、印度帝國の鞏固、大英國の威嚴に打たれ、英國王、印度皇帝の壽を祝したるも無理ならずと思はる。印度局にては此の如く、印度帝國の光榮を發揚して、光榮莊麗の別世界を現出しつゝありし其の夜、樂隊の洋々たる奏樂は、印度諸王の入館

を迎へつゝありしその時、此と一里を隔てたる、クキーンス・ホールの大廣間には白髮白衣の老女丈夫が、案を拍て印度の慘狀を訴へ、大英帝國の運命と天職とにつきて大なる警告の聲を揚げつゝありしなり。大英帝國の首府ロンドンには此の夜、此の時、此の如き深刻なる對比の現象を有せしなり。

此の夜クキーンス・ホールの電燈はいつもの音樂會に於けるが如く輝きぬ。されど莊大なるオルケストラの代りに沈痛なるオルガンの幽かに響く時、門前に待たる聽衆は潮の如く場内に入りぬ。只此一老婆の帝國主義の批評を聽かん爲め、五シリング乃至一シリングの料を拂て先を争て其の席に就きぬ。オルガンの最後の響き靜かに場内を度り終らんとする時、ミセス・ベサントはいつもの寛濶なる白衣を纏て、百合の花に圍まれたる演壇に現はれぬ。拍采の響きなり收まるの時、彼女の唇頭より出づる沈痛の聲は何なりしか。

彼女は先づ徐にちちつきたる調子にて口を開きぬ。曰く「我等靜に、

人生運命の有爲轉變を見來れば、あはれにも趣深し。人間歴史ありて以來、幾多の大帝國は此の世に現はれたり。されど彼等の勢威は彼の後に、此の隣に彼後れ先ちて皆地に墜ちぬ。彼等が天下の富と力とを集めたる光榮は皆な消へて跡もなし」と。此の言は即ち彼女の大雄辯の始なりき。沈みたる調子、一語一語明晰にして力込めたる聲は先づ一千の聴衆に水をうちたり。此の雄辯家は進て羅馬帝國の運命を説き、西班牙大帝國の末路今如何と問ひ、「此等の帝國は何が故にして斯く亡び又衰へしや、今や帝國主義の聲高く、日輪没する事なき世界四分の一を抱有する英國の領土を帝國的に統一せんと努力しつゝある英國々民は、此等過去の帝國衰亡の跡につきて何等の教訓を得べきか。我等は固より此の帝國的統一を冀ふ。國王の戴冠式を飾る爲に地球の何れの隅よりも招き集められたる植民地軍隊は此の統一帝國の花ならん。南海に集められたる數百の艦隊は、此の帝國の活力を表示するに足りなん。ロンドンの市民は此等の兵士を歓迎し喝采したるも

必しも非難はせじ。されど余は問はん、大英帝國は此統一帝國に依りて何を又何をなさんと欲するか。若し此の統一帝國の目的が單に軍備を盛にして、王者政府の虚榮を維持するにあらば、其の前途は多言を要せじ、ロマ帝國の衰亡は明なる豫言を大英帝國の運命に與へたり。若し又此の統一帝國の理想が植民地の商工殖産を發達し、此に依りて本國の富を増すに止まらんには、西班牙帝國チャールズ五世の大帝國は、此の富の爲に、今我等が眼前に見る教訓を傳ふるに「あらずや」。此くひ來て、彼女の言論は稍急調を帯び、熱情充溢し來りぬ。聴衆は一時に喝采して「さけく」の聲四隅に起りぬ。彼女の語調は再び元の沈痛に返りて、「諸君、支配する(Dominare)とは、自己の威權の爲めにも自家の光榮の爲めにもなすべき者、又なし得らるゝ者にあらず。支配するとは自らの利益を犠牲にして、人類の福祉の爲めに世界の平和の爲めに盡すの謂に外ならず。若し眞に世界的帝國の名に背かず統一帝國の天職を盡すべき合同が現出し得んには、其統一は此の理想——只此の理想の

み——にて現出し得ん。余は重ねていふ、支配するとは自らを犠牲に供する事に外ならず。』と此く大喝したる後、彼女は今の英國の帝國政略如何を批評しぬ。『濠洲は其のモモンエルスに依りて福利を享けつゝあり、ニューシーランドは自治の下に昌へつゝあり。此は我等英國が好き支配をなしたる結果にして、此等の植民は將來の大英帝國の好き礎なり。されど翻つて大英帝國の人口の過半を占め、亞細亞の中央に在りて東西の管鑰となるべき印度帝國の現狀は如何。彼等は我等の國王にして又彼等の皇帝なる人の治下にありて昌へつゝあるか。大英帝國の中軸たり得る現狀にあるか。』此より彼女は印度政府の稅政年と共に進み、人民の慘狀日を追ひて目も當てられぬ様にあるを説き、多くの例證、多くの書信を示して其現狀を訴へ、而して此の如き菲政慘狀は皆英人の支配が眞の支配にあらず、同情を缺きたる暴政の結果に外ならざるを説きぬ。『印度を以て大英帝國の寶庫金庫と見る事が根本の誤なり。此の領土に依りて自ら利せんとするが大なる迷

なり。露佛の聯合艦隊は強し、されど彼は未だ大英帝國を亡ぼすに足らず、獨逸の陸軍は大也、されど此も亦我英國の帝國合同を危うする恐なし。只我が大帝國の危機は英國人が最大の金庫と思へる印度にあり、否英人自身が印度に對する自利の謬見にあり。大英國帝國の滅亡は外より來らず、内より生ず。此統一帝國を造り出だすも又之を亡ぼすも皆諸君自身のなす所なり。』此く熱情と涙とを以て喝破せられし言は場内雷をなす喝采を以て迎へられぬ。彼女は語氣を一轉して戴冠式に論及せり。『人民も政府も此の大禮を以て何事を示さんと期したるか。大英帝國の威勢を示し、統一の氣運を發揚せんとは其の望なりしならん。いはゞ精神的なるべき戴冠式を以て見世物(pomp and show)に供せんとせしなり。されど此は空閑のみ、夢のみ。彼等が帝國の威力を示す具とせし赤冠長劍の印度兵が、ロンドン街上に喝采せらるゝ時、彼等の同胞が地球の彼方にて饑に泣きつゝある事は誰か之を顧慮せしか。數百の艦船も、理想あり根柢ある統一帝國の防禦の爲に用ひ

らるゝにあらざれば、此等は却て國民の愚なる自尊より延びて帝國を瓦解に至らしむる誘動の機關なる事を思はずや。此くの如き戴冠式——見世物の空閑は幸にも今は延期せられぬ。英國の國民は此に依りて大に自ら省みよ。今にして猛省せずんば、合同の帝國は人類の文明にとりて何等の貢献する所あり得じ。若し數ヶ月の後に神が我王の戴冠を許し賜ふならば、其の時の大禮は此の如き見世物なるべからず。一切の虚飾と外觀とを取り去りて眞に人類の福祉の爲めに盡し、世界の平和を擔保し得べき精神的帝國の精神的戴冠式ならざるべからず。此の時の拍手は最も大に最も長くつゞきたり。ミセス・ベサントは此より尙帝國の理想、主義につきて細説し、英國人に覺醒を促し、一時間半の大演説を終りぬ。

ミセス・ベサントの雄辯は眞に大なる雄辯、眞の雄辯なりき。僕は日本に於ても歐洲にても此の如き明晰にして力あり、言々句句々信仰の熱火を吐露したる雄辯をさかざりき。僕は此の館を出て家に歸り床に

入りても其の聲をきく心地したり。君よ此の如き警告者を有する國民は幸ならずや、否此よりも一層幸なるは此の警告に耳を傾むる人である事なり。入場料の高きをも厭はずして入り來りし一千の聽衆の中には老紳士もありき、書生もあり、花の如き少女の花の帽の傍には労働者の破衣も隣りき。英國の社會は、一方にて戴冠の見世物に狂喜せんとし、帝國主義の華やかなる名に心眩する者あると共に、他方にて此の如き警告に耳を傾け、之を喝采する老若男女もあるなり。偏に長上に阿り威權の下に屈服する日本の佛僧を今此の國に持ち來さんに、彼等は此の時、此の機に乗じて彼等自身の無常の教訓を傳へ、王者珍寶皆空華なりと喝破するの勇ありや。時と共に移り、俗に投じ勢に合する日本の論客をして此境に處せしめば、彼等は帝國の前途に對して此の如き痛き警聲を放つの自信ありや。舉國一致といへば、何人も愛國の名の下に、自分の所信をも考慮をも棄つる日本の社會に、此の如き警告をさく耳幾何ありや。

二十世紀の文明は、帝國主義、植民政略の文明なり。世界の國々此の空想を追ひて狂し、共和民政、モンロー主義の米國も此熱に浮かされてフキリンの民を虐し、極東孤立の島帝國も此の空華に魔せられて外面の政略に熱中して、内に文明の眞精神を養ふを忘る。君よ僕は考ふ。此の如くにして帝國主義、植民政略は何の目的を達せんとするなるか。植民政略の爲めに植民し、帝國主義の爲めに帝國的統一を庶幾す、其の究局終に何れにか歸すべきか。今の文明的ハイカラは帝國主義に熱中して自由平等の理想を空想なりしと咒咀す。然り自由平等は空想なり、abstract ideal なりしなり。されど帝國主義、殖産政略は果して空華ならざるか、ideal abstraction ならざるか。殖産工業といひ、海陸軍といひ、國威の宣揚といひ、自由平等よりも眼見るべく手觸るべき現象を有する故を以て帝國主義の二十世紀文明を空華にあらずと見る者あれば、此は大なる誤なり。十八世紀の末に、自由平等の福音が人心を席捲したりし其の時にありては、其の唱道者の眼には自由平等は見るべ

き具象の理想、彼等は手に共和政治の現實に觸れて、此の文明、此の理想は人類最高の文明なりと思惟せしなり。今の植民、今の軍艦皆此に異ならず。此等の理想にして精神理想の根底あり、此根本目的の爲の手段たるにあらずして、單に帝國主義の爲の帝國主義ならしめば、十九世紀末、二十世紀初の此文明も、亦他日 abstract ideal なりとの刻印を下ださるべき運命を有す。國威は宣揚すべし、されど此宣揚に依りて何事をなさんとするか。植民は奨励すべし、されど此の政略の歸趣如何。苟も文明の爲に患ふる者は深く此の問題を研究せざるべからず。日本に此問題を研究する人ありや、又ありとするも其の結果を發表して世に警告する人ありや、又此あるも日本の社會に此をさく耳ありや。小事ながら余が先に君に與ふるの書を公にするや、批評家は皆余の悲觀を咎めぬ。「日本道德の將來を論じ、武士道の渴仰者として知らるゝ桂月君すら、余が物質的文明を蔑視するを非難せり。倫理運動を以て世に表れ、ニイチエを評して價值なしと判斷する程の卓見高邁なる丁

西倫理會の我等の先輩すら僕の見の偏僻を難じぬ。悲觀か偏僻か。嗚呼僕の如き小なる者の警告すら尙ほ此の如く精神の在る處を認められず。二十世紀の日本に大に警告し得る大豫言者出づるとも帝國主義植民政略の空想は終に此の豫言を埋没し終らんのみ。

嗚呼災なるかな、日本やドイツの如く眼眩し耳聾せる民。嗚呼幸なるかな國民に尙口あり耳ある英國。

隣邦支那にすら既に康梁二氏の如き精神的文明の先驅者ありて野に叫びつゝあり。古より猴眞似文明を以て立てる日本は終に此の如き豫言者を得る能はざるか。ドイツの如き名のみありて英國の如き實なき帝國主義の渦中に陥り去らんか。朝鮮の獨立、東亞の平和、今如何。八年前の宣戰の精神、今果して何の状ぞ。民は此の如くにして空華に酔ひ、政府は此の如くにして勢にのみ支配せらるれば、狂喜歡迎せし日英同盟も終に何物に終らんか。精神なき文明は蟬蛸の如し、根底なき政略はポケットの中にあるダイナマイトなり。

君を湘南に思ひやりて僕の所見と憂とを書き送るなり。

(卅五年七月)

國家の運命と理想

(愛國者と豫言者)

弘安の蒙古來襲と明治三十七年の日露戦争とは、日本の國にとつて前古に比類なき一國の大事である。蒙古民族が北アジアから西アジアを征服し、中國を統一して殆ど全アジアの主たるその戦勝の餘威を以て蕞爾たる島國を併呑せんとした、その勢に抵抗したる弘安の大事が、特に當時北條の治下に治平の夢を食つておつた日本人にとつて非常の大事であつたのは無論である。が、ロシアとの戦争は日本にとつて興亡の大事であるのみならず、又實に歐洲以外の建國民族にとつて白人種には到底他人が競争出来るか出来ないかの運命を定むる大事である。先づ何よりも先に戦の勝を祈るのは吾等黄人種の至情である、日本人としては尙更正當の要求である。

然しながら茲に吾等が提出すべき問題がある。吾等は戦に勝つて、而

して後何をするか、又何をすべきかといふ問題である。固より戦の目的は宣戦の詔にもある如く東洋平和の爲め、又わが國の隆盛の保障の爲に、韓國を他の強國の蠶食から防ぎ、又清國の獨立の實を全くするにある。されば日本人の大多數は、今この戦に勝て何をするかといふ問に對しては必ず答へて云ふであらう、この開戦の目的を完成し徹透する爲めに戦後の經營に力を盡すべきである」と。此も無論の話してある。然し戦備の完成を勉め、國力を充實するのは、只今後再び此の如き戦争をなすの要なきに至らしむる爲の消極的經營である。經營その物は、大に積極的であるとしても、その目的は消極的で、日本の利益を害し、東洋の平和を擾亂するロシアの如き怪力に對する防禦、その怪力の排除だけは此の如き戦後經營で達せらるゝ。然しその消極の上に積極の理想はどこに求むべきか。日本國は決して戦を好て戦をなし、領土擴張を目的として兵備を修すべきでない。今後戦を再びする事があり、或は領土を擴張するにしても、それにはそれ以上の遠大なる理想

目的がなければならぬ。又國民は深くその理想を自覺して萬事それを目的として進まなければならぬ。然らざればわが國は人の國を蠶食する爲に兵備を修し、富を得る爲に領土を擴張し、而してその富は又常に兵備凶器の費に投じ去る矛盾に陥つてしまふ。現にロシアの如きは此の如き國家で、單に膨脹の爲めに膨脹を欲し、それが爲めに他國に迷惑をかけ、平和を攪亂するのみならず、又それが爲めに自國の民をも收斂で虐待し、國力を兇器に費しつゝあつたのである。若し今回の戦争中にも又戦後にも、一國の經營を此の如き無理想の方向にのみ張らんとする人があれば、それはわが國をロシアにしやうとするものである。今はロシアを非難して暴だ野蠻だといつておるその口を以て、又日本を此と同種類の武斷暴戾の國に化しようとするのである。吾等は此の一段の覺悟に關して、大に反省し熟慮し、又大に覺悟を定めねばならぬ。

甲午の戰役が終つた後、遠遼の屈辱に對して憤慨した人もあり、臥薪

嘗膽を叫んだ人もあつた。然しながらその屈辱の復讐といふ事以上吾國の目指さして進むべき理想について深い考察をなし、大なる警告を國民に與へた人が幾人あつたか。當時(三十四年)故高山樗牛はこの疑問を提出して論じた。

日清戰役によりて、獲たる勝利は、一部國民の自負心を鼓舞し排外自尊の病的思想を熾ならしめたるは甚だ悲むべき結果なりき。然れども遼島半島の地理と共に、東洋の局面、世界の大勢は是の戦争によりて初めて國民の間に知られたり。戦に勝ちたる國民は世界に於て尤も危殆なる位置にあるの國民なることを覺りたり。黃白人種最後の大格闘は如何に其千年の歴史を紹ぎて、將に絶東の風雲を掀翻せむとするか、黃人種最後の運命を決すべき一大危機の如何に肅々として眉睫の間に近づきつゝあるか、日本の戦勝は如何に外邦の猜忌を増し、如何に國民の前途に一層の險巖を加へるたるか。戦勝の祝宴に醒めたる國民は悚然として怖れ、猛然として省みたり。是

に於て、世界に於ける日本の位置てふ觀念は國民の間に最も痛切なる疑問として提供せられぬ。(樗牛全集第四卷 三九七—三八頁) されは日清戦争の結果とその戦後營經とについて此の如く世界に於ける日本の位置天職を看破しようとして勉めたので、かれは此の如き疑問で一般の覺醒に遇ふたが國民全體は果して、當時此の如く醒めたか。戦後營經をなすつゝあつた國民がその經營の目的や國家將來の運命や、日本國民の天職に就いて信仰あり力ある理想を發揮したか。不幸吾等は否といはなければならぬ。又今回の戦争にしても對露同志會的の開戦論以上、更に遠大の正義が一般の輿論となつて、その力で戦ふに至つたか、どうか。

然し此は既往の事である、單に之を答めるのは、無益である。吾等は今回の戦後再び日清戦後の如き状態に陥て單に勝利に誇り單に兵備を修するのみで已むべきでない。その總ての喜び、勇み、又總ての經營に理想の根底あらしめなければならぬ。然らばその理想を如何にして、

何れの處に求むべきであるか。

この問に答ふるに先つて、尙も一つの疑問が出る。今の世には國家主義論者が多いが、その富國強兵論はそれ以上に目的のない無理想の單純な富國強兵乃至帝國主義である。それ等の人から云へば、國家には自ら強め自ら富む以上の理想などいふ者を要しないのである。今日の國際關係は無道德であるから、競争の間に武力で立つ外、理想も何もその要がないと考へる人が多い。吾等は此等の人深夜人定まつて後、徐に古今成敗の跡を考へて、人生の運命が如何に奇なる糾纏である事を考へん事を要求する。見よ、羅馬帝國は實に帝國主義の最大標本で、その組織なり法律制度は帝國的統一の最良模範であつた、然し其帝國、その政治に果して千年の盛運があつたか。唐の帝國も、元の帝國も、チャールズ五世の帝國も亦同様であつた。近くは小いにしても徳川の天下統一も同様の運命に終つたてはないか。又ロシアの如きも膨脹又膨脹、終に今後如何なる運命を有するか。よし、今後かの國がアジ

ア占領の野心を遂げ得たとしても、今の如く膨脹蠶食の外に能事なき國で済んだならば、かの國の存在は世界の歴史の中に、怪力の幽霊が一度現れて又忽に消え去つたにすぎずして終るであらう。然らばロシアといふ國の價值は、かの匈奴などの一時天下に横行した後、何れにか消え去つたのと何の異なる所があるか。日本が今後如何に強くなつて、アジア大陸や太平洋に勢力を張つたとしても、此の如き膨脹富強が何の能事であるか。膨脹し富強になつたがらとて、その盛運がいつまで續くか。此の如き無理想の盛運は、必ず國民の腐敗壞類を養ふ事は史上の實例歴々として存在してある。膨脹の中には常に軍人跋扈の患を殘して、古のローマや今のロシアの如き寡頭專制の政で下民を苦めるか、然らざれば古の唐や今の清國の如く、鎮藩の患に依て尾大不振に終る事は明である。又此の如き武強盛運に依て國を富まし得たとしても、其の極は資本家の專横を來たし、此に又別種の寡頭專制を生じ、此の如き寡頭專制は必ず一般に德義の廢類と一般人民の怨嗟とに依て社會

瓦解の緒を開く事、亦昭々の事である。今の國家主義帝國主義は畢竟武斷的、閥族政治、經濟的、寡頭專制の辯護者たるに過ぎない。その富國強兵論は到底盲目的自殺論である。

且つ又此の如き論者は往々にして、列國競争を口實にして、武力的侵略の必要を説くが、競争の世に武力の必要な事は云ふ迄もない、戦争も畢竟この必要から生ずる。然し兵力や戦争や、又その必要の爲めの侵略は消極經營でそれ自身では空虚の目的である。國運の隆盛の爲めに兵力を要するといひながら、その國運隆盛の標準は何かと求むれば、又兵力の強盛を以て答へるが如きは、甚しき矛盾ではないか。固より或る場合には兵備や戦争は國土と經濟との自衛の外に、士氣振作の爲めに必要な事もあらう。然しそれにしても、戦争干戈その者が立國の目的でない。士氣振作は即ち國民の元氣を充實して文明の隆興に資する者で、此の如き立國文明には自ら積極の目的、即ち理想がなければならぬ。是なき國の文明は、一時の空華に過ぎずして、忽に士氣の廢類

社會の瓦解を招くに至る。假令競争の世に兵力干戈の要があるとも、それは消極の目的に使用せらるべき者、已むを得ざる爲の施設で、目的とし、理想とすべき者でない事を覺悟しなければならぬ。

帝王の權威、閥族の利福、寡頭の檀權、此等の動機で國を強め兵を張つた國は古往今來數へられぬ程ある。然し此等の動機がその目的を達しようとすると同時に、内部の解體自殺を始めなかつた例が一つとしてあるか。已に國を建て、時には個人の利害をも犠牲に供して、國家の榮光を計らうとするならば、その榮光は此の如き消えて行く自殺的の動機に求むべきでない。又盲目なる運命に之が進行を委すべきでない。僅かに自分一代と子孫一二世の計をのみ見て、それ以上の國家の大計を知らず、或は自分の閥族階級のみを利福を見て、國民全體の大利を棄つる人々なればいざ知らず、苟も二千年の歴史を負て世界文明の要樞に立ち、今や新なる國運を發揮する任に當てある吾等は、この祖先の國を又その子孫の國を此の如き私利や、此の如き榮えては、忽に消

え行く雪の如く、沫の如き、一時の富強の犠牲にして、その國運を運命に委し去つてはならぬ。そこに吾等は國家の遠大なる理想を發揮してその光明によつて人民を覺醒し、子孫後昆を鞭撻しなければならぬ。眞に國を愛する者はこの理想の豫言者として國家の運命を支配しなければならぬ。

悲觀すれば、人に百年の齡なきが如く、國家の運命も又有形的には永遠なる事はあり得まい。然しながら諺にも云ふ如く、人は一代、名は末代。番に名のみでない、偉大なる人格の感化は萬世を支配する、その精神は生々盡きないで人を動かして行く。偉人はその五十年の一生の内、に未來萬世を實現する力を有して居る。人の精神がある限り、靈の滅せざる限り、豫言者の意志の力は人生の光明であり、榮光である。然らば國家の榮光も亦どうして此に異なり得るか。

糾はれたる繩の運命を吾等は知る事は出来ない。唐の太宗が東征西伐、外領土を擴め、内貞觀の治を昌にした時、誰かその一二代後に忽に

して車駕が漁陽の鞀鼓に驚かざるゝを想像し得たか。ハンニバルがピレネ山を蟻垤の如く越えて、ロマの人心に戦慄を與へた時に、そのカルタゴの子孫が婦人の頭髮を以つて弦となして、ロマ人に抗しつゝ尸を重ねて死ぬるといふ事を、如何にして信じ得たか。運命は殆ど不可抗不可測の如く見ゆる。然しながらその勢の強い運命を支配する尙一層大なる力がある。この力を悟る人でなければ、運命の真相は分らない。この力に頼て昌へる國家でなければ、其盛運は水泡の如き者。アツテラの遠征や、カルタゴの昌隆と同じ最後に遭ふ必然の運を有してある。其力とは、何であるか。曰く國民の理想である、自覺である。偉大なる愛國者即ち國運の豫言者、指導者に發揮せられて、それに依て國民を嚮導する理想は、即ち運命を支配する又作り出だす力である。若し今の經世家にしてこの至大の力を看過して國の富強を計る人があれば、その人は國民が達し得たる富強を盲目なる運命の神の拜壇に犠牲に供する人である。國を武斷と強慾との外に能事なき國として、而

かもその運命を幾多の大帝國の滅亡と同じ手に委し去らうとする人である。

*

*

*

*

*

吾等人類が明に意識し得る境界は、一個人の精神のみである。個人の外に吾等の知り得る者は、間接の知識に過ぎない。人は自分自らの外のもは、その映像を見得るに過ぎない。現實確實なる者は、一個人にとつてはその「我」の存在のみである。主觀主義、個人主義の強みはここににある。然しそこに、その「我」なる者の中には、「我」にも知り得ない、解し得ない、不思議が存在してある。試に夏の朝まだき野路に出て路草の葉末にかゝつて日光を映してある、露の一しづくを見よ。その露は一滴の水で、日光と共に乾くべき運命を有つてある。而かも今その中には、日の美しい光を宿とし、夏晨の麗なる宇宙を湛はせてある。露の存在は水滴の外にないが、その中には宇宙を收めてある。それは吾等の眼の錯覺幻覺でない。露の中に實に夏の晨の美はしい宇宙が這入てあ

る。然し一滴の中に大宇宙を宿どすのは、獨りこの露のみでない。その露の中に此の如き美はしさを眺めて感に打たれた吾等の心は抑も何物であるか。「我」である。「我」の外に現實の意識を有しない吾等の心の中には又その滴露を宿どし、その滴露の中に宿つてある夏の晨を同化攝受し得るではないか。その露一つから天地の美を感得し、天地の美に依て自分の精神に感動と力とを得るではないか。管に天然のみでない、親子、戀人、友人何れにしても我れは我れ、彼は彼であるに係らず、その彼れを愛すれば、彼れから我を動かさし、我れが彼れを己れの中に同化してそこに愛の力を得る。「我」は、どこまでも我れであるが、その「我」の中には、天地をも、人生をも、包括し得、此の如く互に包括せられ同化、感得せられたる小宇宙が交叉融通してこの大宇宙が生々活動してあるのである。若し「我」といふ中心の最も現實の存在がなかつたらば、世界は無である。睡眠の中には吾等の世界は存在せざるに均しい。然し此と同時に參差交融の大宇宙がなかつたならば、「我」の小宇宙は果して如

何の内容を有し又幾何の活動と生命とを發表し得るか。

吾等は哲學を談ずるのでない、日常瞬時も離れ得ない人類全般の經驗に訴へるのである。一國の隆盛の外に人の目的はないといふ様な高遠らしい國家主義を唱ふる人にしても、物質快樂の外、人生は無意義であると自得したらしい悟りを誇る人にしても、又た精神は何であるの、物質は何であるのといふ理論を全く放棄しても、如何にしても争はれないのはこの「我」の存在と、その「我」が常に他の何物かと交通融合する一事である。この一事は何人も經驗せざるを得ない現前の事實である。若しこの事實を認めないといふ人があれば、その認めるとか認めないとかいふ者は何者であるかを反問すれば、直にその自家撞着を暴露する。只此事實は餘りに明白で、餘りに平生恒に經驗する所であるから、多くの人が却て氣附かずに居るだけで、心臓の鼓動や目前の睫毛は氣附かないでも常に存してあると同してある。

一切の中心は「我」で、「我」は即ち大宇宙の映ずる燒點である。そこで國

家とは何者で、この「我」と如何なる關係を有するかを明にする事が出来る。譬へて見れば、我の小宇宙は一つのマグネットの中心の様な者で、その小宇宙と關係し交通し得る大宇宙は此の中心を圍繞するマグネットのフィールドである。此の如き中心とフィールドとは各の個人が存在するだけ存在して、大小廣狹はあるにしても、中心と中心とフィールドとフィールドと相影響して存在し、而して此の如き幾多の中心が多く相集まれば、又その全體の中心とフィールドとを呈するのである。個人を離れて國家は存在しない。が個人と個人とが磊々として偶然に無關係に相集つてゐるのでない、その間には大小宇宙相互の活潑な圓融な交通が行はれてゐる。その交通の一つの中心が即ち國家といふ活動の根底で、各の個人小宇宙の中心はこの國家或は民族なる大宇宙の中心と相交融して生存してゐるのである。國家と個人との間に存するマグネットの力は即ち言語である、血統である、歴史、風習、傳承、制度等である。此等の原動力は、根底は個人を離れて存在し、又活動し得ないが、而

かも一旦國家といふ大宇宙的勢力となつた以上は、それは、個人に、影響せられたると共に、又個人を支配する力である。

「我」の存在が確であるならば、彼も確である。個人が現前の事實であるならば、國家も亦現實の力である。只この現實の大宇宙的勢力が個人の精神に入て明にその意識に上ると上らないとに依て、意識自覺ある團結の出來ると出來ないとの別が生ずる。又その中の某の個人が明かに國家の勢力を自身の精神に體得して、而して自己心靈の奥底から湧いて出る、人性必至の要求と力とを發揮し、その要求と力とを自分の屬する國家の上に及ぼし、此根底源泉の小宇宙の力に依て國家の團結を發揮し進路を嚮導する様になれば、そこで國家は又この人の力に動かされて、始めて理想を自覺したる團結となり得る。つまり國の理想は個人の理想と同じく、大小宇宙の融通から起て個人の心境に明かに意識せられ、其心靈の底から湧いて出る信あり熱ある力に外ならぬ。其源が個人心靈の奥から湧いて出てその永遠の光明又要求の少くと

も一部分を代表してあるから、それに發揮せられたる理想は又他の心
 靈の奥を叩いて之を感動する力を有してある。威力で他を服するの
 てなく、衷心から精神の要求を充たして之を動かす力を有して、茲に
 奥底真心の歡喜服従に依て國民を團結し指導する力を得る。此に於
 てその國民の國民的活動は單に一時代、一國土に限られた生命のみで
 消滅し逝かずしていつまでもいづれの國民をも感動して、その力とな
 り、信となりて光明を與ふる力である。されば此の如き理想で動いた
 國家は、一時の興敗で生滅せざるその生命を持續し、又一度は敗れても
 必ず復その理想の力、何處かに如何様にかして復活する力を有して
 ある。心靈の力は永遠不滅である。されば心靈から湧き出た理想の
 なき國家は、假令大に興隆してもその興隆の中に滅亡の耻を含蓄して
 ある。理想ある國家は敗亡の中にも生活の力と永存の光榮とを有し
 てある。

先にも明かにした如く、個人の心靈といへども、固より空に生活する

ものでない。大宇宙を離れて小宇宙は活動しない。國家なり民族な
 りの團結的勢力はその血脈、歴史から出る客觀的勢力で、その中に生ま
 れた個人はその勢力の範圍外に出づることは出来ない。先天的に又
 不識の間にその影響を受け、その活動の渦中に投ぜられてある。然し
 此の如き勢力は尙不識の盲目的勢力である。その實はあるにしても
 何人にとつても直接第一の事實たる個人の意識に上つて居ない裏面
 の力である。この力は個人の精神に鑄治せられ、自覺に薰習せられて
 始めて明かに總ての個人を支配する力となる。

國家至上と唱へて、個人を國家の手足に過ぎない者とし、國家の必要
 の爲には個人の要求を總て壓抑しなければならぬといふ考へは、團結
 の勢力だけに考へ到つたものである。が、その團結の勢力が如何に個
 人勢力の集成であり、又その勢力は個人の自覺を経なければ、方向あり
 目的ある力となり、又個人を心の底から悦服せしむる力とならない消
 息を看過した大謬見である。吾等は國家主義の人々と共に國家なる

勢力の存在を認め、又それが吾等の個人的生活に重要であることを認めるが、そのみでは國家の生命は盲目的の力、又散漫で浮動の力である。その力が確實に具體的に顯はれて、意識的勢力即ち自覺を有する様になるのは、之を體現する個人、の存在を必要とする。即ちその人の小宇宙の中に明に國家の大宇宙を映じ、自分の生命の中に國家の生命を有する信仰と勇氣とのある人を要する。此の如き人は國家を以て自分の生命とする、眞正の愛國者である。その國家の運命を指導する豫言者、一國の理想を發揮する聖人である。何れの國家も權力關係の上で統一の主體たる主權者がある如く、其理想自覺を發揮して國家に明かな理想を與へる導師がなければならぬ。此の如き導師は即ち精神的に國を生むだ親である。師、主親の三つが一人の人格で統一された國家が即ちプラトンの理想の國家であつたが、兎に角眞正の愛國はこの理想の自覺から出る。此の如き愛國者の第一なる人は即ち國の師で又親である。此の如き自覺ある師主親を有して、その理想の指導に

従ふ國家でありてこそ、始めて統一あり理想ある國家といひ得るのである。

眞正の愛國心、又それから出る戰時の敵愾心は國家の理想を深く覺悟した個人の信仰に基かなければならぬ。個人心靈の奥から湧き出て、その中に國家の理想を體現し自得したるその個人の自覺に基かない愛國心は空虚である。一つの國に生まれてその兵卒となり、戰場に出て聯隊旗を愛し、敵を惡む、これも愛國心の一たるを失はない。アッテラの部下は此の如き愛國心を抱いてあつた。自國の領土を擴げる事のみに着目して、その威力の揚がるのを喜び、國運の膨脹を喜ぶのも亦愛國の情たるを失はぬ。スバニアの南米征服者は實に此の如くであつた。然し此の如き愛國心で贏ち得た戰勝や領土は、又アッテラの歐洲侵略、スバニアの南米建國の如くに、直に消えて行く光榮である。之に反してサデナロラは、フレンツェは即ち神の國を實現すべき地であると、の信仰の爲に内亂を鎮め、外敵に抗した。かれは不幸にして敵手に仆

れたが、かれの愛國の精神はフレンツェの獨立と光榮とを永遠にした。ツェーリヒの民は、ツェンゲリの統率の下に神の爲め、信仰の爲めに戦つた。その愛國心と理想とは今尙かの州の山間湖邊に磅礴としてある。此點について日蓮も亦此の如き愛國者であつた事は、高山樗牛の道破した所である(樗牛全集第四卷九一三頁以下を見られよ)。

兎に角國の團結はそれ自身では盲目的勢力である。その勢力に自覺と理想とを與へるのは信仰あり、熱誠ある個人の自覺に基かなければならぬ。國家の理想は此の如くにして始めて發揮せらるる。祖先以來の遺傳をうけ、國土山川の感化に養はれ、而して國家の歴史と國民の遺傳をうけ、國土山川の感化に養はれ、而して國家の歴史と國民の根柢とを看破するは愛國心の第一歩である。此の如き自分の國は偶然に此世世界の歴史に存するのでなく、世の中に偶然といふ事がない以上は、各國各民族各何か世界宇宙の大なる舞臺に仕遂べき天職を有することを悟り、而して自分の國は建國の初からの精神を有して

あり、又この精神を理想としてあらゆる困難に遭遇し經過しなければならぬを悟るのは愛國心の第二歩である。已に此理想を自覺した以上は、自分が即ち同胞を覺醒して、此自覺をかれらに與へ、此理想を實現せしめなければならぬといふ熱烈なる豫言的信仰を抱くのが即ち最高永遠の眞の愛國心である。その愛國者が發揮すべき國家の理想が如何なる内容を有するかは、その國によりて異なる事は、人々の性格に従て天職理想も異なると同じである。又何れの豫言的愛國者が果して能く實にその國の眞の理想を發揮するかといふ事も、信仰の大本、歴史の批評にその判断を仰ぐを要する。眞正の愛國心は我を没して國家の虚榮を喜ぶ雷同や、只管戦争の勝利を望んでそれで足りとする輕薄なる實利主義でなくて、自分の信仰に基き、自分の覺悟に依て國民を嚮導し、支配し、此が爲めには歡呼するも、時には又大に叱咤するものでなければならぬ。この一事は眞正なる愛國者の皆明かに意識し努力した所である。又何れの國も興隆の際には此の如き豫言的愛國者

を有してあつたのも明である。此の如き豫言の信仰がその同胞を感化した時、即ち國民がその建國の理想を自覺した時。この自覺は即ち國民の運命を作り出だす力である。

此の如き豫言的愛國者の實例として、吾等は古くはユダヤの豫言者を有する、又近くは日本の過去に日蓮を有する。それ等の評論は別の論議に譲らうが、國家が個人を離れて存在し得ず、個人の深い根底はその心靈の力なる、又その個人に大小宇宙の圓融を自由ならしむる精神、信仰の中に求めなければならぬ以上は、愛國心は信仰に基き、この信仰は即ち國家の理想で又運命である事を確に認め得るのである。

一口に愛國といつても單に自分の生まれた國を愛する、その戰勝を好むのみで止まつてならぬ。その國は如何なる國である、如何なる理想に建てられた國であるか、又如何にその理想を實現すべきかについて、人々は各深く考察し覺悟するを要する。愛國は單に國土の愛でない、又尋々として集て、衣食を相互に供給してをる人民の愛でない。自分

の信仰をその中に託し得べき自分の理想をその中に發揮し得べき國家團結を愛するのである。此に於て眞正の愛國者にとつては國家が即ち自己で、自己が即ち國家である。國が即ち自分の命であり、自分が即ち一國の生命である。唯一の神エホヴの光榮を萬國に光被せしむる天職を自國に認め得たユダヤの豫言者はこの國を愛するが故にその大師子吼を以て國民を警戒し、鞭撻した。末法の世に妙法を弘め一閻浮提を化して妙法の天地とするその中心は、東方の小國日本にありと信じたから、日蓮は自から日本の柱、日本の大船を以て任じたのである。

信仰なき愛國心は、理想なき國を強慾の一方に走らしめ、その極人民の腐敗から亡國の禍を招く。此の如き國家は運命の盲目なる波動に洗ひ去られて了ふ。

信仰に基いた愛國心は豫言的希望と熱誠とによつて國民の團結を陶冶し、その理想ある團結に依て國家の天職を盡し、而して運命の力を

支配して永遠の光榮を發揮する。

戦争は國家の大事である。その勝敗は團體の運命に關するは云ふまでもない。此の故に國を愛する者は又國が戦争に勝たん事を祈る。戦時軍國の愛國心が敵愾心として發表するのは至當である。然し吾等はこの愛國心を外に發表すると共に、又内には深く國家の理想、人生の運命に考へ到つて、戦は畢竟何の爲めの戦であるかといふことを悟るを要する。此覺悟を缺いた愛國心、敵愾心は盲目の蠻勇に過ぎない。此の如き愛國心のみ支配せられる國民は蠻勇好戦の民である。その最好適例は、匈奴や蒙古族や乃至今のロシア貴族ではないか。若し日本人がロシア政府の横暴を膺懲すると稱しながら、此の如き無覺悟の好戦態度を執り、戦勝の喜びと共に大言壯語の膨脹強兵を要求する様な事があつたならば、それは全く暴を以て暴に酬ゆるもので、その戦は義戦でも何でもなきに至る。苟も人の暴を懲らすといふならば、その暴

を憤る義憤がなければならぬ。而して義憤は決して無理想の民に存し得ない。只敵を惡むを知つて何の故に彼れの惡むべきかを悟らなければその戦は盲目の勇て、その愛國心は野蠻の我執である。

今日の日本人は朝野共に果して宣戦の詔にある文明を平和に求めの主旨を奉じてあるか。深厚なる建國の理想を發揮する理想あり自信ある豫言的愛國者の言に傾くる耳が國民の中に存在して居るか。蒙古襲來の前に大なる豫言的愛國者を出だした日本は、今北強と戦ひつゝ此の如き豫言者を望むの情を持てあるか。

(廿七年五月)

文明の危機と人生信仰問題

人の一生には青春の時を以て危機とす、一國の國運文明亦豈同様の危機なからんや。世界の文明は今方に變轉の一危機に遭遇し居らずや、抑も我が國の文明は又特に最も重大なる危機に際會せんとせずや。凡そ人の幼時、父母の慈愛に育てられ、家庭の温き空氣に養はる。此時、人は無邪氣にして父母の愛に身を托すれば足る、その徳は從順あるのみ。長じて學校に入り、教育を受くるも、天然の新しき世界に新しき教訓印象を求むるも、其活動は外界に隨順適應するを能とす。然れども、體格漸く成り、教育その終りに近く、而して血氣内に盛にして出て、社會の人たらんとし、或は又前途に近く、社會的生活を望み見る青春の期に際しては、内外の事情は共に自主の活動を促し、人は服從適應の生活より一轉して自覺進取の生活に入らざるべからず。肉體と精神と共に自らにも知れぬ衝動を感じ、其結果或は煩悶となり、或は覺醒となり、

理 想 と 信 仰

文 明 の 危 機 と 人 生 信 仰 問 題

若くは又進取又は墮落となる。人は其青春の危機を切り抜く、其態度、覺悟、一つにて、一生の運命を作り出だし、又、一人格の價值を定む。

一國にありても亦然り。民族の發達團結漸く成り、國土の膨脹に形體稍完全し來りし時に當りては、この建國團結の力と形體領土の素質とを持して、此より進て如何なる國家的理想を作り出だし、又如何にして世界の文明に對する國家の活動を開發せんかといふ疑問は知らず知らずの間にも必ず起り來るべき運命を有す。若しこの疑問に逢着せず、想到せずして、盲目的に國運を放擲する國家は即ち無氣力無理想の國として、終に運命の波濤に洗ひ去られて、世界の文明に何等の意義なき影の如くに消え去らんのみ。一個人に醉生夢死の人あるが如く、國家にも亦泡沫興亡の國少しとせず。天下幾億人衆の中、醉生夢死の徒あるは忍ぶべしとするも、苟も國を建て、民を統べて、而も泡沫の始終を遂ぐる國家あるは天理に背く者といはざるべからず。國を愛する者は己れの國家に理想を發揮し、その文明の危機に際して、起つ所あら

しめざるべからず。

世界の文明は十八世紀の末歐洲にありて思想と制度との大變革を經、十九世紀に養ひ來りし富と文物とを抱き、今や百尺竿頭一步を何れに進むべきかの轉機に逢着せり。而して日本は特に此轉機を感ずる事切實深痛なる者あり。我國は二千餘年の歴史を有すれども維新までの歴史は今日より回顧すれば豫備の時代なりき、形體と修養との根本を作りし時代なりき。國民の統一と國家的意識との基礎を養ひ、來ん時代に世界の日本として世界の舞臺に一大活動をなす準備をなしたりしなり。云はゞ我國は今や青春の期に遭遇し、その將來の進運に踏み込まんとせるなり。今日日露戦争は實にこの青年が始めて世界に打て出でし晴れの初舞臺に似たり。二千五百年の舊邦と雖も、命維れ新に元氣茲に熾なり。而かもその將來の進路を思へば、風濤嶮惡、事端極めて多く極めて難し。戦争は如何に好結果を以て終結するも、直接に戦後經營なる大事を控へ、且又列強の壓力が常に吾等の有形無形の企畫

に障害を與ふる事、決して一旦の戦勝に依りて直に除くべくもあらず。而してこの一大飛躍を試みたる青年は從來の依頼的態度を捨て、事毎に自主活動の域に入らざるべからず。是れ實に青春の煩悶、精神の動搖を催進すべき大時機とす。我國は今やこの危機に入りつゝあり。吾等の自覺、一つによりて、將來の國運を作り出だし、吾等民族の眞價を發揮すべき大機運は、吾等の頭上にかゝれり。

去年頃頻に人心の動搖を呈して、青年の苦悶が一疑案として人目を惹きし機運は、今戦火砲聲の中に忘れられしに似たり。此の事實に基きて個人精神が人生問題などに熱中するは不健全の徵候にして、國家主義の道德が健全なる思想なるを證せんとする人あり。然れども是の如きは思はざるの甚しき者なり。戦時に團結の力が最も明かに現はれて人をして團結の力に依頼せしむるは自然の數なり。戦争に關しては個人は無力なるが如く、個人は常に團體と共に喜憂せざるべからず。然れども吾等はこの團結の基本は即ち個人なるを忘るべから

す。且つ又戦争は文明機轉の一波瀾にして、その波動の後には即ち文明進歩の大波動大潮流が滔々として押し寄せ来るを看取すれば、この大潮流に乗じて國民青春の危機を切り抜くるの力は、之れを理想、自覺の源泉に求め、この源泉は實に人心信仰の間に發見せられざるべからざるを知り得ん。

試に思へ、羅馬帝政の始め、國土漸く成り、地中海を帝國の池として、統治權は先づ中央に固められたり。小王國共和政治を経て一人の統治者に統一せられし大帝國は、この時始めて眞に國を建て、さてその後、に何をなさんか、又なすべきかといふ疑問に想倒せしなり。此に於てか人心の動搖は、人生問題、信仰問題として、崛起したり。今までは單に團體の人として、公共機關の一部としてのみ社會に生活したる人々は、國家文明の一轉機に際して、茲に國家の意義を検し、文明の理想を求め、始め、而して自己の心靈の光によりて之を發明發揚せんと勉めぬ。克己の、ストア哲學、智慧玄妙の、グノシス、光明快濶の、古代理想、此等は鬱勃

その英を競ひ、之に加へてキリスト教の、新光明は人心に浸潤し來り、古來比類少き人心信仰の動搖を呈したり。而してその結果はキリスト信仰の宇內的宗教となり、羅馬帝國滅亡の後にも、羅馬教會としてその世界統一の理想を繼續し、精神的に世界帝國を作らん大原動力を残したり。

吾等は今此の如き文明轉機の歴史を一々叙するを避けんも、而も此の類例は決して羅馬帝國の初期のみにあらず。夏殷周三代の治によりて青春成熟の期に達し、文明の一轉を試みんとしたる春秋時代の支那は如何なりしか。儒教が支那建國の理想根抵となり、孔子が百代の師となりしその源頭に溯りて人生問題の如何に當時の人心を動かせしかを見よ。或は又ドイツにて各侯國の内部漸く固く、帝國として團結活動すべきの時に際して、宗教改革運動が一方は政治に關聯しつゝ、他方は文藝復興後の新思潮を承けて信仰問題の大波瀾を生ぜしかを見よ。若し支那國民にして春秋の頃、青春の苦悶を経ず、精神の動搖思

索の混戦を試みずして醉生夢死の境に甘んぜしならんには、禹湯文武の道は如何にして混然たる一大徳教として孔子に組織せらるゝを得たらんや。孔子にして儒教の大組織を完成するなかりしならんには、支那國民は如何にして精神の歸着を得、建國の理想を發揮し、その國性を鑄冶發達し得べしや。支那上下數千歳の歴史に放伐隆替の變はありしも、而かも精神的にその國情の一貫確立を得たるは當時人心動搖の結果、孔聖の出現を致せしに因る。孔子は實に支那國民の師主親なり。ドイツにありても亦然り。今やルーテルの教會は國教として形式に偏し、宗教的活力に乏しき事支那の儒教に似たりと雖も、而かもドイツ國民をしてその健剛の意志と不撓の精神とを發揮し、此に依りて内部幾多の破綻をも、外寇幾度の國難をも通過して、尙國民的精神の統一を維持し、此に依りて今日の帝國統一を來たし得たるは、一に宗教改革に依りてその國民性が國民に自覺せられ、發揚せられしに因る。而して文藝復興より宗教改革に至るまでの人心の動搖、信仰問題の大煩

悶なしには、ドイツ國民も決してその自覺に到達し得ざりしなり。ケテがルーテルを以てドイツ國民の代表的人物とせしむ此にあり。日本國民は今方に此等と同様の危機に際しつゝあるなり。國家の統一漸く成り而して盛に外部の文物思想に接觸しつゝある點にては、羅馬帝政の始めに當り、東方思想の流注し來り、十六世紀のドイツが盛に南歐の思想に觸れたるに同じ。而して北方に一の強敵を得、それに對する抵抗反撥の活動に入れるは、恰も宗教改革のドイツがロマ法王の威力に對して反抗せんとし、春秋の支那が北方と西方とに隱然たる一大勢力を控へてその壓力を感ぜし時に似たり。然らば今の時に當りて國民が一大覺醒に逢着せんとして、その光明の何れにあるやを求め、人心此に依りて動搖し、人生信仰の問題が波濤洶湧の勢を以て吾等に迫り來るも皆自然の理勢にして、避けんと欲して避くべからざる命數なり。若し強て之を避け之を撲滅せんとする者あれば、そは我國民をしてこの青春危機の覺醒に逢はず、空しく領土と民衆と富財とを抱きて

醉生せしめんとする者なり。苟も國民にして一旦其國民の性情を自識し、建國の理想を發揮し、この自覺ある理想に依りて根柢あり生命ある文明の進歩を遂ぐべくんば、この際人心が人生信仰の問題につきて煩悶動搖するは避くべからざる必至の勢なり。源平遷興の後、鎌倉時代の初めに信仰の思潮が横溢し、元寇の前に當りて國民的にして又た最も宗教的なる豫言的愛國者日蓮が現はれしその日本人の後昏が、今日文明の一大危機、國運の一大轉機に際して、煩悶なく、覺醒なくして昏醉するの理あらんや。

國粹の聲も、日本主義の説も、東西文明融合の努力も、宗教混亂の状態も、皆この大動搖の一波瀾のみ。經濟の困難も、人口増加の問題も、立憲政治確立の爲めの政争も、又今の外敵に對する大戦闘も、皆この危機を痛切に國民に警告するの機會たらざるなし。始より教育の形式を一定して此に依りて人心の歸着を定め、漫に協同舉國一致を唱へて、個人精神の動搖を壓抑せんとするが如きは、皆實にこの一大勢力、一大危機

を知らざるの蒙に出づ。

文明の危機に際し、國運の轉機に會して、國民は一度は大に醒めざるべからず。而して國民覺醒の爲には個人は各一度は人生信仰の大問題に逢着せざるべからず。この煩悶と健闘となしには國民は竟に自らを知る能はず。自らを知らざる國民は、竟に文明の危機を切り、抜けて根柢あり活氣あり、又理想光明ある文明の進歩、國運の進取を遂ぐる能はず。

吾等は個人としても國家としても實に大切なる危機に際會しつつあるなり。

(卅七年四月)

國運と信仰問題

吾等は今國民として戦闘に從事してある。戦闘は團結の力でなければ到底その目的を達し得ない、是に於て舉國一致は今日最も必要の

勢である。否戦時のみならず、總て國民として文明經營の進運は鞏固なる團結、誠意ある協同に待つ所あるは云ふまでもない。人間が孤立してこの世に生存する事の出來ない以上は、團結の必要もある。又文明の長い進歩は一人の一生で成就し得ない以上は、此にも團結の要はある。然し今日戦時の舉國一致が決して盲從であるべからざるが如く、何事の協同も根底なく誠意なき雷同附和では決して善良なる効果を收め得ない。而して此くの如き協同一致の基礎は個人の信仰にある。個人の衷心から湧いて出る熱誠と自覺とに根底を据えた團結でなければ、眞の團結と稱する事は出來ぬ。

此の事は自明の事である様であるが、さて事實に於て日本人は中々この自明の眞理を諒知して、それに依て行動する性質でない。戦の勝敗は即ち國民全體の興亡に關する大事であるから、苟くも國民の一部たる者が戦争について一喜一憂するのは固より至當の事である。又この團體的動作の爲めには一部個人の利害を犠牲に供する亦已むべ

からざる勢である。然し世には天下の憂に先て憂へ、天下の喜びに後れて喜ぶ人が極めて少ない。その反對には唯一時の浮沈で、一喜一憂し、團體の喜びを喜ぶと共に自己の立ち場を忘れ、團體の動作に對しては自己の所信をも所志をも強て枉げて、それにて一致協同の實を得た如く考へる人は甚だ多いてはないか。時勢に従ふ、人と共に浮沈する自分の思ふ所はあつても此の如き一致の爲には自信を棄てる。此の如き潮流が中々日本の社會には平時から多いのである。然れば况んや自ら信ずる所に依て大に世を警醒し、世を指導し、場合に依ては晨星奮敵として戦ひもしやうといふ自信と勇氣とのある人に至ては晨星奮ならずである。而して此の如き雷同的潮流はどうしても戦時には強くなる。自らの信を貫く事を棄てるのが協同の美德である、若しくはそれ程に自らは思はないでも世と同じ波に従ふのが協同の美德である様になり易い。戦時には、一個人の價値が、少ない様に感ぜられ、一個人の尊嚴は、一般の氣運に蹂躪せられ、易いのである。

吾等は此の如き潮流に對して大に警告せんと欲する。總ての協同團結は基本のある自信の團結でなければ、偉大なる又永遠なる力となり得ない團結の爲にはその根底である個人を特に重んじなければならぬ。近い例でいつても、今日の戦争には兵士各個の精神的教養が非常に必要であるではないか。この關係は國家の團結、文明の進歩の爲めに非常に肝要の事實で、總て服従でも團結でも自信自覺から出て進んで勇むて服従する團結でなければならぬ。真正なる文明の進歩は個人に根を据える、特に戦時には随分戦争を楯にして一致を名として他を壓服して此に依て私利を計らうとする者の生じ易い危険がある。又戦時の事柄は總て機敏迅速を必要とするから、その間の處置萬事は一毫千里の差を生じて思はぬ不覺を取り易い危険がある。此等の危険を防止するには是非平素から國民にその素養がなければならぬ。即ち個人的訓練、社會的修練によつて、真正なる協同を擧げ、盲従雷同を排し、私利遺算の生じ得ない様にする修養が國民全體に普くなければならぬ。

らぬ。此の如き修養は即ち個人各個の修養で此處に協同活動の基本が存在してゐるのである。戦争の時には協同の必要があるからといつて、個人的修練を忽諸に附する様な事は、全く團體の基本を破る者である。

何れの國でも或る程度までは一二の先導に盲従し、或は軍備武威で國運を振張し、文明を進める事が出来る。近い例がロシアで、ペトロ大帝の力は殆んど不文の民を率ひて東歐に一個の文明國を作り出だした。然しながらその文明その國威は國民その者に根據を有せぬ、即ち民衆の力から湧き出したものでなく、政府者と貴族との文明であつたから、今日に至つてその破綻と弱點とを暴露し來つて、之を救ふには根本的改造を要するを示すに至つたのである。ロシアの専制政治が時には痛快な決斷を以て内治に外交にその手腕を振ふのを見て之を羨望した事のある日本内務省の人々は、今何の感を抱てゐるか。ロシアが人民の苦痛をも實力をも顧みずに兵備を修するのを見て日本も亦此の如

くしたいといつた恐露病の大將、今將た如何。總て基礎なき團結壓制團結は必ず不時に破れて憐れの最後を遂げる必然の勢を有してある。永遠なる文明の光榮は民衆の力に出て、民衆各個の精神自信から湧き出る勢力である。眞正の國運は人民の修養信仰に基き熱誠と自覺とに養はれた協同に依らなければ永久の力でない。

それ故に何れの國でもその國運が一轉進をなさうといふ時には、その國の文明の基本が動くに従て個人精神も動搖する。全體としての進運も可なりに進み、も一歩進て大に自家の特色を發揮し、世界の文明の中に自家の立脚地を得ようとする時には人心は忽然として我れに歸り、茲に「我れは何であるか」と問ひ始める。國家は何の意義があつて存在してあるか」と疑ひ始める。即ち是れ人心動搖の時、人の生命ていへば青年の危機、一國進運の最も大切なる時期である。一個人がその青年の危機に際して如何の覺悟を定めるかが、その人の一生の性格を發揮し、價值と運命とを定めるが如く、一國はこの危機にその將來の運

動を定めるのである。

世の人よ、戦争は大事であり、戦後經營は尙更大事である。然し此等の大事も實にこの危機の一波瀾に止まる。それよりも重要て永遠なのは即ちこの國運の危機、文明の轉機の大潮流、その大潮流の根本原動力、その大運命の支配者たるべき信仰、自覺の問題である。開國進取、立憲政治、日清戦争、富國強兵、さては今回の戦争、段々に目的を達しようとしてあるが、さてその最根本の問題は個人の信仰、國民の自覺に存し、人心の歸着が最大の疑問として解決を待つ。若し個人の自覺が確立して、人民が皆自分の生存に至大の意義のあるを確信するに至れば、その生命を托する國家にも、言語歴史を共にしてある同胞にも、亦同じく至大永遠の意義と天職とのあるを覺悟して、茲に不變の根據あり、永遠の活動ある團結を生じ得る。此の如き愛國心で始めて永遠眞正の愛國は發揮せられる。

されば、戦争の中でも一日も信仰問題を忽諸にしてはならぬ。今日

の信仰問題は、此世が憂い悲しい「後生が氣にかゝるといふ悲哀な弱い主感的の信仰問題でなくて、如何なる根據の自覺で個人の方が展ばせるか、何の理想で個人も國家も進むべきかといふ進取活動の問題である。この問題をよく切り抜けなれば、戦勝も一時の泡沫に過ぎずに終る事は明かである。

現今の信仰問題

國は擧て敵軍の降伏を鶴首し、人は競て海陸の戦報を談ずる今日、軍功愛國に直接の關係なきが如き信仰問題を論ぜんとす。世間の多數は恐くは吾等の迂愚を笑はん。然れども何ぞ知らん、國家の深憂は、却てこの間に存し、人生の根本問題は、却て今日の時勢に最も痛切の關係あるを。

試に思へ、明治二十七八年役の當時、陸軍は蓋平、營口を略し、艦隊は旅

順を占領し、威海に迫り、國民は開國以來最初最大の光榮勝利に酔ひて、歡呼の聲四海に洽ねかりし時に當りて、誰か愛國の外に道徳あるを思ひ、殉國一死の外に人生根本の原動力あるを想ひしや。而して戦は終れり。一挫折のありしにも係らず、光榮と國威とは世界の人目を驚かしたり。戦後經營、軍備擴張、實業振興、此等の題目は人心を占領したり。而かも人心はその間にも内に自ら省みざるを得ざりき。國家的意識の名の下に、人心は國民なり個人なり、一切人生活動の根柢が何か深き精神的源泉なかるべからざるを悟り始め、實業社會にすら旺盛なる實業活動も個人の信義自覺に基く者あるに非ざれば、利害排擠、不徳偷安の爲に眞の進取活動を遂ぐる能はざるを覺えたり。終には國家主義を以て一貫始終し、あらゆる宗教、信仰、趣味を排拆したる官風教育は漸次その缺陷を示し、破綻を現はし、教育社會には信仰と趣味とを求むるの情切なる者あるに至りぬ。北清事件は再び國家的意識を喚起したり。而かもその結果は曩日の如き國家萬能主義として發表せずして、

我が國民が東亞文明の先導者たるべき天職の自覺、與國啓發の、人道的活動として表はれぬ。人々各自自ら内に省みて、多事なる國運の進取に處し、又多端なる社會の活動に投じて不撓永久の進取の爲には、何か人心天性の深き根柢に求むる所なかるべからざるを知るに至れり。此に於て最も利害の打算に長じたる實業社會に於てすら、その青年の中には道を求むる者を生じ、天真眞摯なる學生、青年は滔々として人生の問題、信仰の消息に苦慮し、而して此の本能的天籟の自由を束縛する社會と學校とに對して反抗の煩悶を生じ、身を以てこの煩悶に殉する者をすら生じたり。老成人、利害の人はこの風潮を以て病的なりと貶し、偏に社會共存の利害打算の道德を以て之を對治せんとしたり。而も此の時に當りて官風、教育は救ふべからざる破綻を呈し、學究的、道德は人生に對して何等の實力なきを暴露し終りたり。

吾等は今、過去數年間に於ける青年の煩悶、或は求道信仰の聲が果して老成輩の云ふ如く病的現象なりや、又病的なりとするも、現今の社會

や、教育は果してその反對に健全なりやの問題を研究せざるべからず。只この問題は之を別論に譲り、茲に今後戰勝の國運が復如何なる氣運を將來すべきかを考究せんのみ。

一時勃興の信仰問題は二月開戰以後直に沈靜に歸したる者の如し。吏風教育家は相慶して曰く、開戰以後文學宗教の出版物減少したるは凡て國家的意識が青年の精神を健全にして、彼等をして信仰や趣味の病的傾向を脱せしめたりと。或は又言をなしていふ者あり、戰爭は眞に士氣興奮の良藥劑なり、國家道德の爲に十年二十年に一戰するを要すと。然れども是れ皆自家教育の効果なきに失望し、會々戰爭に伴ふ愛國の現象によりて自家の失敗を慰せんとする愚昧の思想のみ。古今東西何れの國か、平素士氣の修養なくして、強敵に當り能く光榮ある有終の勝を制したる者あらんや。又何れの民か、根本たる人心の奥に横はれる信仰、自覺に基かずして、能く有終の協和團結を遂げ、又は個人の自由、人格の基本なしに、教育なり實業なりの美果を收めたる者あり

や。唐朝の文明は六朝の素養多きに居り、印度孔雀王統の治平は佛教の興隆と相携提し、羅馬の最大光榮は帝政統一とストア以下の諸哲學宗教とに歸し、歐洲近世の文明は實にルネサンスの賜に非ずや。吾等は今一々之が歴史を細説せざるべし。人々若し能く虚心平氣に、今日以後日本の國勢が何に依り何に向て發展せらるべきかを考へ見よ。今日戰陣の間に已に多く信仰確信の美談を聞き、十年前の戰役には守札に身命の安全を祈る者最も多かりしに反して、今日は出陣と共に或は戰死に當りて佛教なり基督教なりの眞信を體現する士卒多きにあらずや。是れ皆時勢の推移と人心自然の要求に出づ。

且つや今度の一戰は日本と東亞とにとりての死活問題たるのみならず、東西の文明と、その根柢をなせる宗教の關係交渉に關する大問題の端緒を開きたる者なり。吾が國は東亞平和の爲に干戈を執りて西歐の強國と戰ひたり。次で來るは平和經營の大任務なる事は萬人の認むる所なり。而して平和經營の根本は人格あり、自信ある個人の活

動と國民の相信相依の團結とにあるや論なし。個人と個人と相信し相依らず、只管利害によりて離合する者の到底實業經營を完成する能はざるは、既往に於ける吾が韓國經營の失敗に徴して明かなる者あり。况や今後益す節度あり信用ある英米の商業家と相聘馳して東亞の平和經營に盡さざるべからざるに於てをや。而して人と人との信用は個人人格の信用にして、人格の信用は實に信仰と徳義とに養成せられたる確實なる人格を要す。由來輕薄背信苟安の風は日本商工の通弊にして、この惡風は實に利害の外に何等の自信も理想もなく、迎合投機の外に何等の精神も自由もなきに出づ。而してその極は終に大利害の着眼をも失ひて目前の小利害に追はれて、事毎に外人の信用を失ひ、自家の利益をも破るに至る。自信と自由とは一切活動の根本にして、而してこの自信と自由とを養ふは實に理想ある信仰、信仰に基く達觀に依らざるべからず。商工實利の社會をして廿七八年役後に於ける如き昏敗失望に終らざらしめん爲にも、信仰の問題は人生活動の最大

源泉として最も切實の問題となり來らざるを得ず。加之、勝戦と共に國民の活動と自覺とは東亞の運命に關する大事となり、今後世界の活動に加はりて東亞文明の運命を支配するの大業は吾が肩上に落ち來らざるを得ず。若し勝利に酔ひて一切文明の活動を忽諸にし、軍備のみにて國威を輝かし得るが如く思惟する者あらば、そは嘗に開戦當初の目的を忘れたる者なるのみならず、又實に世界各國民が目を聳て、吾が國に待つ望に背き、その同情と尊敬とを轉じて、彼れは如何にしても黄人なり島國民なりとの侮蔑を買ひ、彼れは武の外に能事なき民なりとの判斷を固からしむるに至らん。今後國民の方針は一に維新の國是開國進取の路を進て撓まざるにあり。物質文明に於て進取するのみならず、精神的文明に於ても心を開き國を開きて、進て固有の文明と新來の文明とを鑄冶し、茲に將來の新文明を開發するの覺悟なかる可らず。此進取を遂げ、この天職を果さん爲には吾等日本人は過去の經驗に於けるよりも、一層大なる煩悶を經、又從て

一層大なる勇氣と自信とを發揮し、一層大なる理想を發見せざるべからず。佛教が欽明の朝に佛像經卷と共に入り來りし當時にありては、國民の信仰問題は僅に國神蕃神の争ひに過ぎざりき。聖德太子の治政は神佛を鑄冶して國政を新にせんとせしも、尙ほ未だ一般の人心に訴ふる信仰問題とはならず。奈良朝の宗教も美術も尙ほ未だ十分に國民的鑄冶を經たる者にあらずき。然るに平安朝の初め、内外融合の文明がその曙光を染め初めしより、信仰の問題は漸次人心に浸潤し、その大破裂大煩悶と、その破裂の結果、特異の信仰理想を得るに至りしは、實に源平遞興を經たる後の鎌倉時代にありき。今や吾等は吾等の祖先がこの六七百年の間に經たる文明の大運動、信仰自覺の大波瀾を僅々四五十年の間に經過し成就せざるべからざるの境遇にあり。神后の外征より弘安の外敵降伏に至るまでの國運の進歩を、征韓論より日露戦争に至る三十年の間に短縮し、成功せんとする國民は、又その文明の根本たる自覺理想の上にて、激甚なる潮流に乗じ、洶湧の波濤と

戦はざるを得ざるは自然の勢にあらずや。况やその潮流は實に世界文明の大勢が東西より吾が國に迫り來れる必然の運命なるに於てをや。若しも吾が國民にして今日の時勢を達觀し、而して内に深く自ら養へる理想信仰によりこの潮流に乗じ、波瀾を制するの覺悟と力量とを發揮することなくば、一時の盛運は槿花一朝の榮たるに過ぎざらんのみ。

吾等は吾等の祖先が奈良以後、鎌倉時代までに成就したる先例を有せり。吾等は失望するを要せず、躊躇す可らず。祖先以來の力量と、新に得來りたる自信とによりて此時運の廻轉に處し、その彼岸に到達せざるべからず、而もこの力は徒爲にして發揮せられず。此努力は健闘なしには遂げられず。文明の大潮流は國民の自覺活動に依りて乗ずべく、國民の自覺は實に個人の自覺信仰に訴へて始めて根柢あり、彈力ある實勢力となり得べし。是れ吾等が世の迂愚と稱するに反して、毎に又特に今日、信仰問題の切實なるを痛言する所以なり。

人生の美德は戰場にのみ表はれず。健全の道德は決して國家萬能主義の産物に非ず。老成の教育家よ、又利害打算の道德家よ、而して又自信を失したる戰勝謳歌の徒よ、信仰の煩悶に驚く勿れ、その病的なるに失神する勿れ、吾が國の文明は今や強大なる潮流の集合に捲かれつゝあるなり。又偉大なる轉進の前途を有するなり。この時に當りて一二苦悶の聲あるを聞きて直に病的と斷じ、信仰を咒咀せんとするは怯懦の徒のみ。大なる平和は大なる健闘の後に來らざるべからず。大なる潮流に乗ぜんには又大なる犠牲をも甘受せざるべからず。

吾等の祖先に神后、田村將軍あり、時宗、太閤あり、吾等の同胞に、東郷、廣瀬乃至無數の英雄ある如く、その祖先に聖德太子、空海、最澄を有し、法然、日蓮を有する吾等は、又今後、信仰の大勇者、大師、子王を有せざるべからず。吾等の力は此にあり、光りも、信も、望みも亦此にあり。(卅七年八月)

信仰の意義

現代思想界の風潮は、研究を名として、徒に博渉に走り、細緻に局して爲に大本の心霊に關する問題を遺却して居る。學者なる者の多數は、研究によつて道徳を振作し、學知によつて信仰を作り出だし得ると考へて居るのである。亡友橋牛高山が『吾等はパンを求めてパンの製造法を聞きたり』と絶叫したのも此にある。凡そ信仰にしても、道徳にしても、其事實は活きた勢力で、その勢力は、人性本來の要求趨向に基いた、事前的、或は事理不二の活物である。學者先生の研究思索は、この事實活力の顯はれ動いた跡について、事後的に、究明、案配する、役目を務むる者ではあるが、この活力を支配し、左右し、或は又指導し發揮するのは、人性本來の光明生命と、及び天與の殊能によつて事前的又事證的に直接にこの活力と呼吸相通じ、神相接する人格の力を待たなければならぬ。信仰道徳の事は無形の事、之を論ずれば抽象の空論の如く見える。

理想と信仰

注意の信仰

恐れがあるから、有形現前の事例を借りて之を説かう。美術は必ず聲なり、形なり、色なり、吾等の五官に訴へ得る方法で、人心を動かす勢力であるが、此美術と信仰道徳とは最も密接の關係を有してをる。その力が理論や推理を超えて、人心を支配する點に於て、その感化力が時や處の局限を超えて、人心に留存する點に於て、又その力は世間生活の利害得失を屈伏しても、それ自身の靈光を發揮する點に於て、又その發作活動が所謂天籟として、人々の心霊の奥に發動し、その生命の最も深い力となる點に於て、二者皆同様である。さて美術の作品に接して、その美を樂むには、各それの準備素養がなければならぬ、又そを作り出だすにも、各その苦心經營を要するは無論の事である。然しながら、その準備と經營とのみで、作品が出来、又そを眞に樂む事が出来るか。奈良朝の彫刻を味ふ爲には、當時佛教の信仰を知り、諸佛諸天の功德神話を知る要はある。然し、佛教史の知識と神話の研究とのみで、奈良朝美術の美に接し得るか。その作品の優秀を賞し、その美を味識するには

その時の佛教を知るのみでなく、又その佛教の信仰に對する同情がなくてはならぬ。この同情によつて、作家が各その信仰彫刻形像に表はした至情純信を味ひ、又當時の人がその信仰からして此等の形像の中に佛力神徳を渴仰し、鑽仰した跡に同情しなければ、此等の美術品は形式の巧なる外何等の價もなき者となり、その美の内面本來の價は到底味はれずして終らなければぬ。今日の美術鑑定家などが推古式と天武式との別を論じ、或は春日佛師と鎌倉佛像との優劣を見得るとしても、その賞鑑が美術作品の内面本來の面目を發揮するのでなければ、その賞鑑は骨董屋の仕事に過ぎない。信仰から出た作品に對してはその賞鑑の間だけでも、心がその信仰と同化して、その作品の内に入つてその眞面目を味はなければならぬ。獨り信仰ばかりでなく、一般に人情を味ふのも亦同じである。源氏を讀ても、王朝の人心花にのみ成り行く間に、沈痛に人生を觀じた著者の心に同情せず、平家を誦しても、當時榮華を極めた平家の俄の没落に心驚かされた、その作者の心情

を味はずして、どうしてその眞味を味ひ得るか。固より源氏を味ふ爲には、王朝の言葉のみやびにみやび、優に雅なる風調を研究しなければならず、平家を喜ぶ爲には、その言葉の簡なる中に力があり、平易の中に深みがあり、その音調律呂に如何の變があるをも明にする要はある。然しながら、此の如き言語律呂の研究のみで眞に源氏、平家を味つたといへるか。ドイツの詩人ハイネが、ライン河上のローレンライ岩を詠じた詩がある。今はドイツ人の最も愛玩する所、ドイツ人は他國に居つてこの歌をきくと、故國を忍ぶの情に堪えずして、潜然涙下るを禁じ得ないといふ。此味はハイネの詩の意味や、又その純朴な語調にも因るが、然しそこにそれ以上更にドイツ人の愛國心、その愛國心が彼等の祖先以來のラインの流れと離す事の出来ないその心情を汲めば、吾等外國人と雖も、大に其歌の眞味に入る事が出来る。若しその反對に西洋の音楽史家が、日本樂の音符を研究して、オクターブのどれが缺けてゐるとか、どうなつてゐるとかいふ事を知つて居る様な工合に止つたなら、ど

うして追分節の悲しい様な甘味が分らうか。
 美を味識する方にしても、此の如き同情が必要である如く、その創作に至つても一層この同情即ち愛の必要を見るのである。詩人は律呂を辨へ、畫家は色彩に通じなければならず、此が爲めには研究學習を要する事は勿論である。然しながら考へて見よ、草葉の末の露一つに天地の美を歌ふ詩人は、その露を愛しないか。大空の雲一片を畫帖に寫しとつて我れを忘れる畫家てなければ、果して天然の至美を書き得るか。基督を信ぜずして(少くとも基督の信者の信に同情せずして)基督を書き、平家の末の憐れを感じずして、維盛の都落を書く畫家にして、その末技以上眞に人を動かす畫を作り出だした例があるか。近松の心情が小春の情義を吸み分けたから、『天網島』は今に至つて人も動かすのではないか。

ラスキンが苦心の研究と天賦の賞鑑力とによつて、遺憾なく發揮した如く、ラファエル以後のイタリア美術は、色彩といひ筆つきといひ、配置

整頓といひ、技術は非常に進んでをるが、そこに一つ Vitality が缺けてをる。此れ程の技量はなくとも、十四世紀の美術には、楚々人を動かし、情味津々盡きざる者がある。此の如き別は、つまりこの兩方の畫家の精神が違つてをつたのである。信仰あり心情ある畫家は、技量以上の力で人を動かす作を作る。彼等の精神が活きてをるから、作が活き、その活きた作が又人心を動かすのである。精神の根底が缺けて居れば、色彩刷毛の技能は終に塗抹の用をなすに過ぎないで終る。

美術でも、信仰でも、靈性の根底から人を動かす力を有する者は、又本來の光明から湧いて出る力である。研究や分析案配はこの根底が事實と現はれた跡を追ふのみで、その現はれを左右する力を有しない。それを左右する力は、どうしても本來の源泉に待たなければならぬ。本已に立てば、未慮るにも足りない。

然らば此等善美の源泉を汲むには、吾等はどうすべきか。曰く『愛』の一事、他語ていへば『信』である。南都二月堂の梵天像を觀て、吾等は何故

に之を傑作と見るか。その作者が梵天を仰て、その圓滿なる相好の中に深厚なる信を發揮した、その作者の信仰に同情して、少くともその賞鑑の時だけでも、作者が梵天に對して有した渴仰を汲むからして、作者の渴仰信念が斯くも能く形相に現はせたかと感服するのである。然らば、作者がどうしてかくも梵天を渴仰してその念頭心中に見えた其相形を圓滿に現はし得たか。梵天が佛陀を信じ、佛陀を天人師、善逝と仰いて、佛法守護の任に當らうと誓つたといふ、其梵天の信仰に分け入り、その渴仰を自分の心中に體得したから、即ち之を信じたからである。然らば吾等が一天像の美を深く味ふその信の中には、三世を貫いた信仰の靈光が輝き、彼我相融合する愛の甘泉が流れ通ふてゐるのである。その他平家を愛誦しては、心が平家没落の哀れと同化し、バイネのローライによつて、情はラインの河邊に通ひ、ドイツ人の愛國心と接觸するものも、皆信愛の結合力である。七十子の徒が孔子を師として、その師の道を傳へたその熱情、眞鸞が先師源空上人を信じて、先師にすかされ

たりとて悔いずといつたその誠意、又は日蓮が法華經を信じた結果、自ら身に上行の使命を帯びてをると勇進したその力、是れ皆同様の信仰即ち愛である。此等信仰の内容を言語で現はしたなれば、理論の缺陷もあらう、その信仰の事柄を直ちに世に行はうとすれば、實世間と容れない點もあらう。而かもその信仰が古今を貫き、彼我を融合する、その現前の力に至ては、何人も之を拒む事は出来まい。その信仰が、今迄、その人に想ひ到らなかつた新しい消息を齎らし、今迄は到底有り得べからずと思つた大なる力を與へる事實は、どうしても事實として力として存する。一旦人を戀すれば、『相見ての後の心にくらぶればむかしは物を思はざりけり。』其昔はなかつた物思ひが、戀によつて生じ来るならば、又その戀によつて自分と彼の人と、彼我の別を脱却するならば、人を信じ、その人の信を信じ、信仰の中にその人と神相通じて、それが爲に新しい望みと力とを得來るに何の不思議があるか。

佛陀は宣した、『我を見る者は法を見る、法を見る者は我を見る』と。

又宣した、『正しく如來を信じて決定傾動せざる者は不盡の生命を得る』と。此の故に佛を信じた舍利弗を始め諸比丘は佛の眞子、法より生じたる子といはれてゐる。佛陀を信ずるその信によつて、吾等は佛陀が體得悟證したる法即ち眞理その者と一つになり、佛と法と我れとは信の中に融合して三而一、一而三となるのである。

基督は何といつたか『我れを知る者は我が父を知る。』『我れを信ずる者は生命の泉その胸に湧き出づ。』吾等は基督を信じたなれば、又基督自身の信を己れに得る、従て基督が父と仰いだその天父を信じ、之を『吾等の父』とし得る。今日は野に在つて明日は爐に投げ入れらるゝ、堇の花一つにも、此くまでの優しい姿と美しい色とを與へた天父は、吾等にも亦人の人たる道を與へ、吾等を子として愛してをる事を信じ、その愛に接しその愛の中に活き得られる。百合の花一つにも天父より賜はつた純潔がある如く、吾等にも亦父を愛し、人と人と互に兄弟たり得るを信じ、その信仰に従て生活し得るのは、一に天父の愛を自らに得

て、吾等に傳へてくれた基督を信ずるから生じ來る生命の甘露である。基督を信ずれば、天の父とその子なる基督と吾等自分の心靈とは信の中に融合して三位一體をなすのである。

麋鹿野に依り、禽鳥空に翔けるが如く本然の生命に歸し本來の面目を全うするは、一に眞人を信ずるに依て生じ來る、否發揮せられるのである。この信の誠があれば、吾等は野の末の草、大空の雲の中にもその美を見て之と合一し、人情の奥を汲み分けて、志士仁人と共に義憤し、哀れの戀人に同情し得て、天地人生は皆我れと共に活き、我は又天地人生と一つになつて法爾の生命を營む。ニイチェかいつた『汝の立つ所を深く掘れ、其處には泉がある。』深淺の別はあつても、泉は常に脚下に湧くのである。天然の美を愛する詩人、畫家は、天然から悟入し、人事人心の機微に深き同情を持つ戯曲家、音樂者は、人事人心から悟入する如く、眞摯の誠を捧げて其師に頼む弟子は、その師に歸依してその師の徳と智を得て安立し活動する。况や佛陀を信ずる者、基督を信ずる者に於て

をや。佛陀を信すれば、佛陀は已に二千五百年前の印度人ではなく、今現に我れの中に生きて動いてをる如來である、一切の中に顯現してをる法身佛である。基督を信する人には、かれは千九百年前に遠い猶太に生まれたる異人ではなく、此處此身に降て來てをる聖靈である、一切を造り一切を養つてをる神である。佛といふも神といふも、或は宇宙法界、人生天然皆外物でなく、自分にある。信に依て新しい生命を得た否、本來の靈光に返つた自分は、今迄の『我れが己れが』の自分でなく、佛身神靈と融合せる自分である。

眞といふも善といひ、美といふも、此の如き信と愛、佛教ていふ信 (Faith) と樂 (Pain) とに基かなければ、眞に人生の力とはなり得ない。眞善美に關する事柄は、學問智慧で事後的に研究分析し得るとしても、事證の實、事前の力は、此の如き不盡の源泉からでなければ流れ出てない。涅槃甘露の道、不盡なる生命の河、皆人々の中にある信によつて人々の力となる。

(廿七年四月)

所謂る個人主義の風潮

明治以來の思潮史を見來て、最も吾等の注目を惹く現象は、二三年以來特に著しくなりし個人主義の風潮なりとす。固より十年代に於ける自由民權説も一の個人主義なるに似たるも、かれは、社會的見地を離れずしてその中に個人の自由平等を主張する者なりき。恰も今日の社會主義者が人民の平等個人の自由を極端に主張しながら、尙ほ之が方法としては極端なる專制的社會組織を根本主義として、總ての人を身心共に社會的制規のみにて支配せんとするに同じ。然るに今日社會の一部、特に青年の間に一風潮をなせる個人主義に至りては、風趣全く之に異なり。彼等は徹頭徹尾自己の外に何等の教權をも規律をも認めず、從て何物をも信せず、何者をも愛せず、獨り自ら標準となり、獨り自ら行はんとす。而も彼等の自ら標準たらんとするは、必しも深く自ら頼む所あるの結果にあらず、自ら行はんとするも、而も勇猛一貫の大

意志あるにもあらず。その上なる者は自己の知識を頼み、自己の小天
地を以て萬事を裁断せんと擬し、その下なる者に至りては、放埒、不法を
以て自ら高しとする者をすら生ずるに至れり。或はロマンテク風と
稱し、或は煩悶を名として、天下只己れ一人の爲に存し、同胞皆自己の意
の如くならん事を要求し、その意にして達せざれば、憤懣怒號して罪を
社會に歸す。是の如きは個人主義の惡方面なり、而もこの惡風が今の
社會に風潮の一をなせるは事實として之を認めざるべからず。彼等
の或る者がニーチュを口にし、標牛を崇拜すと稱し、天才を以て自ら居る
が如きは口を故人に藉るに過ぎず。彼等の中一人の眞にニーチュの意
氣に同情し、その大文章を味識する者ありや。又眞に標牛が短き一生
の健闘の跡を追ひ、その率直眞摯の性格を欣慕する者ありや。惡風潮
の口實となりし故人こそ誠に迷惑の崇拜者を得たる者といふべし。
吾等は個人主義を以て直に惡風潮となす者にあらず、只眞摯の氣風
を缺きて尙且つ個人の威嚴を唱へ、勇健の氣力なくして煩悶を口にす

る者を以て惡風とするなり。個人主義なる者は個人に自ら頼み、自己
に忠實なるの眞摯ありて、始めて個人心靈の奥に入り、その靈光の中よ
り、不屈の勇氣と率直の信仰とを發揮し來るべし。此の如くにして自
己に忠なる者は決して獨り自ら高しとして常操なき自己の思惑によ
りて徒に他を罵るの徒にあらず、必ずや自信の中に感應道交の甘味を
味ひ來り、此に依て他の信頼すべき人に信頼し、渴仰すべき人に渴仰し、
自己心靈の光明に一段の光輝を與ふべき偉人に接しては自己を投じ
て衷心の尊敬を捧ぐるを辭せず。ニーチュがシペンハウエルに於て眞
哲人の意氣を發見して之を師父と仰ぎ、標牛が日蓮の光明に接しては
一切の我執を投じてその中に滅し逝きしが如き是れなり。一々の光
線は各々その能に従つて青色を放ち、赤色に照らす、その個人的獨立は
こゝにあり、而かもその個人的獨立は白光遍滿の源より出て、又その本
に復歸す。人間心靈の光は個人具象の心容に現はる。個人を離れて
心靈の活動あるなし、而かもその靈光の奥に入れば入るほど、その本源

無量の大光明に入らずんば已まず。個人の心靈は個人を没したる悪平等の團體主義の中に現はるゝ者にあらず。されど此と同時に孤立獨尊、本源の大光明に接しても其の中に自己を没したるを敢てせざる者は終に悪差別の邪見たるを免れず。自ら頼む人は又人を信ず。自らを頼まずして自ら社會の中に没する者は人格なきの人。而して人を信じ得ざる個人主義は終に眞に心靈の奥に入りたる個人主義にあらざるなり。

吾等は固より或る一部の論客或は教育者の如く、國家主義を以て個人修養の上に萬能力を有すとなし、武士道を以て道德の極致となし、單に時勢に従ひ、現代に謳歌する者を喜ばず。此の如きは惡平等の上に立ちたる團體主義にして、その極は個人の自由を損ふのみならず、又實に個人の品格を害し自立の氣風を損じ、却て基礎あり精神ある團結の基本を破壊する者なればなり。此の如きの論者は、政府を以て國家となし、執權者の爲めに民人の精神をも道德をも支配せんとするに至る

は自然の勢なり。吾が國文明の由來する所決して一日にあらず、その前途又現在戰爭の前途より遙に遼遠なるは云ふを待たず。この活氣ある國民、命維れ新なる國民をして一朝萬人同型の道德に従はしめんとし、爲に信仰、自覺、自立の大本に着目せずして一時の必要のみによりて、一國の風教を左右せんとするが如きは、殆どこの大國民前途の望を枯らす者なり、一時の都合に願慮して遠大なる進取の源泉を杜絶する者なり。吾が國の文明は今や大なる危機、要重なる過渡に際せり。この時に當りて思想の不統一を來たし、個人の煩悶を増し來るは是れ寧ろ自然の數たり、發達の必要なり。吾等は已に屢ばこの事を痛論したり、而して此故を以て今の國家論者が、或は國民道德の統一を名とし、或は勅語を盾とし、或は又現在戰時の必要事たる舉國一致の威權を利用して、直に信仰問題を撲滅し、個人の健闘、個人の主張を咒咀せんとするを惡む。彼等が口に、國家を唱へざる者は、直に不忠不臣の人なるが如く、見彼等と共に、一も二もなく、軍隊に謳歌せざる者を以て、舉國一致を

破る者となすが如きは、殆んど虎の威を借る狐の言動に似たり。而して今日教育界思想界又ジャーナリストの大部分は實に此の如き狐の類なるは吾等の慨嘆して措かざる所。かの悪差別の個人主義の悪風潮を惡むと共に吾等は此の如き惡平等の國家萬能の邪見を以てこの前途多望の國民的文明を天逝せしむる惡魔なりといふを憚らず。

思ふに過渡の時に際して、人々各その自覺を發揮し、此に依て文明思想の大潮流を切り抜けんとするは必然の勢なり。個人主義の今日に起り來れるは決して偶然にあらず。然るに近年教育の風潮は益す個人の人格を重んぜず、學生を遇する事敵人の如く、有力者は個人自由を壓抑して、一般人民を見る事奴隸の如く、加之開戰以來、舉國一致の美名は往々にして人々の思想の上に迄害用せられて、一致は阿附となり、讚美は諂諛とならんとす。この時に當りて折角發生せんとしたる個人の自覺が、愛憤懊惱の極、反動的に放埒なる個人主義となり、その勇氣は病的に我執と變じ、而してその個人主義は他と相容れざる妄執となり、

その我執又一貫勇進の眞摯を缺くに至るは是れ亦殆ど已むを得ざるの勢なり。今の個人主義が病的デゼネレートのなるは蔽ふべからず、而かも之れと相反する國家主義亦病的欣衝的なるを如何にせん。欣衝的を以てデゼネレートのを惡み、病的と病的と相對し、而も互にその病態を増進す、一國文明の愛此より大なるはなし。

今日の國家主義と今日の個人主義と共に、是れ社會の惡風潮なり。之を救濟するは一に自信自覺に基き、而も能く他を信じ、他と和し得る、尊嚴なる個人の人格に基きて立ちたる、光榮ある國家民族の進運あるのみ。吾等が毎に信仰問題を提出し、眞正の愛國はこの靈光の源泉に養はるべきを絶叫するは此が爲なり。

(廿七年十月)

犠牲の價值

自立は人生の根本主義にして、犠牲は人生の美果なり。この二大原

動力は、一見すれば相反の事にして氷炭相容れざるが如きも、而かも能くその兵味を味ひ來れば、人生の事、その一を經とし、その他を緯として參差交融し、此によりてその善美を成さざる者極めて稀なり。吾等は根本義として一切の人に自立の氣風確立を望むと共に、眞に自覺あり自信ある人の美德として自らを犠牲にし、身を殺して仁を爲すの情と勇とあらん事を求む。今の時國家が其運命の爲に戰へる時、特にこの言をなすは、時勢と人心とにつきて深く憂ふる所あればなり。

吾等は抽象の談理を避けて直接に事實につきて評論を下だし、同胞の猛省を乞はん。いふ迄もなく、戰爭は團結の力によりてなし得べく、團結は人々の協同より生じ、協同とは人々が互に自らを犠牲にして他と調和し共存するの謂に外ならざるなり。此に於てか一國興亡の依て係るべき今の大戰争をなすに當て、國民が舉國一致の實を擧ぐるの要あるは、いふまでもなく、舉國一致は又幾多個人の犠牲をも辭すべからざるなり。然れども、吾等が今日特に一國の爲に憂ふる所は、舉國一

致の遂げ難きよりも、寧ろ眞の舉國一致即ち協同を十分にし、協同の爲に自らを犠牲に供すべき個人自信の乏しきにあり。若くは又世の舉國一致を慫慂し、獎說する輩が、その根底に注目せずして、徒に表面の一致を求め、此が爲には終に協同の根本たる個人の品格をも、價值をも、蹂躪して憚らざらんとするの態度にあり。

その最も賭易き一例を擧げんか。戰爭の爲には、國民は兵役に服し、その血を以て國に貢すべきは、殆ど自明の事に屬し、國民の大多數は決して之に對して不服を唱へず。唱へざるのみならず、苟も報國の念ある者、同じく祖先の國に生まれ、同じく一國進運の將來を憂ふる事、自家の利益に異ならざる者は、大なる我れの國家に、小なる我れの一命を捧ぐるは、固より中心の歡喜なり。軍人が戰に死するは、その人が眞に國を愛する者なれば、名譽體面の爲にも、あらず、義務道德の爲にも、あらず、渾然として理義を絶し、己れと國と同胞と我れとを一にして、國民過去の歴史と將來の光榮とを、死の一時に、收め、堯爾として死を辭せざるべ

し。衷心此の如き偉大なる愛國の熱情に殉ずる者は固より多数の軍人に求むべからざらん。その此に至らざる者は或は名譽の爲に、或は義務の爲に戦死するも、乃至國內にありて努力奮闘するも可なり。兎に角、一國の爲に一身を犠牲に供するは戦場にある者と國內に留守する者とを問はず、庶幾すべく覺悟すべき所なり。個人にこの義務乃至覺悟あり、國家が之を要求するは是れ協同の第一義に基きたる自己犠牲の美德の發表なり。而かも何人かその必要を濫用し、此美德を利用して、終に犠牲を輕んじ、人格の價値を蔑視するの權能あるべきや。世は一時傳へて、旅順攻圍の始には作戰の計畫、偵察の周到に缺くる所あり、爲に多く惜むべき犠牲を出だしぬといひはやしたり。吾等は此の如き事實あるべしとは信ずる能はず、又之を望まず。又假令此ありと假想するも、此が爲に當局者を攻め、その不能を鳴らして死見の齡を算するの愚をなす者にあらず。吾等は此の如き流言の傳ふる事實の如何を研究する能はず、又今の時は之を研究するの材料を得べからず。

吾等の憂ふる所は、此の如き流言の事實如何にあらずして、この流言に對して取りたる國民一部分の態度にあり。此の如き流言あるに際して此を信じたる一部の國民ありき。而してその人々の或る者、或は多くの者は此に對して如何に考へしや。或る新聞は此の如き犠牲は已むを得ずと辯論せんとしたり。又或る人々は此れ位の犠牲は、その所因の如何に係らず、國民の當に覺悟し忍受すべき所なりとして冷然その犠牲を看過せんとしたり。吾等の言はんと欲するはこの點にあり。犠牲は戦争否一般社會的團結に避くべからざるの事實なり。而かも若し必要以上の犠牲が人命の上に強いられたりとせば、此の如きの流言を信ずる人にとりては、深痛の感動を興こすべき事、無限の遺憾を感ずべき事、即ちその犠牲の爲にはあらゆる追薦の意志を表し、又行動を執らざるべからず。單に已むを得ずとの一語を以て、冷然之を看過すべきにあらず。然るに世人の輕卒なるや、此の如き流言を信じ、又その刻薄なるや、此の如き犠牲に對する至當の敬意と弔意とを盡す事をな

さずして、却て之を至當の事の如く見做すは何ぞ。是れ此等の人々には協同の根底たる個人の尊嚴と犠牲の價值眞義とに對する至當の觀念を缺くが爲に、あらずや。若し世に少數にても此の如く犠牲の本義を辨へずして、尙ほ口に舉國一致を唱ふる者あらば、是れ實に舉國一致、億兆一心の第一義を破却するの徒なり。

旅順攻圍軍に關する流言に對する一部人心の態度はこの一事に止まらざりき。十月中旬、軍艦平遠沈没の事發表せらるゝや、人は皆その艦の消滅を嘆ずると共に、その殉死の二百勇士の最後に對して、沈痛の弔意を表したる事は、先の金州丸、常陸丸の遭難に對すると同じく大なりき。然るに何事ぞや、先の運送船遭難の犠牲に對して「已むを得ざる」の一言を放ちたる者あると同じく社會の一部の人士の間には驚くべき慨すべき言を耳にしたり。その意に依れば、戰時に必要なるは人にある事勿論なるも、而かも今日において人は人よりも艦船機器を惜まざるべからず。人は補充し得べし、艦船機器は今俄かに補充し難く、又之

を補充すべき正金の費途多きを如何にせん、と。吾等は此の如き思想が眞摯の考慮を経たる者にあらずして、海軍の損失に對する一の自慰たるに過ぎざるを想像し、又此の如き思想を抱ける者の極めて少數の愚人のみにあらん事を信ぜんと欲す。而も此の如き功利的思想、その者は當今社會の通弊なるを思ひ、又戰爭の武器を重んじて人を輕んずる風が、一部社會の暗流をなせるを思ひ合はせ來れば、この一事に對しても悚然として怖れざるを得ず。固より平遠艦上幾多の武士は各々その職に殉じたるの人にして、その犠牲殉死の運命は彼等の甘受せし所なるべし。吾等はこの點に關して、今特に遺憾と稱して、徒にその損害を數へず。只此犠牲に對して、この損失を小事と見做して自ら慰めん爲なるや、何なるやを知らざるも、兎に角器は人よりも重しといふが如き思想が少しにても國民の間に存するは、實に是れ犠牲となりし人々に對する一大侮辱にして、又實に團體の爲の犠牲が如何なる眞義を有すべきやを蔑視したるの適證として、長嘆せざるを得ず。若し此等

の人士にして眞に協同團結の根底を思ひ、個人の尊嚴を尊重し、而して團結の爲めの個人の犠牲が決して器械の損傷や物質の損害に比すべからざる、全く別種の重大事(社會にとりても個人にとりても)なるを考へ来れば、人命の犠牲と器械の價值とを比較商量すべからざるを知るべし。而かも尙ほ世に此の如き蒙昧の思想によりて人命の犠牲を幾分にしても輕蔑せんとする者ありとせば、是れ實に犠牲の價值と眞義とを知らざる者にあらずや。

吾等は尙ほ他の別種の方面より社會が舉國一致の根底を思はず、犠牲の價值を解せざるの一例を挙げん。先に浮田和民君が東京市教育會にて軍人の戦死と舉國一致の論とに關して演説するや、社會は起て之を攻撃して、此の如き意見は軍人の士氣を沮む者、又舉國一致の美風を破る者なりとして之を排撃したり。然り、浮田君の意見を此の如く判斷し、而して之を排撃するは、その人の意見判斷に一任せん。吾等は、その攻撃論難の事實とその理由なる戦時の必要といふ事を非難せず。

浮田氏自身の公明なる、亦喜んで有らゆる攻撃を迎へ、自ら正すべき者は之を正し、主張すべき者は之を主張し、屈服すべき者には喜んで屈服せむ。是れ浮田氏の人物を知る者にとりて自明の事なり。又文明社會が篤實にして着實なる士君子、學者を待つに當りて期待すべき所なり。然るに何事ぞや。浮田君の論旨を攻撃したる第一の人はその人物の上に直に露探の嫌疑を與へたり。その他の多くの人には又此の如き人物をして事に教育に當らしむべからずとて、その位置に對して直接の迫害を試みんとしたり。此の如き攻撃迫害は即ち戦時の必要、舉國一致の正當防衛の爲めなりとの前提によりて提出せられ、又世に迎へられたり。即ち此等難撃の人々は當今の必要の爲めには此の如き舉國一致を傷害する一人の學者を犠牲にすべきを主張したるなり。此に於て吾等は軍人その他一般に國民が戦争の爲めに自己の利益生命を犠牲にすべき要求が他の異なる方面にて、同じ必要の爲に主張せられしを見るも、而かも、その前提が全く協同、即ち舉國一致の爲の故の

犠牲を誤解したる者なるを認めずんばならず。

犠牲は總て社會生活に必要なり、身體の一部の腐爛に際しては、全身の爲に、その一部を犠牲にせざるべからず。然るに浮田氏に對する論難は多くは未だ浮田氏の意見その物の全部を知悉するに及ばず、その一言隻句を捕へて、直にその人全體を犠牲にせんとしたり。此の如きは、社會團結とは個人衷心の協同によりて始めて真正協同の意義を發揮すべきを思はず、言説上の主義綱領は未だ直ちに團結一致の眞正徹透なる勢力となり得ず、從て又一言隻句の異論は尙ほ決して社會に危害を加へ得べき者にあらざるを思はざるの結果なり。舉國一致を以て浮田氏を迫害せんとしたる人々は果して眞に自家の立場の内容につき明瞭なる自覺を有せしか。明瞭なる自覺を有したりとするも、それが果して事實上今の舉國一致の原動力をなせりとその自信を有したりしか。よしこの自信ありしとするも、浮田氏の意見が透頭徹尾その舉國一致主義と相容れず、從てその人をも社會の犠牲となさざるべから

ずと覺悟したるか。よしまた斯く覺悟したりしとするも、その人を迫害する事によりて直にその意見の根本を打破し、又社會に存在する他の諸の同種意見を排除し得べしと想像せしや。此に於て吾等は、世人が社會團結の力と要素とを見る事の餘りに、簡單に疎略にして、團結の爲めの犠牲に對する觀念の甚だしく輕薄なるを嘆ずるを禁ずる能はず。

要するに社會の團結は人格の獨立確實に、個人の自覺鞏固にして、その肝膽相照らすの團結にして、始めて舉國一致、兆億一心の偉大なる勢力を作り出だし得べし。個人が喜び進んで國の爲に自家の利害を顧みず、國家の爲に殉死するは即ち此の如き自立自覺の人の意氣より生じたる、自己犠牲の美果なり。此の如き自立と犠牲とは相待ち相合して始めて各眞正の價値を發揮すべし。今の世に多く舉國一致を唱へながら、その一面には人格の尊嚴を貴重せず、個人の犠牲を甚しく輕視して、終に一致協同の根本をも毀害せんとするは、一にこの眞義に通ぜざ

るの致す所なり。人に自立あり是に於てか始めて自らを犠牲に供すべし、自己なくして何を犠牲に供するを得べき。今の世に個人をして國家の犠牲たらしめんと求むる人々の、少くとも一部分は自己なき人、否器を犠牲にせんとする者のみ。是れ全く自己犠牲の美德をしてその立ち場を失はしめんとする者のみ。

吾等は一方にて此の如き根據なき犠牲の要求を排斥す。而かも又他の一方にては只管個人の犠牲となるを憐み若くは憤り、その極個人をして、自覺に基きたる團結の一部として、衷心の歡喜を以て自らを犠牲に供せしむるの美德を破壊せんとする者を惡む。彼等は自立の終に協同に入るべきを思はず、協同が如何に自立の内容を作り出だすと共に、又自己犠牲を必要とするを看過するを痛まざらばならず。この點に關しては別に警聲を放つて彼等個人主義、惡差別の主唱を破せんのみ。

個人ありて團結あり、團結によりて個人はその自己の内容を自覺し

得べし。自立と犠牲とは共に人生の至道にして、經緯融合して、茲に生命の要義を得べし。大偉人は自らを以て世界の師主となす、師主となすが故に、萬民の爲めに愛へ衆生と共に喜憂す。この自信ありこの博愛あるを得、その人格の中に萬有を没し、萬有の中に自己を歸入す。佛陀の菩提と慈悲是れなり、キリストの自信と愛と是れなり。人は盡く佛陀たり、キリストたるべからずとするも、此に近似するを勉めざるべからず。地上の國家は必しも直に天國の模寫にあらずとするも、尙ほ天地の至道に基かざる國家社會は終に滅の中に入らんのみ。孟子が四端の心、個人の自覺に基きて王者仁政の大道を組織せんとしたるも此が爲にあらずや。

今の世、一方にては犠牲を見る事餘りに軽く、他方にては團結の眞義を見ず。犠牲を見る事の輕きは團結を重んずる爲めなるべきも、而かも此の如き根底なき團結の勢力は必ずや惡差別の個人偏見と同じく何等の實力なくして終らんののみ。

日本の文明と世界の同情

吾等が暴慢なる怪物ロシアに對して義勇の戦を開きたる事が、世界特に英米の大なる同情を惹きつゝあるは明なる事實なり。又其の戦陣、救護等一切の處置に於て日本が北清事件以來文明の實を示し、それが單に好戦武勇のみの國民にあらざる事の幾分を世界に示し得たるも確實の事證なり。日本の文明が世界の同情を買ひつゝある事は、今日の戦争なり、今後の外交乃至通商交通に大なる利益を與ふべきは今更嗽々を要せず。

されど世界は島國裡に蟄居せる日本人の想像するよりも弘く又複雑なり。二十世紀歐米の文明は、その外面を輸入し模倣して自ら得たりとする日本人が考ふるよりは、大に深き根柢を人心と歴史とに有せり。歐米の人心はその一部は或は美術の嗜好より或は個人の交際により、或は戦争武勇の徳を見て、大に日本に同情すとはいへ、而もその大

部分又その裏面には異教の、異人種、模倣のみの民、好戦の民、外形文明にして内尚ほ恐るべき民などいふ感情を十分に擺脫せず。此等は假令ひ偏僻の想像、一片の感情なりとはいへ、世界を舞臺とし、世界環視の前に大役を演ぜんとする吾等にとりては、非常に畏るべき大勢力なるを忘るべからず。

吾等は今茲にギリシヤ以來西洋文明の由來を述べて、吾が國の文明が決して多數人民の信ずる如く爾く西洋的に化し、この點にて西洋文明國の同情或は尊敬を買ふに足らざる事を詳述するの違なし。直に歐米人士の吾が國に對する態度の二三を擧げて同胞の猛省を促さん。

蓋し日本に同情する事の最も厚きは米國人にして、英人之に次ぐ。彼等は最も多く日本人に接し、又夙に日本美術の可憐なるを見て痛く日本を好むに至りし也。而も其の同情者の多くが從來如何なる點に於て吾が國を好みしかを見よ。英米人にして日本に來遊し、歸國の後日本を賞讃する者の十中八九は、先づ開港場や大都府の醜なる和洋混

滑の文明に對して痛嘆し、之れに對比して國土山川の美、氣候風土の秀麗と村落山家の可憐なる事、乃至茶の湯や活け花の趣味深きを説く。彼等は鐵道によりて旅行しながら、鐵道なき日本を好み、ホテルに泊しながら農家藁屋の日本を讚美し、イタリヤ美術やベートーヴェン音樂の無比秀逸の美術なるを信じながら、洋畫洋樂に向て技量を試んとする新日本、本、の美術家を非難するなり。畢竟するに英米の日本愛好者は從來殆んど玩具、或は兒童を愛憐するの態度を以て吾等に對せしなり。いはその同情は極めて外觀的なり。吾等の精神、文學、信仰によりて同情相通するにあらずして、吾等の國をいつまでも世界の遊園として、吾等を園守として愛せしなり。此に於てキップリングの如く、「この少國民が憲法を有し、議會を有するは滑稽なり」との評も出て來るなり。「可憐の民なれども自負心の強きは厭ふべし」との評、彼等にして戰勝國となんには單に排外心を昂めん」との觀察も出て來るなり。彼等は彼等の愛好する少國民の健氣なる努力又戰勝を喜ばざるにあらず。されど衷

心の同情と畏敬とに至りては、尙未だ吾等に對して十分に發し得ざるなり。固より近來はハーン氏の著書、岡倉氏の「東方の理想」の如き著書が讀者を惹きて日本に對する深かき同情を喚起しつゝありと雖も、而かも、大多數の日本好きが愛讀するは、依然としてロテ一輩の小説或は紀行なるを忘るべからず。されば歐米人の吾國に對する同情といふ事も、深く精神内部に入りし根本的のものならざる事に對して吾等は常に注意し、而して徒に浮誇自ら安んずべからざるなり。

日本の大新聞にして尙英佛の親近は文明の同情にして其の結果、文明の圏外に露國は放逐せられ、日本之に代るべし等論ずるあるも多數歐米人の目には小さきジャップの奇なる空夢とや映ぜん。假令此の如きは歐米人の誤謬偏見にせよ、彼等の多數は斯かる見を持し、日本は又事實上左程多く内部より歐米的ならざるを如何せん。吾は吾文明を發揮し大に固有文化を發揚すべきや否やは別問題なれど、少くとも彼等は未だ日本の眞文明を認め居らざるは疑なき也。

然るにロシアの文明は日本人が罵る程には歐米人には劣等と感ぜられず、歴史、人種の關係上、寧ろ日本以上の親近を有せるは争ふべからず。吾等は今後世界人道の前に斯かる偏見を打破し、日本が東西文明の合致に努力せる精神に十分の同情を寄せしめざるべからず。今回の戦争に於て英米人及び或る一部獨逸人の我れに好意を寄せつゝあるは事實なり。されど我等は浮誇に流れず、自負に陥らず、此等の同情をして眞正兄弟の愛の同情、日本は人道の爲めに一大貢獻を爲しつゝありとの尊敬に至らしむべき重大の責務あることを自覺すべきなり。

(廿七年五月)

征服と感化、勝利と理想

戦争の目的は勝利にあり、而して勝利の結果は即ち征服なり。知らず、戦争の民たる我が同胞は何者を征服し、又如何にして征服に有終の

力あらしめんとするか。

人多くは云はん、「征服すべきの敵何處にありや」といふが如きは痴人の言のみ。敵は云ふまでもなくロシアにあり」と。されど進て問はん、ロシアを征服するとはその國土を占領するの義か、將た又その人民を捕虜とし奴隸とする義か、若くは又單に戰場に在るロシアの兵士を壓服するの義か。國土占領は戦争の結果として又將來の擔保として必要となる事ありとせんも、そが元來開戦の目的に非ざるは宣戦の大詔已に之を明示せり。戦争て敵國の民を奴隸とせんといふが如き思想が今日に行はるとも思はず、又此の如き思想ありたりとて實行せらるべきにあらず。又戦列にある兵士を服するとも、若し之が背後に我等の敵とすべき大勢力の嚴存して飽くまで戦はん決心と實力とあらんには、戰場の征服は未だ戦争の眞目的を達したる者といふべからざるは明かなり。此に於て我等は十分に戦争の目的を意識し、明かに敵の所在を極めざるべからず。